

長野県松本市

*ERIANA*

# エリ穴遺跡

—発掘調査報告書—

(遺物編2・第4分冊)

2019.3

松本市教育委員会

# 例 言

- 1 本書は、平成 25 年度から平成 30 年度のエリ穴遺跡遺物整理・報告書刊行事業に係る、エリ穴遺跡発掘調査報告書の遺物編 2・第 4 分冊である。
- 2 エリ穴遺跡遺物整理・報告書刊行事業のうち、平成 26 年度から平成 30 年度については、国庫補助事業として実施している。平成 30 年度の事業に関する文書記録等は以下のとおりである。
  - 平成 30 年 2 月 8 日 平成 30 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書提出
  - 平成 30 年 4 月 2 日 平成 30 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知
  - 平成 30 年 7 月 5 日 平成 30 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付変更申請書提出
  - 平成 30 年 9 月 3 日 平成 30 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付変更決定通知
  - 平成 30 年 11 月 21 日 平成 30 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付変更申請書提出
  - 平成 31 年 2 月 1 日 平成 30 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付変更決定通知
- 3 平成 30 年度の調査体制は以下のとおりである。
  - 調査担当者：三村竜一、原田健司、百瀬長秀、白鳥文彦
  - 整理協力者：柏原佳子、久保田瑞恵、竹内直美、竹平悦子、直井知導、前沢里江、宮本章江、村山牧枝
  - 事務局：松本市教育委員会 大竹永明（課長）、竹原 学（課長補佐・史跡整備担当係長）、  
竹内靖長（課長補佐・南・西外堀整備担当係長）、三村竜一（課長補佐・埋蔵文化財担当係長）、  
百瀬耕司（主査）、林 祥平（主事）、吉見寿美恵（嘱託）
- 4 平成 8 年度に刊行した概要報告書に記載された所見と、本書の所見が異なる部分が若干あるが、本書をもって最終所見とする。
- 5 本書の執筆は第 VI 章第 3 節を原田健司、第 VIII 章を事務局、その他を百瀬長秀が担当した。編集は三村・百瀬・原田が行ない、三村が総括した。
- 6 本書に関連する作業分担は以下のとおりである。
  - 遺物洗浄・注記：内田和子、柏原佳子、佐々木正子、竹平悦子、中澤温子
  - 接合など：天野雅代、市川二三夫、竹平悦子、中澤温子、前沢里江、宮本章江
  - 土器及び土製品実測・トレース：柏原佳子、久保田瑞恵、竹内直美、竹平悦子、中谷高志、村山牧枝、  
望月 映、百瀬長秀、八坂千佳
  - 石器実測・トレース：バリノ・サーヴェイ(株)、榎ラング、白鳥文彦、原田健司
  - 遺物写真：宮嶋洋一
  - デジタルトレース・版組・データ入力：直井植之介、直井知導、前沢里江
- 7 本書掲載の土器・土製品の表現方法は以下のとおりである。
  - (1) 土器の実測図の縮尺は 1 : 4 を原則とし、異形土器のうち透孔のある注口土器・香炉形土器・人面付きの土器・蓋形土器・多孔底土器は 1 : 2 とした。拓影は 1 : 3 とした。補遺で掲載した土製耳飾及び土製品はすべて 1 : 2 とした。原則と異なる縮尺の場合は、個別に示した。
  - (2) 写真は約 1 : 3 を原則とし、例外とした個体は個別の縮尺を記した。
  - (3) 欠損部分はスクリーン「 $\square$ 」で、剥落痕跡はスクリーン「 $\equiv$ 」で表示した。
  - (4) 特記すべき胎土は第 1 分冊の土器に準じて、以下のように区分して断面図周辺に示した。
    - 無：標準的（在地的）胎土
    - △：標準的ながら、岩石・鉱物が少ない胎土
    - ◎：標準的ながら、岩石・鉱物が著しく多い胎土

◎：ローリングを受けたガラス質石英を多含する胎土

▲：後期緑帯文土器と類似した胎土

◆：晩期末条痕文系土器に類似した胎土

■：その他、違和感のある胎土

- (5) 塗彩がある場合は、断面図・側面図の周辺の塗布された面の側に記号を付した。赤色塗彩は、「◀」、黒色塗彩は「<」である。顕著な2次焼成が認められる場合は、断面図・側面図周辺に「☆」を付した。
- (6) 文様の文字表記は、「文様」を使用した。
- 8 本書掲載の石器実測図の表現方法は以下のとおりである。
- (1) 実測図の縮尺は小形石器2:3、大形石器1:3を原則とし、砥石と一部の石棒は1:4、石皿は1:5で図化した。原則と異なる縮尺の場合は、個別に示した。
- (2) 研磨・摩耗の範囲は矢印線「←→」、弱い研磨・摩耗の範囲は矢印線「↔」で断面図に示した。
- (3) ツブレ部分はスクリーン「☒」、付着物はスクリーン「■」で平面図に示した。
- 9 土器の個体番号は以下のとおりである。
- (1) 廃棄場出土土器はグリッド別の通し番号としたが、表記の簡素化のため、グリッド名を次のように略記した。廃棄場E1該当11グリッドのうち、N9E3はEa、N9W0はEb、N9W3はEc、N6W0はEd、N6W3はEe、N6W6はEf、N3W3はEg、N3W6はEh、N3W9はEi、N3W12はEj、S0W9はEkと表記した。廃棄場E2該当7グリッドも同様に、N3W15はEm、N3W18はEn、S0W12はEo、S0W15はEp、S0W18はEq、S3W15はEr、S3W18はEsと表記した。廃棄場M1該当5グリッドのS0W21はMa、S0W24はMb、S0W27はMc、S3W21はMd、S3W24はMe、M2該当5グリッドのS3W27はMg、S3W30はMh、S6W24はMi、S6W27はMj、S6W30はMkと表記した。
- (2) 廃棄場以外の土器は、谷状低地出土土器には頭にNI-を、南微高地出土土器には頭にSh-を付して、通し番号を与えた。
- (3) 廃棄場以外から出土した、特記すべき使用方法を示す土器と異形土器は、頭にp-を付して、種類別にまとめて番号を与えた。
- (4) 以上の表記の具体例を挙げれば、Ee-17は廃棄場EのN6W3グリッド出土の17を、Mi-6は廃棄場MのS6W24グリッド出土の6を、NI-12は谷状低地出土の12を、Sh-3は南微高地出土の3を、p-31は異形土器31を、それぞれ指す。
- 10 本文の記述の中で第1分冊～第3分冊掲載の資料を取り上げる場合、初出の個体番号の後ろに、第1分冊は[①]、第3分冊は[③]のように分冊名を記した。例えば、第2分冊掲載のS2-1はS2-1[②]とした。
- 11 異形土器の個別別諸情報(出土地点、法量など)は、付録のCD中の一覧表をご利用頂きたい。
- 12 第4分冊作成に当たり、遺物を実見した多くの研究者から、指導や有益なコメントを賜った。東北地方の影響を受けた土器に関しては小林圭一氏と高橋龍三郎氏に、釣手土器や異形台付土器に関しては蜂屋孝之氏に、それぞれご指導いただいた。中でも花弁状雲形文をもつ土器の抽出は高橋氏の教示に基づく。それらを十分に理解しきれないまま執筆したので、誤りも多いかと思われるが、それは執筆者の責任である。そのほか、ご援助いただいた方々の御芳名を以下に記して、感謝申しあげる。
- 会田 進、阿部芳郎、長田知也、佐藤雅一、島田哲男、中沢道彦、矢野健一、綿田弘実
- 13 本書掲載の土器・石器などの遺物及び調査の記録類は、松本市教育委員会が保管し、松本市考古博物館(〒390-0823 長野県松本市大字中山3738-1 TEL0263-86-4710 Fax 0263-86-9189)に収蔵している。

# 目次

例言	
目次	
第Ⅵ章 縄文時代の遺物	1
第2節 土器	1
1 縄文時代中期の土器	1
2 縄文時代後期～晩期の土器	1
3 特記すべき使用方法を示す土器	21
4 異形土器	21
5 土器などの補遺	32
土器・補遺の図版(図1～92)	34
第3節 石器と石製品	126
1 資料の概要	126
2 資料の解説	129
3 考察・分析	149
石器の図版(図105～167)	160
第Ⅶ章 集落の構造とその背景	223
第1節 集落の構造と変遷	223
1 中期の集落	223
2 後期前葉以降の集落	224
第2節 遺物の廃棄とその背景	230
1 土器の廃棄と廃棄場の成立	230
2 土製耳飾の廃棄とその背景	231
3 その他の遺物の廃棄	233
集落構造の図版(図168～181)	236
第Ⅷ章 総括	249
引用参考文献一覧	254
写真図版	
全4分冊の構成	
付録CD収録内容	
抄録	
別図1, 2	



## 第VI章 縄文時代の遺物

### 第2節 土器

#### 1 縄文時代中期の土器

縄文中期の土器の大半は住居や土坑出土である。その主要個体は遺構の帰属時期決定材料として、第1分冊・第2分冊で報告した。中でも2号住居出土土器は、中期中葉Ⅲ期にほぼまとまりそうで、良好な一括資料と考える。ただし、2号住居は出土個体数が多く、半完形品以上でも半数程度の掲載に留まった。また、南微高地には中期土器がまとまるグリッドが若干存在したが、それらは掲載できなかった。

縄文中期土器の中から、特異な器形で注目される釣手をもつ深鉢を報告する。釣手部分の断片ばかりだが、19点ある(写真図版19下段)。アーチ形の釣手で、頂部につまみ状の突起がつく例を含み、中期後葉末の中南信地域に特徴的だとされる。釣手の横断面の形態はA・B二種類に大別できる。タイプAは平たい楕円形の粘土帯をベースにし、その外面側の中央に太い隆帯を付加するので、「凸」の字形の横断面を呈する。この付加によって、縦方向にも十分な厚みができる。タイプBは台形か縦長の長方形で、形態は単純である。どちらも縦方向(上下方向)に厚みのある点が共通する。タイプAに付加する隆帯は二者がある。2本の丸い粘土帯を1本の隆帯にねじり合わせるAaと、単純な隆帯のAbで、両者とも隆帯の側面やベースの粘土帯外面側に点列(刺突列)を加える。Aaの手法を用いた突起や把手は中期後葉Ⅰ～Ⅱ期に見られる。タイプBも形態が細分できる。外面側に平坦面を作ったり、小突起などを加えて装飾効果が窺われるBaと、縦長の楕円形に近く、ややだらけたBbである。Ba・Bbとも側面に点列を加えるか、沈線の区画内に縄文を充填する。点列はタイプAと共通の装飾で、沈線区画内の縄文は、加曾利E式に連なる要素だろう。タイプAとタイプBは別系統なのか、それとも前者から後者へ変化するのか。断片からは判断できないが、タイプAbの類例が後期前葉まで継続する可能性が指摘されており[蜂屋孝之2004]、前者の可能性のほうが高いかもしれない。釣手付きの深鉢はこれまでの見込みより息が長いのだろう。釣手付きの深鉢は南微高地東側(中期包含層未調査の範囲)や谷状低地の廃棄場から、散漫に出土する。後期以降の包含層への混入品と判断するが、中期土器の分布とは明らかに傾向が異なる。

#### 2 縄文時代後期～晩期の土器

##### (1) 概観

谷状低地縁辺の廃棄場Eと廃棄場M出土土器を中心にして、縄文後期～晩期の土器を報告する。廃棄場成立(後期後葉)以降の有文土器に重点を絞り、さらに類例の多い中ノ沢B類型はかなり省略した。その結果、入組文・三叉文系統の土器や異系統の土器に偏った資料提示となり、第1分冊・第2分冊のように、網羅的な報告ではない。また、廃棄場以外の包含層出土土器は、一部を掲載するに留めた。

後期初頭の称名寺式土器は断片資料に留まる。後期前葉Ⅲノ内式～中葉加曾利B2式土器の出土量は少なくないが、完形品は弱体で、土坑406(加曾利B1式前半)以外に良好な遺構一括資料を欠く。また、注口土器の多さが眼を引く。

後期中葉から登場する羽状沈線文系統の土器については、飯田市中村中平遺跡[馬場保之・百瀬他2011]の知見がほぼ裏付けられる。確実に上ノ段3式に帰属するものを含む釣手土器が多出する。「フ」の字文鉢の浅鉢J17-5[①]は第4段階の磨消縄文系突起[百瀬2002]を貼付するが、その直下に横長瘤も加える。上ノ段3式の指標の横長瘤は、第6段階の磨消縄文系突起を併用することがわかっていたので、J17-5の瘤

はその祖形であることが判明した。第1分冊ではJ17-5を上ノ段2～3式と報告したが、横長瘤の祖形をもつ上ノ段2式だと、判断を変更する。これまで貧弱だった上ノ段2式は、J17-4[①]とともに全貌が判明する個体に恵まれた。上ノ段式の砲弾形深鉢や注口土器が貧弱なのも特徴である。

後期末葉～晩期前葉の隆帯文系土器は非常に充実している。完形に近い土器を含み、量も断然多いが、中村中平遺跡の知見を大きく超えることはない。中村中平遺跡で目立った平縁壺形鉢や平縁突起浅鉢など少数派の器種は貧弱で、バリエーションは不足する。掲載できなかったが、隆帯文系土器と確実に共存する注口土器が存在する。東海以西系譜や後期安行式は少量に留まるが、いわゆる瘤付き土器が非常に多い。第3段階[高柳圭一1988]のEh-41、Ek-25、第4段階のEj-16など、後半を中心に、故地の規格に従った製作品のようである。

晩期前葉～中葉にかけて、東北～関東を起源とする入組文・三叉文や雲形文の影響を受けた精製土器が主体となる。亀ヶ岡式や晩期安行式そのものに近いとの指摘を得た土器も少なくない。大洞B1式(Eb-58、Ee-52・Ee-53、Eh-55)、B2式(D457-10[②]、Eb-59、Mc-1)、B式(Ei-51)、BC1式(Eb-81)、BC式(J13-133[①]、J13-G21[①]、Eb-82、Eb-85・Eb-86、Nl-12)、BC2式(Eq-56、Me-15)、BC式新(Wi-17[②]、C1式(J13-137[①]、J13-138[①]、J14-G9[①]、J14-G10[①]、J26-G4[①]、Wb-19[②]、Ee-93、Sh-5)、C1式新(Ee-94)、安行3b式(Eq-33、Nl-8)などがそれで、長野県内では類例がほとんどない前浦式もある(Md-50、Sh-2)。とは言え、主体を占めるのはそれらを改変して独自に消化した土器で、そこに北陸・御経塚式の強い影響が加わる。入組文・三叉文を取り入れた隆帯文系土器は僅かに過ぎない。独自の消化といっても伝統の隆帯文系土器をベースに置いてのことでなく、他地域起源の系統をベースにして若干の改変を加えたと考えざるをえない。それが晩期初頭から甲信地域の精製土器の中核を占める。その中から変遷過程が追尾できる器種や図柄を幾つか取り上げて、後述する。

晩期後葉の浮線文土器も一定量出土するが、そのほとんどは氷1式～Ⅱ式である。女鳥羽川式～離山式は貧弱で、氷1式も浅鉢は僅かしかない。甕や深鉢が主体だが、整形に手抜きが目立ち、細密条痕工具は不整形である。遠賀川式土器や条痕文系土器が伴出する。

精製土器と共存する粗製土器は基本的に無文で、突起や口唇部圧痕くらいしか装飾はない。後期前葉～中葉と晩期後葉にだけ、1条の隆帯や細密条痕など若干の装飾要素が加わる。装飾要素の乏しさから、今まで時間差を読み取ることができなかったが、器形や整形技法の観察ができ、編年の見通しができた。

以下、晩期初頭～中葉を中心に注目すべき土器を取り上げ、地域性を理解する手掛かりとしたい。

## (2) 晩期初頭～前葉の土器の理解に向けて

ア 隆帯文系土器群・中ノ沢B類型 [S12-6[②]、Eb-22、Eg-14、Eg-16、Ei-41、Em-4、Md-8、Mg-1]

隆帯文系土器群の後半、中ノ沢B類型[馬場・百瀬他2011]の土器の装飾は、口縁部の1条隆帯と付随する突起にほぼ限定される。口縁部に入組文・三叉文を併用するのは、隆帯文第4段階のS12-6、Eb-22、Eg-14、Eg-16、Ei-41、Em-4、Md-8、Mg-1くらいで、第5段階の例はなく、これは中村中平遺跡でも同様だった。それらに採用されるのは玉抱三叉文の構図で、縄文の併用は稀である。Eb-22、Mg-1は隆帯で囲ったり区切ったりした区画の中に三叉文を充填しており、御経塚式の三叉文との関連が求められるだろう。高台付浅鉢高台部に入組文・三叉文を採用する例があり、これが隆帯文系統の浅鉢に取り付け可能性は十分にある。高台付浅鉢の多さは甲信～駿河地域の特徴であろう。ただ、接合・復元できた例は、口縁部に隆帯に代えた沈線が巡るEa-56のみである。高台部上限に導入される圧痕付隆帯は、隆帯文系譜の要素だろう。装飾に富む高台部だが、どの系統の器種の底部なのか、特定が難しい。

これまでは隆帯上の圧痕の相違を重視して、中ノ沢B類型の第4段階と第5段階を識別してきた。第4段

階は隆帯に直交する工具を用いた圧痕、第5段階は隆帯に並行するユビ圧痕である。ところが、エリ穴遺跡には隆帯と並行に置いた工具による圧痕(D字状圧痕)が少なからず存在し、識別に苦慮する個体が生じた。隆帯上に刺突を加えたり、方向の読み取れない圧痕を加える例が、分布域の周辺にはある。他の器種に隆帯だけを転写する場合も同様であった。それに似た状況が、隆帯文系土器の中核的遺跡であるエリ穴遺跡にもある。

中ノ沢B類型の土器の大多数は深鉢である。口縁部以外は無文なので、底部まで接合できた例に恵まれず、プロローションすら把握しきれなかったが、エリ穴遺跡でようやく全体像が推測できる平縁隆帯文深鉢5個体を得るに至った。Ei-45は底部から1cm程度まで直立し、そこから外湾して立ち上がる。体部中央付近が丸く膨らみ、いったん内傾したのち、再度外反して口縁部に至る。一方、Eq-15は底板の外縁が突出し、そこから内湾して立ち上がる。体部の膨らみはほとんどなく、概ね直線的に開いて口縁部に至る。Ei-45を「括れ形深鉢」、Ei-45を「外傾形深鉢」と呼ぶことにする。括れ形深鉢が7割程度、外傾形深鉢が3割程度であろうか。外傾形深鉢は小形品が多い。底板部分の張り出す底部形態も特徴的である。底まで確認できるD144-6、Ej-18も同様で、Ee-37だけは単純に直線的に立ち上がる。その立ち上がり部分はフラットに仕上げられるが、ケズリの後にナデで整形したと推測する。上ノ段式の深鉢J17-1[①]、J17-3[①]、浅鉢J17-4、J17-5は単純に直線的に立ち上がり、鍵ノ手文をもつ晩期中葉の深鉢S2-1[②]も同様である。この外反して立ち上がる底部形態は隆帯文土器に特有の特徴の可能性があるが、確認・比較できる個体数が少なすぎて、断定はできない。

隆帯文系土器の成立と同時に若干遅れて、土製耳飾着装が普遍化する。隆帯文系土器の終焉と土製耳飾の終焉はほぼ同時期の可能性が高い。環形土製耳飾古段階(後期末葉)の貼瘤直線文系統には、中ノ沢K式土器[馬場・百瀬 他2011]で標準的な楕円や直線の横帯文が多用される。環形土製耳飾新段階前半(晩期初頭)の主体を占める巴玉抱三叉文系統・短線玉抱三叉文系統は、玉抱三叉文の仲間を隆帯文系土器と共有する。時間的に整合し、分布域と装飾を共有する甲信地域の土製耳飾は、隆帯文系土器と命運を共にするかのようである。

#### イ 佐野B群深鉢 [J13-23[①]、Eq-27、Me-2]

J13-23とEq-27は体部が緩く膨らみ口縁部はやや開く。特にEq-27は隆帯文系深鉢Ei-45に近いプロローションをもつ。文様帯は口縁部限定で、Eq-27は広く、J13-23は狭い。Me-2も同様の器形だが、広い文様帯は口縁部から肩部にかけて、緩い湾曲を挟んで設定される。口縁部文様帯が拡大解釈されたと考え、Eq-27と同一構成だと見る。これらの器形や文様帯構成は、山ノ内町佐野遺跡の報告[永峯光一 他1967]で設定されたB群のうち、BⅠ'類とBⅡ類の復元図で示された深鉢に一致する(図79)。「佐野B群深鉢」と呼ぶことにする。その中には肩部文様帯を設定するものがあるが、Eq-27などはそれを省略したと理解する。

Eq-27とMe-2は波状縁で、J13-23は板状の突起が波状縁と同様の効果を生み出す。主要なモチーフの上限は、Eq-27は隆帯、J13-23は弧線で画した縄文帯である。Me-2にも波頂を繋ぐ隆帯が導入されるので、それより下位を主要モチーフと見れば、Eq-27と同一構成である。下限はEq-27とJ13-23が水平の隆帯、Me-2は弧状の隆帯である。

佐野遺跡出土の佐野B群深鉢も波状縁で、口縁部主モチーフの上限は隆帯もしくは弧線で画した縄文帯、下限は沈線画した縄文帯、肩部文様帯はその下位に設定される。波状縁の頂部に突出する小突起が付加されるが、これは安行式波状縁深鉢系譜の要素だろう。J13-23の口縁部上限の弧状の縄文帯も、晩期安行式からの転用であろう。口縁部上限の隆帯文はこの縄文帯との置換と考える。隆帯文の伝統的貼付位置とも一

致するので、転写は容易だろう。口縁部文様帯の下限、主モチーフ下限も隆帯と縄文帯が置換されたと見たい。なお、後述する鍵ノ手文の祖形と考える東京都町田市なすな原遺跡出土土器や御経塚式後半以降の深鉢(図79)も、口縁部文様帯下限に縄文帯を設定するのが基本だが、佐野B群深鉢と共通の構成であろう。

J13-23は波頂部と波底部に近似図柄の円や弧を置いて、主文様帯を縦位に分割する。Me-2は波頂部縦隆帯とそれを囲む半円弧で、Eq-27は波頂部の縦位蛇行線と波底部の縦線とで、それぞれ主文様帯を縦位に分割する。佐野遺跡の佐野B群深鉢(図79)も同様である。佐野29は波頂部の巴に絡む三叉文構図と波底部斜隆帯で、それ以外も波頂部に置いた巴を核とする構図や、それを簡略化した入り組む三叉文で、主文様帯を縦位に分割する。付加的な装飾には相違があるものの、J13-23など3点は文様帯の縦横の構成が、佐野B群深鉢と一致する。

Me-2の主モチーフは縦隆帯を挟んで三叉文を左右対称に配置する。土製耳飾に導入される短線玉抱三叉文と同趣であろう。それを弧線と包むが、これを縦位に連ねればEq-27の図柄になる。欠損で不明瞭だが、Me-2の主モチーフ上限の隆帯と口縁端部の間には、渦を中心に置いた玉抱三叉文が置かれるのではなからうか。口端と隆帯の間が広く、隆帯上の圧痕は直交方向に鋭く、隆帯文としては第4段階最古、第3段階に直結する様相である。J13-23の主モチーフも短線玉抱三叉文の一種と見ることができ、隣接する三叉文同士は対向配置される。入組文に伴う斜位の配置の三叉文を意識したのだろう。隆帯上の圧痕はMe-2に一致するので、やはり第4段階の隆帯文である。ただし、文様帯下限への貼付は、伝統の姿ではない。Eq-27は主文様帯を縦位に貫く蛇行線、それから発する多数の三叉文、それを包み込む別の蛇行線という組み合わせで、類例を知らないが、Me-2との共通性は指摘したとおりである。隆帯上にはD字状圧痕が加えられ、文様帯下限の隆帯では所々で横走(縦貫)する短線に置き換えられる。文様帯上限の隆帯上位側の裾には1条の沈線の痕跡が残る。第4段階前半の隆帯文であろう。以上、隆帯文から見ればこの3点は第4段階で、長野市宮崎遺跡2号住居一括資料と共伴した第5段階の隆帯文深鉢より明らかに古い。晩期初頭と考えたい。Eq-27、Me-2の沈線で玉抱三叉文を包み込む構図は、御経塚式前半の深鉢に特徴的な「フ」の字状沈線文[酒井重洋2007、西野秀和2008]と同趣で、左右線対称の構図なのも共通であろう(図79)。隆帯文浅鉢Eb-22等も含め、相互のつながりの深さを示すだろう。

佐野遺跡出土の佐野B群深鉢に採用された隆帯文上の圧痕は、円管の刺突に置換したり、形状が不明瞭なものばかりである。隆帯文系土器分布域末端の、規格から外れた隆帯文で、時期対比の根拠には使えない。一方、主モチーフの巴には三叉文が接合し、入組三叉文(連鎖する三叉文)と見ることができ、肩部文様帯に描かれるのはすべて宮崎型三叉文[中沢道彦2004]の仲間である。これらはEq-27よりも新しい様相を示し、宮崎遺跡2号住居と同一段階に位置すると見たい。佐野B群深鉢はエリ穴遺跡出土例を古相、宮崎型三叉文を併用する佐野遺跡出土例を新相と考えたい。なお、宮崎型三叉文はエリ穴遺跡ではEe-77、En-1、Nl-28など僅かしか類例がない。

ウ 外屈縁深鉢 [古相: J13-40[①]、Ep-69、Eq-43、Mg-2、中相: Eq-60、Nl-6、新相: Ep-86、Eq-44、Md-23]

Eq-60は鋭く短く外屈する口縁部を無文帯とし、大きく張り出した体部上位に最大径をもつ深鉢である。口縁部と肩部の境界の屈曲部に巡る隆帯1条は、隆帯文系要素であろう。無文帯を置いて肩部に主文様帯が設定される。「外屈縁深鉢」と仮称するが、同一の形態と文様帯構成をとる類例が若干ある。

Eq-43とMg-2の隆帯には深いD字圧痕か縦圧痕が加えられ、所々でピッチの異なる圧痕(Eq-43)や縦貫短線(Mg-2)に置き換えられる。佐野B群深鉢Eq-27肩部の隆帯と同趣で、第4段階の隆帯文の特徴を備える。主文様帯の構図は確定できないが、Eq-43は円か巴を中心に置く玉抱三叉文の可能性がある。Mg-2は沈線

で囲んだ短線玉抱三叉文が、主文様帯から上位にはみ出しているが、この図柄は佐野 B 群深鉢 Me-2 と共通である。J13-40 は隆帯を欠くが、上下の縄文帯に挟まれた主文様帯には、横位連鎖型入組文に斜位の配置の三叉文を組み合わせる。Ep-69 も同様の組み合わせで、屈曲部には僅かな段を設けて何らかの構図を挿入する。この 2 点は口縁部の屈曲が確認できず、器形が若干異なる可能性もある。以上 4 点を古相と考える。

屈曲部の隆帯上にユビ圧痕を加える Eq-60、Nl-6 は、第 5 段階の隆帯文なので、Eq-43 などに後続する。Eq-60 の主文様帯は 2 段に別れ、上段は二重の玉抱三叉文を沈線で囲み、下段は入り組む鍵ノ手文が連続する。Nl-6 の主文様帯には背中合わせの二重弧線を合体させたような構図に縄文が充填される。この 2 点は中相である。

屈曲部の隆帯を別要素に置換したのが Ep-86、Eq-44、Md-23 で、隆帯文の衰退と連動した現象だと考えれば、中相に後続する様相（新相）の可能性があるだろう。Ep-86 は短線を加えた縄文帯に置換し、Md-23 は斜線で区切った磨消縄文帯に置換する。Eq-44 は背中合わせの弧線を加えた縄文帯で、Nl-6 の主文様帯の構図と関連するだろう。Eq-44 の主文様帯の連続弧線構図は Nl-6 を上下に分解すれば成立する。この器種の主文様帯はいずれも広いと思われるが、Md-23 は狭く、描くの途中で放棄したように見える。

小形の外反縁丸底鉢 S2・G33 [②] の肩部文様帯は 2 帯に細分される。その界線は中間に点刻列を充填した 2 条の沈線帯で、「点列界線帯」と呼ぶ（第 1 分冊 P229 参照）。肩部文様帯には菱形構図が並ぶ。菱形の各辺は弧線気味で、Nl-6 主文様帯の連続弧線の中間部分を拾えば、こうした菱形が成立しそうだ。口端部には正面にだけ突起を貼付するが、その裾には三叉状の切り込みが入り、大洞 C1 式の装飾と一致すると指摘を得た。外屈縁深鉢の主文様帯の図柄の延長には、S2・G33 が置けるかもしれない。

## エ 玉抱三叉文の仲間

晩期安行式では起点終点型入組文や横位連鎖型入組文に、入組部を挟んで三叉文が斜位に配置される例が断然多いようである。入組三叉文も同様で、入組部分周辺だけを取り上げれば、点対称の配置だといえる。一方、北陸・御経塚式の玉抱三叉文は、玉を挟んで左右対称（線対称）に配置される。玉が巴や渦でも三叉文の配置は左右対称が断然多いようである。

土製耳飾に多用された玉抱三叉文は、土器にも使用され、入組文・三叉文の中でも中核的である。外反縁で丸底の小形浅鉢肩部に描かれる例が多いが、ウで取り上げた外屈縁深鉢肩部、高台の付く鉢の高台部周辺、単純に外傾する深鉢口縁部などを画面とする場合もある。玉抱三叉文は円や縦線などを「玉」に見立てて中心に置き、その左右（両脇）に背中合わせの三叉文 1 対を配置するので、左右線対称の図柄が基本である。玉が渦や巴であったり、玉の両脇の三叉文が斜位の配置を取る場合は、左右非対称（時には点対称）だが、その類例も少なくない。以下、器種を越えて採用される玉抱三叉文の仲間を取り上げる。

【左右線対称の玉抱三叉文】 [古相：We-15 [②]、M3-12 [②]、Eq-34、新相：U5・G32 [①]、Eb-60、Eb-64、Eq-36、Es-48、Me-9、Ep-76、Es-51、Mj-11、(Eq-44)、(Eq-60)]

隆帯文の様相から晩期初頭と考えた外屈縁深鉢 Mg-2 は、短線の玉を挟んだ 1 対の三叉文を袋状の沈線で囲った。We-15、M3-12、Eq-34 などは、それと同題の構図を主モチーフとし、上下を沈線で画した狭い肩部文様帯に施文する。同心円や横位沈線を囲む円を玉とし、( ) 状の弧線から発する三叉文で挟み、その外側を袋状の半楕円で包む。これを 1 単位として左右に連ね、単位の間には上下 1 対の三叉文を挿入する。「上下繰込三叉文」と呼ぶが、これは後述する晩期中葉の花弁状雲形文に継承されてゆく。玉に用いられる横走の直線を囲む楕円構図を「3 条楕円」構図と呼ぶが、中ノ沢 K 式隆帯文深鉢の口縁部横帯文の図柄に一致し、系譜がつながる可能性があるうえ、晩期中葉まで継承される可能性もある。これらの主モチーフは上下の界線とは接続しない。環形土製耳飾の玉抱三叉文は、最古の新 1 段階は三叉文が独立していたが、次第に他の

要素と接合する範囲を広げると考えた。それに照らせば、その最古の様相に対応する。M3-12は口縁屈曲部に右手の刺突を加えた降帯を貼付するが、第4段階の降帯文であろう。これら3点を古相と考える。

We-15の玉は楕円で、その左右と上位に三叉文を置き、それを包む袋状沈線はMg-2に似たフラスコ形となり、これを横位に連ねる。正面には短線を囲む楕円構図を置き、それをさらなる楕円で囲む。図柄が包み込む沈線で完全に閉ざされており、他の要素との接合を拒絶するとみれば、古相の中でも最古の様相を示すのではないか。

外屈縁深鉢Mg-2に後続すると考えたEq-60は、玉抱三叉文を( )状の弧線で囲み、その外側を三叉文で挟み、さらに横長の袋状構図で囲むという、二重の囲みをもち、それらの一部が界線に接している。U5・G32は中央の玉に三叉文が接合し、それを袋状の弧線で囲む多重の図柄だと推測する。構図は界線に接合する。土製耳飾の玉抱三叉文の変遷から見れば、中央の円に三叉文を接合させるのは、新3段階以降の様相に対応するだろう。外反縁で丸底の小形浅鉢Es-48の肩部には、上下を沈線で画した主文様帯が設定される。図右側には3条楕円構図を挟む玉抱三叉文が描かれるが、三叉文は界線に接合し、玉抱三叉構図を囲む袋状沈線はない。左側は玉抱構図になっていないが、追い込み方式で描いた場合に生じがちな割付ミスなのか、それとも玉抱構図は部分的にしか残らないのか。この左側の三叉文の下位にはEq-44のような背中合わせの弧線の末端が確認できる。玉抱三叉文を意図的に片側にだけ採用したのがEq-36である。三叉文の突出部を二重の袋状沈線で包み込んだ構図を横に並べている。深鉢の底部で高台はない。近似した構図はEb-60やEb-64にも描かれる。いずれもEs-48と同段階ではなかろうか。平面楕円形で波状口縁の可能性もある浅鉢Me-9は、巴を玉とし、両脇の三叉文が巴に接合し、その足が左右に延伸して玉抱三叉文全体を囲い込んでいる可能性がある。二重の囲みも片側だけの玉抱三叉文も古相からの変化だろう。以上は新相と考える。

同一個体の可能性があるEp-76とMj-11、Es-51は、外反縁で丸底の小形浅鉢で、1～2条の縦線を弧線で( )状に囲んでいるが、その外側には三叉文はない。横帯文として背中合わせの弧線が配置されるが、これはEq-44の弧線の系譜で理解できる。諸要素はすべて界線に接続する。Es-51の上限界線の上位には沈線間の点刻をミガキで潰しているが、羊歯状文から派生する図柄である。3点とも玉を挟む三叉文を失っており、玉抱三叉文とは言いかねる。新相Eq-36とは別タイプの変質と考え、これらも新相とする。

袋状沈線で囲まれた玉抱三叉文が、その袋を変化させて界線と接合するようになり、単位文間に弧線を導入するに至るといふ、古相～新相への変遷案である。晩期初頭～前葉の幅の中に置きたい。

なお、外反縁で丸底の小形浅鉢J40-I(①)も、点列界線帯に画された肩部文様帯に、玉抱三叉文らしき構図を描く。中央の玉は3条楕円構図で、三叉文は相互に接合する。口縁部内面には2条の沈線が巡るので、晩期中葉の様相と見たい。図柄の全体像は不明で、玉抱三叉文とは似て非なる存在ではなかろうか。

【左右非線対称の玉抱三叉文など】 [古相：Wf-18(②)、Ee-60、Ee-68、Eg-27、Eg-30、Ej-23、Ek-32、Ep-73、Mj-14、新相：We-16(②)、Mj-21、Mk-2]

Mj-14は中央の玉が巴で、非線対称の構図である。下限界線側から発する左側の巴は三叉文に接合し、上限界線側から発する右側の巴は三叉文には接合しない。この巴玉抱三叉文を袋状の弧線で包んで1単位とし、それを横位に並べ、単位間には上下縦込三叉文を配する。上限界線は降帯であることと合わせ、左右線対称のM3-12とほぼ同一の古相と見たい。

玉の両脇に三叉文を斜位に配置するタイプの深鉢Ee-60、Ep-73は、施文部位も描線も異なるが、点刻やそれを囲む弧線を玉とし、諸要素は界線にも相互にも接続しないので、左右線対称玉抱三叉文の古相に対応するだろう。外反縁小形浅鉢Ek-32は、斜位に配置された三叉文が中心の点刻に絡みつく構図で、大洞B2式に由来するかと推測する。その1単位の間には上下界線に接する斜線が挿入され、文様帯は縦位に分割さ

れてしまう。この分割方法は宮崎型三叉文と共通で、関東方面に類例がある。Wf-18 と Ee-68 は不明瞭ながら入組文周辺に刺突が残るが、それは Ek-32 と同様の点刻の玉ではなからうか。これらは Ee-60 に後続するが、古相の内に留まるのではなからうか。

Eg-27、Eg-30、Ej-23 などの内湾気味の深鉢は、玉の両脇の三叉文を相互に接合させる。Ej-23 は小さな点刻を玉とし、両脇の三叉文は左右に延伸するので、隣の三叉文の末端と接合するだろう。晩期安行式系譜の口縁部弧線を導入した Eg-27、Eg-30 も同様の三叉文だが、中心にあるべき玉の要素を省略したと見る。三叉文から伸びる長い足同土を接合させる構図は、御経塚式に類例が多いが、八日市新保式の図柄を継承するためのようである。それならこれらは古相に対応しそうである。

同一個体の可能性がある Mj-21 と Mk-2 は十字形に挟った四叉構図を玉とし、両脇の三叉文は点列界線帯に接続させて斜位の配置とする。それだけでなく、対向する三叉文の足の一角を三叉状に挟んで接合させてしまう。界線帯の点刻は横長の刺突で、点刻としては古い様相の可能性がある。四叉の図柄は大洞 BC 式に類例があるという。三叉文を繋げる構図とあわせ、Ee-60 に後続し、左右線対称玉抱三叉文の新相に対応するのではなからうか。We-16 は横長の 3 条楕円の両脇に斜位の配置の小ぶりの三叉文が描かれる。三叉文が足を伸ばすのではなく、玉が広がるので少々異相だが、口端部の B 突起には裾の切り込みなどの加飾がない。これも新相に対応しそうである。

オ 起点終点型入組文と横位連鎖型入組文 [起点終点型: Ee-54、Ee-69、横位連鎖型古相: D210-2[②]、D433-5[②]、Eb-63、Eg-26、Ep-70・Ep-71、Eq-30、Mj-10、Nl-3、(J13-40)、(Ep-69)、同新相: Eq-37、Mj-20、Nl-9]

起点終点型入組文は後期末葉の瘤付土器を代表する構図で、エリ穴遺跡でも少なからぬ類例がある。大洞 B 式や安行 3a 式では、その入組部を挟んで三叉文が斜位に配置されるが、エリ穴遺跡ではそうした晩期の類例は、Ee-54 や Ee-69 など少数に留まる。

横位連鎖型入組文の入組部を挟んで三叉文を斜位に配置するのは、安行 3 式で多用されるが、エリ穴遺跡でもひとまとまり存在する。その中には入組部の中心に点刻や円形透孔を置くものがあり、点対称配置の玉抱三叉文だとも言える。単純に外傾する浅鉢 Eg-26 と Ep-71、浅鉢の高台部 Eb-63 と Eq-37、深鉢 Ep-70 等が該当する。Eb-63 は高台部と体部間の屈曲部に D 字状圧痕を加えた隆帯を巡らせ、左下側の三叉文の先端を袋状の弧線で包むので、隆帯文系要素と御経塚式に連なる要素を持つ。袋状の沈線は部分的な包み方なので、省略傾向だろう。Ep-71 は内面に段を持ち、突起と連動した三叉文を加えるが、これも御経塚式前半の要素だろう。Eg-26 は入組文の斜行部分の両側に沈線を付加し、起点終点型入組文に似せている。入組部周辺には縄文に重ねて刺突を充填する。Eq-37 の諸要素は所々で接合し、図柄が乱れるのは個別の手抜きか、退化傾向なのか。Eq-37 以外は古相と見たい。

中心に点刻などを置かない横位連鎖型入組文の D433-5 は、安行 3a 式の波状口縁深鉢と思われ、三叉文を併用しない。D210-2、Eq-30、外唇縁深鉢の項で取り上げた J13-40、Ep-69 は、横位連鎖型入組文入組部の脇に三叉文を斜位に配置するが、いずれの要素もどこにも接しないので、これらも古相だろう。

これに対して Mj-10、Mj-20、Nl-3、Nl-9 は異なる要素を含む。平面楕円形の可能性があり、口縁部が湾曲する浅鉢 Nl-3 は、湾曲部に隆帯を貼付し、縦貫する沈線と細かい縦キザミを加える。隆帯の両裾には沈線が巡る。隆帯は口縁部に向かって上昇するので、突起に擦りつくのだろう。この隆帯の貼付位置や様相は第 4 段階の隆帯文土器と共通するが、それ以外の要素が違いすぎ、隆帯文系に含めるのは躊躇される。口縁部文様帯には横位連鎖型入組文と斜位配置の三叉文を組み合わせ、同一構図を底部全面にも描く。底面全面に施文する楕円形の皿や浅鉢の仲間だともいえる。Nl-9 は外反縁で小形の浅鉢で、底部は小さく、丸底に近

い。口縁屈曲部に隆帯、その直下に点列界線帯で上下を画した主文様帯を置く。NI-3 同様の入組文を描くが、三叉文は界線に全面的に接合し一体化する。以上隆帯文系要素を持つ2点は、NI-3 が古相、NI-9 が新相と判断する。Mj-10 は高台付器種の高台部で、同様の入組文だが、入組部左下に三叉文が入る。上下繰込三叉文を意識したのではなからうか。NI-3 同様の口縁部が湾曲する浅鉢 Mj-20 も、横位連鎖型入組文を描くが、斜位に配置される三叉文は入組部と繋がって一体化する。その上、入組部と界線の間を挟んで繋げるが、この手法や発想は玉抱三叉文新相に置いた Mj-21、Mk-2 と共通で、同期するのではなからうか。また、図柄の上でも NI-3 に後続するので、新相と見たい。

カ 入り組む三叉文の仲間 [新相: Wa-5] ②], Ee-72, Eh-61, Ej-26, En-1, Eq-46・Eq-47, Mh-6, NI-7, NI-28]

起点終点型入組文を横位に繋げて展開する入組文に、三叉文が接合する。あるいは、入組部を独立させて三叉文を接合し、その1対を横位に並列させる。これらを入り組む三叉文の仲間と考えるが、入り組み部分は界線や三叉文と接合するので、玉抱三叉文の新相に対比できそうである。

横位に繋げる入り組む三叉文には、口縁部が内傾する小形浅鉢 Ej-26 が該当する。入り組みの向きが一定ではないので、図柄は規則的にはなりきれない。主文様帯の挟りを加えた丸瘤に、入組文は絡まない。Ee-72, Eh-61 は同様の小形浅鉢で小さな瘤をもつが、図柄は読みきれず、同類とは断定できない。瘤は古相を残すのかどうか。

横位に繋げない入り組む三叉文は、Wa-5, Mh-6, NI-7 等が該当する。いずれも上下の界線から発する弧線が入り組んで巴状を呈し、それと三叉文が一体化しているように見える。外反縁小形丸底の浅鉢 Wa-5 は、上下を点列界線帯で画し、1単位の入り組む三叉文は、斜沈線で区分された三角形の区画の中に収められる。Mh-6 も同器種で、入り組む弧線は三叉を接合せないものが幾つかあり、上下界線に発する巴構図に三叉文が接合していると表現できる。NI-7 は大形の浅鉢で、口縁の突起内面に弧線が加えられる。Mh-6, NI-7 は Wa-5 のような境界線こそ持たないが、1単位の入り組む三叉文が独立し、主文様帯は縦位に分断されているといえる。

同一個体の可能性もある Eq-46・Eq-47 は界線から遊離した弧線が入り組み、それに三叉文が接合したり隣接したりするのが基本らしいが、入り組み方が皆異なり、三叉文も片側にしかない部分もあって、図柄は読みきれない。全く異なる系譜の図柄の可能性も残る。

類似した構図の En-1, NI-28 は、上下の界線から発する弧線が小さく入り組み、その脇から沈線が水平に延伸する。宮崎型三叉文に関連するのではなからうか。

#### キ その他

単純口縁の深鉢 NI-4・NI-5 は同一個体の可能性もあるが、これらに接合した上下繰込三叉文が導入され、主文様帯を区切る。メインモチーフは足の長い三叉文2段で、下位側の足が延伸して、上位側の三叉文を囲い込んでいる。佐野B群深鉢 Me-2 や外屈縁深鉢 Eq-60 などと同趣で、御経塚式に連なる構図である。椀形の浅鉢 Ea-61 は3条楕円を半単位ずらして2段に密接配置し、単位の間を挟り取っているが、挟り部分は接合した上下繰込三叉文ともいえる。三叉文を半円で囲む小形浅鉢 Ec-5 や、T字繰込構図を導入する浅鉢 D486-9 ②] なども、御経塚式との関わりが深いだろう。D486-9 と近似した腰の張る器形の浅鉢 Eq-35 は、文様帯下限の処理方法も D486-9 と酷似し、御経塚式前半に対比できそうである。

内面側にシャープな稜を作って口縁部が外反する浅鉢 J13-1 ①] は、皿形に近い。第1分冊では環形の土製耳飾の文様との関わりに言及したが、耳飾の図柄の構造が判明し、それとは直接関わらないことが確認



できた。その主文様帯は完全に同一の構図が3単位繰り返し、デザイン性は大変優れている。工字文風だが、その隆起部は点対称構図で、隣の隆起部の袋小路に突っ込んで途切れる。土製耳飾の内開弧ブリッジ系統第3段階のように、無限に反復する構図ではないが、類似性はあるだろう。工字文風に見えるのは接合した上下縁込三叉文が隆起部を区切るからで、底面中心の円モチーフからも同様の三叉文が繰り返される。口唇部には小さな丸帯を3個重ねた突起が貼付される。晩期前葉の様相かと推測するが、明確な位置付けを示せない。J13-1のメインモチーフとそっくりな構図が、底部全面施文の皿Eq-42に描かれる。Eq-42は低い波状口縁で、口縁部文様帯には入組三叉文に類似した構図が描かれ、後述するp-52と同系譜の突起も貼付される。

D609-23[②]、Ee-89、Mg-4、Mj-35、Nl-10は、底部全面施文である。平面楕円形の皿形が元に組なっているとの憶測をもつが、浅鉢も含まれる。雲形文の関与が窺われるEe-89、Mj-35は晩期中葉、それ以外は入組文・三叉文で飾り、より古相と考えるが、すべてを1系列と理解してよいとは限らないだろう。画面が広く、帯状の制約もないので、図柄は奔放になる。後述する花卉状雲形文構図をもつ浅鉢の中には、平面楕円形で底部全面施文の例があり、それとの関わりも注意しなくてはならない。

#### ク 編年観の手掛かり

これまで、晩期隆帯文土器を隆帯文第4段階古・新と第5段階に区分してきた。隆帯文を転写した入組文・三叉文系の器種は、その区分との整合性が認められる。佐野B群深鉢古相や外屈縁深鉢古相は隆帯文第4段階に、佐野B群深鉢新相、外屈縁深鉢中相は隆帯文第5段階に対比できる。隆帯文を失った外屈縁深鉢新相は、隆帯文第5段階の幅に収まるかどうか。これらの深鉢の隆帯文第4段階対応相は御経塚式の影響を直接的に取り入れ、隆帯文第5段階対応相はそれを变形させてゆくと見れば、各種三叉文との対比の手掛かりが得られる。御経塚式の要素を直接取り入れている玉抱三叉文の古相は隆帯文第4段階対応、それを变形させてゆく新相は隆帯文第5段階対応の期待が持てる。それ以外の三叉文をもつ土器は、その古相の多くは三叉文が他要素と接合せず、その新相は接合しがちであったから、これも対比の手掛かりになる。起点・終点型入組文、横位連鎖型入組文の古相は三叉文が接合せず、横位連鎖型入組文の新相や入り組む三叉文の中間の大半は接合しがちであった。前者が隆帯文第4段階に、後者が隆帯文第5段階に対比できることが期待できよう。その他として取り上げたものうち、御経塚式とのつながりが深いNl-4などは隆帯文第4段階、浅鉢J13-1等は同第5段階対応が期待できはしないか。

甲信地域では晩期初頭の土器型式が未確定である。エリ穴遺跡でも一括性のある資料は得られていないが、第4段階隆帯文土器との共伴が期待できる諸器種や諸要素が、晩期初頭に該当する可能性は十分にある。御経塚式の影響を手掛かりとして組み立てた面があるが、甲府盆地や千曲川流域まで同様の視点で考えてよいとは限らないだろう。晩期前葉は宮崎遺跡2号住居と千曲市円光房遺跡26号住居を基準資料として、佐野1a式が見直されており[中村豊1997]、その構成要素には第5段階の隆帯文深鉢が含まれている。第5段階隆帯文土器との共伴が期待できる土器は、佐野1a式に対応する可能性が十分にある。また、後述する鍵ノ手文をもつ土器の古相がこの段階に遡る可能性もある。ただし、宮崎遺跡2号住居で卓越した宮崎型三叉文は、円光房遺跡26号住居・エリ穴遺跡とも貧弱であった。晩期初頭～前葉は遺跡ごとの個性が強く、それゆえ、編年観の組み立てが難しい。入組文・三叉文をもつ土器同士の対比も、隆帯文土器との対比も、まだ不十分である。

### (3) 晩期中葉の土器の理解に向けて

#### ア 鍵ノ手文

##### 【祖形】

鍵ノ手文は晩期前葉から中葉にかけて、東海、甲信、北陸、関東西部と広範囲で採用される。佐野遺跡で大洞C1式並行の可能性が指摘される[永峯 他 1967]一方、最も充実した資料が得られたなすな原遺跡では、遺構での共存関係から安行3b式並行が確定だとされてきた[重久淳一 他 1984]。なすな原遺跡出土の鍵ノ手文をもつ土器は斉一性が極めて強いので、時間幅が小さいと推測する。報告に依拠するなら、鍵ノ手文の初源であることも期待できる。これを起点に、エリ穴遺跡の鍵ノ手文の配列を試みる。

図79に示したなすな原遺跡出土の鍵ノ手文をもつ器種は3種類、口縁部が緩く外反する深鉢、口縁部が大きく内湾する浅鉢、器形不明の高台部(蓋?)である。描かれる図柄に器種による相違はない。深鉢は口縁外反部を1帯の文様帯とし、沈線を界線として3段に細分し、上下の縄文帯の中間をメインモチーフの鍵ノ手文帯とする。鍵ノ手文の図柄は短く、左右に繋がることなく独立し、短ピッチで文様帯を一周する。口端には付加的装飾がない突起が付く。浅鉢と高台部も同様の文様帯構成だが、最下段の縄文帯は省略される傾向がある。鍵ノ手文の図柄には幾つかの種類がある。なすな原遺跡で主体的なのは、1対の鍵状構図を向かい合わせる入組鍵ノ手文で、これが単位文である。描線は太く深い。入組鍵ノ手構図に挟まれた隆起部分を拾うとクランク状の構図になる(クランクA)。入り組まない鍵ノ手文などと呼ばれるクランクAは、入組鍵ノ手構図のネガ構図として発生する。クランクAを横位に並べ、その間の隆起部分を拾うと、もう一つのクランク構図が発生しうる(クランクB)が、クランクBが多用されることはないらしい。入組鍵ノ手構図とクランク構図が組み合わせられ、同一個体に併用される例は少なくない。なすな原157-1には少々変形しつつ入組鍵ノ手とクランクAが、なすな原230-2にはクランクAとクランクBが併用される。3種類の単位文が同時併存するのは確実である。いずれも上下の界線とは付いたり離れたりし、厳密さはない。なお、少数だが構図の一部が癒着して角張った雷文状となる例がある。構図の独立と短ピッチが崩れるものの、個別の変異の範囲内のようなのである。

【第1段階】 [J13-33[①]、J13-G23[①]、Wf-23[②]、D231-3[②]、NI-14、(Eq-60)]

エリ穴遺跡出土資料の中でなすな原遺跡の鍵ノ手文をもつ土器に近いのは、深鉢J13-33とJ13-G23、浅鉢Wf-23とD231-3、NI-14である。器形、メインモチーフを挟む縄文帯という帯構成など、なすな原遺跡の様相をよく継承するが、描線は明白に細い。これが第1段階だと推測するが、メインモチーフには入組鍵ノ手が選択的に採用されるようである。(2)ウで取り上げた外屈縁深鉢中相Eq-60の主文様帯下段には、崩れ気味ながら、入組鍵ノ手構図が導入される。

【第2段階】 [J13-G22[①]、Wg-12[②]、Eq-61、Md-22、Mj-31]

深鉢Eq-61、Mj-31と、浅鉢J13-G22、Wg-12、Md-22などが該当する。Mj-31は第1段階の深鉢と器形・文様帯構成は一致するが、メインモチーフにはクランクAが導入され、しかも多段化する。主文様帯下限に点列界線帯を導入した浅鉢Wg-12も、幅の狭い文様帯を沈線で分帯して多段化させる。雷文状の構図をもつMd-22もその下限は点列界線帯である。点列界線帯の導入、クランクAの導入、突起への切り込みなどの加飾、概して細い描線など、次の第3段階に通ずる変化の発生をもって、第2段階と考える。佐野遺跡C群[永峯 他 1967]の多くも、この多段化の段階と推測する。また、中屋式の深鉢体部文様帯にも多段化したクランク構図が少なからず存在する[酒井重洋 2008]。

文様帯下段の縄文帯を失ったEq-61と浅鉢J13-G22は、1単位の入組鍵ノ手の中間に、界線に接する上下縁込三叉文が挿入される。他系諸の要素の導入は第2段階から始まる。

【第3段階】 [J22-G73[①]、U5-G19[①]、U5-G23[①]、S2-G34[②]、Wc-6[②]、Wf-24[②]、En-4]

J22-G73、U5-G19、U5-G23、S2-G34、Wc-6、Wf-24、En-4などが該当し、Wf-24を除いて全て深鉢である。Wf-24の口縁部は大きく内湾し、メインモチーフには2条沈線のクランクAが採用され、その3条の界線は単純な沈線から点列界線帯に置き換わる。第2段階までは点列界線帯で画された1帯の文様帯を、

沈線が多段に分割したと見ることができたが、Wf-24 は文様帯の各段が独立した文様帯として意識されるようになったと見るべきではなからうか。これは多段化ではなく、多帯化である。口唇部の突起はB突起に類似し、その頂部には「の」の字に似た単位文、突起裾には切り込みが加えられる。深鉢は肩部に最大径をもち、緩く括れて口縁部が僅かに外反するか、内傾のまま立ち上がる。外面の屈曲は緩やかだが、内面側にはシャープな稜を作るのが特徴的である。肩部には文様帯が確立し、口縁部文様帯と間隔を空けずに密接するが、両者とも点列界線帯で画される。文様帯の重畳とも多帯化ともいえるだろう。両文様帯ともクランクAを導入するか、口縁部文様帯には別構図も描かれる。クランクAは縦線と横線が分かち書きにされる。Wc-6 肩部文様帯には、クランクAと雲形文の弧線に似た構図が交互に配置される。U5・G19の口縁部文様帯には三叉状入組文かと思われる構図が導入され、J22・G73 口縁部文様帯の構図もその変形かと推測される。安行3c式～3d式からの転用かと思われるが、甲信地域では安行3c式以降の関与はこれまでほとんど注意されておらず、注目に値する。口縁部内面には細い沈線が巡る。口端には小さな突起が貼付され、その頂部や裾に切り込みが加えられ、En-4では内面沈線と接続する短線が描かれる。第3段階は肩部文様帯の確立、文様帯の重畳あるいは多帯化、他系譜モチーフの併用、口縁部内面の稜や内面沈線の確立などが指標となる。

【第4段階と後続相】 [S2-1] [②]、[S2・G35] [②]、[D200-25] [②]、[Ma-16]、[Md-29]、[Mk-7]、後続相：[Mi-18]

第4段階と考えるのはS2-1、S2・G35、D200-25、Ma-16、Md-29、Mk-7などである。浅鉢はS2・G35、Ma-16で、深鉢が多い。深鉢は第3段階と共通の器形、文様帯構成をとるが、点列界線帯で画されるのは肩部文様帯だけになり、文様帯の多帯化は失われる。またメインモチーフの図柄と描線も異なる。描線は明らかに太くなる。粗大工字文の描線に近似するといえるが、佐野1a式の指標である宮崎遺跡2号住居出土の宮崎型三叉文も同様に太い描線だったので、その違いは紛らわしい。メインモチーフはクランクAを継承しつつ変形が明白である。Mk-7は「H」の字状に、S2-1はクランク中央に縦線が入り、Md-29とMi-18に至っては1つ置きに上下に向かい合う三叉状に変化する。クランクAの軸の横位短線に付加される縦線が、位置と方向を多様に变化させたと思われる。クランクAの崩壊・変形、あるいは鍵ノ手文系譜の構図の変質である。特にMa-16、Md-29、Mi-18は沈線間の隆起部を追えば粗大工字文とさして相違ない図柄である。ただ、沈線間の隆起部のほうが広く、その幅も不定なので、隆起部を繋いだモチーフにはまだ見えない。点列界線帯に上下を画されたこのメインモチーフは、例外なく肩部文様帯に限定的で、その点でも粗大工字文をもつ土器と同一の構成である。この崩壊・変質に至るまで、個々の単位文は短ピッチで独立し、連続して挿入されるという配置方法が維持され続ける。口縁部文様帯に鍵ノ手文とは別系譜のメインモチーフを併用するのはS2-1とMk-7で、それは後述する花卉状雲形文とも三叉状入組文とも見える。異系譜モチーフの対比に重要な役割を果たしてくれるので、それについては次項のイで報告する。D200-25のメインモチーフは上向きの弧状で、単純な連弧だともいえる。クランクAからの変化だとすれば第4段階である。だが、別系譜のモチーフとの置換だと見ることもでき、それなら第3段階に遡る可能性もあろう。

口縁部の加飾付き突起や内面沈線、肩部内面の稜などの内面側の特徴は第3段階を継承する。若干違うのは内面沈線も太い描線を用いること、口唇部に連続圧痕や縦貫沈線が導入されること、突起への加飾が口唇部だけに留まらず内面側へ拡大することである。とりわけMi-18は突起内面の三叉状短線が内面沈線と接合し、2条沈線からなる内面文に展開しており、粗大工字文をもつ土器の内面文に一致する。第4段階後続相と考えたい。

イ 粗大工字文、三叉状入組文類似構図

【粗大工字文】 [古相：J13・G6] [①]、[D629-1] [①]、[Wa-16] [②]、[新相：J22・G153] [①]、[J22・G252] [①]、

粗大工字文は鍵ノ手文と深く関連する。粗大工字文をもつのは浅鉢、壺、深鉢の3つの器種である。浅鉢口縁部には単純外反、内湾、外屈の三者があって、外屈するものは肩部を文様帯とする。深鉢は外反する口縁部を縄文帯または無文帯とし、肩部文様帯をもつのが基本である。

浅鉢 J13・G6 と Wa-16、壺 D629-1 の点列界線帯で上下を画した正文様帯には、粗大とは言い難い隆線で工字文が描かれる。沈刻部分を取り上げれば鍵ノ手文末期の Mi-18 の構図とほとんど違わないが、隆起部分にミガキを加えており、隆線手法が確立する。これらは粗大工字文としては古相ではなからうか。

浅鉢 J22・G252、深鉢 J22・G153、Md-40、Md-43 などは描線が太く、沈線が左右に伸び、隆起部分は横に長く延びたハンガー形の構図となる。粗大工字文の典型的な図柄で、Wa-16 などの短ピッチの構図とは異なる様相をもつ。Md-40 のハンガー構図は左右対称ではないのが特徴だが、その類例は少なくない。外反する口縁部には器種を問わず低い突起が付され、それと一体化した内面施文が見られ、内面沈線が2条の例もある。突起周囲の加飾は不明確だが、J22・G252 には三叉状構図が内面を向くように描かれる。Md-40 の三叉文は突起内面にだけ描かれ、口唇部には加飾がない。口唇部の加飾から口縁内面の加飾へという変化が窺えるのではなからうか。また、口縁部内面の屈曲は、鍵ノ手文の深鉢末期のようなシャープさが無い。Md-40 など典型的な図柄をもち、口縁内面施文をもつのは、粗大工字文としては新相ではなからうか。

【三叉状入組文類似構図】 J22・G73[①]、J29・G71[①]、U5・G19[①]、S2-1[②]、Wi-10[②]、Mb-13、Md-24、Mk-7]

安行 3d 式の三叉状入組文に類似した描出方法を採用する土器が一定量あり、これも鍵ノ手文との関わりがある。鍵ノ手文第 4 段階で取り上げた S2-1 や Mk-7 がその例で、太い沈線を用いて入り組み構図や足の長い三叉文を描く。平縁深鉢が多いものの、浅鉢も何点かある。深鉢の大半は肩部文様帯をもつが、三叉状入組文は下限を点列界線帯で画された口縁部文様帯に導入され、肩部文様帯には用いられない。これは安行 3d 式三叉状入組文が主として口縁部文様帯に描かれるのに対応するだろう。だが、似ているのはそこまでである。安行 3d 式の基本である三角形や菱形の区画はなく、三叉文などの個別の要素が狭い文様帯に横並びに挿入されるに過ぎない。浅鉢 3 点はいずれも口縁部を縄文帯とし、2 帯目が三叉文帯となる。三叉文の組み合わせ方が読めるのは 1 種類だけで、深鉢 Md-24、浅鉢 Wi-10 と Mb-13 である。いずれも上限の界線から弧線が垂下し、それを受けて入り組む弧線が三叉文とされるのを基本とし、Md-24 は垂下する弧線も三叉文とし、Wi-10 は受ける三叉文と対向する三叉文を加えている。独自の配置と言えそうで、界線から発する弧線は組み合わせが読めない個体にも存在する。なお、安行 3c 式波状縁深鉢の好例として Mk-8 などがあり、晩期安行式との交渉は安行 3d 式まで途切れることなく続いているといえよう。

三叉状入組文類似構図をもつ深鉢のうち、J22・G73 と U5・G19 は肩部文様帯に第 3 段階の、Mk-7 は第 4 段階の、鍵ノ手文を併用する。三叉状入組文類似構図はこの幅の中に収められると考える。

#### ウ 花卉状雲形文

大洞 C1 式～C2 式を特徴づける雲形文をもつ土器は、甲信地域からも多出する。搬入品の可能性があるものが指摘される一方、数多くある模倣品は巧拙の程度が語られるくらいで、ほとんど検討されぬままとなっていた。J26-19[①] の肩部文様帯に展開するのは、雲形文に由来する構図であることに異論はないだろう。だがこれを東北地域の土器と直接対比するのは困難で、雲形文を祖としつつも独自の様相を確立した土器だと理解すべきであろう(高橋龍三郎氏教示)。この視点に立って、地域で独自に消化された雲形文を報告する。

J26-19 を例にとる。口縁部が屈曲して外反する浅鉢の、肩部に設定された正文様帯(肩部文様帯)が施

文スペースである。その上下は沈線で作られ、独立した単位文が挿入される。単位文と単位文の間には、界線に接合しない1対の三叉文が上下から繰り込まれるが、これは晩期前葉から継承した上下縁三叉文である。J26-19はたまたま大形なのでそれなりに広い幅をもつが、本来、幅狭い文様帯であると考えべきだろう。狭い幅に挿入できるのは横幅があっても上下幅の小さい構図である。単位文は上端が開いた二重の弧線と、それは左右に長く伸びて楕円形あるいは長円形に近い形状を呈する。外側の弧線を「外周弧」、内側の弧線を「内周弧」と呼ぶが、外周弧が先で内周弧が後から描かれたように見受けられる。外周弧は内周弧に接続して閉じられるが、内周弧はその先端が箆手状に巻き込むので、閉じられずに開いたままである。内周弧は弧状のまま、内周弧で蓋をされた外周弧は閉じた楕円形あるいは長円形という区画が、1単位の単位文となる。それが上下縁三叉文で作られた範囲内に配置され、並列して文様帯を一周する。これを花に例えれば、外周弧の作る楕円を左右に広がった花卉、内周弧で囲まれる部位を花芯に見立ててよいだろう。「花卉状雲形文」と名付け、「花卉部位」と「花芯部位」という部分名を使用する。花卉部位は左右に大きく広がるが、左右を隔てる要素はなく一体で、花芯部位によって蓋をされて閉じられる。花卉部位はミガキを加えて光沢を持たせる。主文様帯はこの花卉部位以外は全面に縄文を充填するので、花卉部位の光沢は際立つ。花卉部位はいわゆるネガ部分 [高橋龍三郎 1981] だが、器表面を削る浮彫手法は一切用いられない。花卉部位の上端(時には下端)に中央で接続する花芯部位には、上下から1対の三叉文を縁込み、縄文を充填する。上下縁三叉文と同趣だが、下側の三叉文の右端は内側の弧線に接続する。花芯部位は蓋をする要素がなく、開いたままなので、花卉状雲形文の外側の縄文部位と接続し、縄文が全面的に充填される。J26-19の強く屈曲して外反する口縁部は、上位の縄文帯と下位の無文帯に区分される。口唇部は肥厚して広げられ、内面側に段を作る。口唇部には大小の突起が付されるが、突起頂部から口唇に向けて弧線が彫り込まれる。また口唇を縦貫する沈線が描かれ、突起との接点は三叉文とされる。これらはあくまで口唇部の装飾で、内面側には延伸しない。

J26-19の類例としてWi-21[②]を挙げる。口縁部が緩く外反する尖底の壺または鉢で、その肩部が上下を沈線で画した主文様帯である。その肩部文様帯は界線に接続する上下縁三叉文で4分割され、花卉状雲形文が4単位挿入される。花卉部位に浮彫手法は一切なく、文様帯全体に縄文は施文されない。少々相違はあるが、J26-19と近似した構成である。相違点の中で重視すべきなのは花芯部位である。第2分冊図25では突起直下の正面の単位文を图示し、それ以外を拓影で示した。正面の単位文の花芯部位は接続した巴構図、拓影左端の単位文では離れた巴構図で、それ以外の2カ所も巴の変形である。4者とも左右の線対称ではなく、前2者は点対称である。花芯部位の巴によって花卉部位は閉じられているが、花芯部位は図柄の特性から開くことができず、巴が変形した拓影中央の単位文のみ開いている。花芯部位に点対称の構図を採用したがゆえの変化で、花卉状雲形文には線対称のグループと点対称のグループがある。線対称のJ26-19は「花芯弧線系列」、点対称のWi-21は「花芯巴系列」と呼ぶ。Wi-21の口唇部のB突起の裾は切り込みが入るが、突起内面側には隆帯を円形に貼付するので古相を残す。

亀ヶ岡式の図柄は「弧線の点対照的な組合せ」からなるモチーフが多いとされる [藤沼邦彦 1989]。だがJ26-19の単位文は点対称ではない。花芯部位の三叉文の末端が僅かに厳密さを崩しているが、単位文中央に垂直線を描けば、それを軸とした線対称の図柄である。亀ヶ岡式の標準とは異なった構成で、左右対称雲形文と呼んでも良いのかもしれない。その中にWi-21のような点対称の花芯巴系列が存在するのだが、これは亀ヶ岡式に対する理解が深かったからではなく、たまたま花芯部位に点対称構図を採用したに過ぎないのではなかろうか。エリ穴遺跡で構図が読める程度の大きさのある雲形文の大半は、この花卉状雲形文で、Wi-21以外のほとんどは花芯弧線系列かその類品である。まとまった出土量があり、主体的な系統だと判断する。亀ヶ岡式分布圏の外縁で、雲形文の原則を理解しきれないままに、独自に消化した文様だと考える。

【第1段階】 J26-19、J26・G17[①]、S2・G59[②]、S2・G61[②]、Wi-21、Ee-92]

J26-19、Wi-21 などと同様の様相をもつものを第1段階と考える。Wi-21 以外は花芯弧線系列で、花卉部位は内周弧で閉じられ、花芯部位は開いたままである。J26・G17 以外は外反口縁浅鉢の肩部文様帯である。S2・G59 は4単位の花弁状雲形文が斜位に配置され、連動して上下繰込三叉文も斜位に置かれる。また花芯部位は下位側に設定され、三叉文は省略傾向である。花卉状雲形文の下位には長円4個と円1個が水平に配置されるが、その中間には界線は設定されないで、1帯の正文様帯が2段に分割されていると見る。Ee-92 の花卉状雲形文は水平に置かれるが、花芯部位は交互に上位側と下位側に設定される。その下位にも花卉状雲形文がもう1帯巡る可能性がある。両者の間には界線はないので、同一系譜の構図が2段に配置されている可能性がある。多段の構成は J26・G17、S2・G61 も同様で、これは花卉状雲形文の祖形を捜す上で留意すべき点だろう。

【祖形の候補】 [Wb-18[②]、D384-20[②]]

花卉状雲形文の成立に関わりそうな土器を2点取り上げる。いずれも丸底の楕円形浅鉢で、底部はほぼ全面に施文されるが、浮彫手法は採用されない。口縁内面に細い沈線1条を巡らせ、口唇部には小さな突起が貼付されるが、Wb-18 は小さな丸瘤を貼り重ねて突起とする。

D384-20 は外反する口縁部をもち、その屈曲部には点列界線帯が巡る。体部の正文様帯上位には独立した三叉文が巡り、底面を含む下位は2つのブロックに分割される。第2分冊図83、底面側の図の正文様帯は、沈線で囲んだ縄文帯によって、右側の楕円形のブロックと、それを左側から包み込むような弓形のブロックとに区分されている。左側のブロックの構図は、花卉部位相当部分に底面側から突出・貫入する棘状構図を除くすれば、花卉状雲形文に極めて近い。花芯部位の弧線によって花卉部位が閉ざされた構図である。D384-20 は大きな課題あるいは可能性を抱える。それは点列界線帯直下の肩部に、太い描線の独立した三叉文を並べることである。この三叉文は鍵ノ手文の第4段階 Md-29 に併用される三叉文とも、大洞 B2 式 Mc-1 や第4段階の隆帯文浅鉢 Eb-22 に描かれる三叉文とも似ている。どちらとの対比を考えるとよい大きな問題になる。なお、第2分冊の記述の中で、D384-20 を佐野 2a 式の典型例と記したが、これは事実誤認で撤回する。

Wb-18 の正文様帯の上位は2種類の図柄が交互に配置され、都合4単位の構成である。第2分冊図12、底面側の図で左上の図柄と右下の図柄はほぼ同一と推測され、楕円の内側に2条の弧線が貫入する。J26-19 の花卉状雲形文から付加的な要素を取り払えば、かなり近い様相になりはしないか。右上の図柄と左上の図柄は、左上の図柄の一端が底面側に延伸して肥大したように見える。とりわけ右上はいったん閉じかけた末端に別の沈線が接続して、底面まで延伸する図柄を繋げたように見える。この2単位の他に、楕円基本の構図がもう1単位加わり、正文様帯の下位、すなわち底面は都合3単位で構成される。正文様帯は不完全ながら2段に近い構成だといえよう。また、正文様帯上位の4単位の中間には、上下繰込三叉文が例外なく配置される。

以上の2点は花卉状雲形文につながる構図を持っている。突起には古相を残すようにも思える。祖形の候補として挙げておく。

【第2段階】 [J14・G11[①]、J26・G18[①]、U5・G14[①]、S2・G60[②]、Wi-3[②]、Mi-17、Mj-46]

楕円形で丸底の浅鉢 S2・G60 には点列界線帯が3帯導入され、正文様帯が分帯されて多帯化する。文様帯は4帯となり、第1帯は縄文帯、第2帯と第3帯には酷似した花卉状雲形文が並列する。第4帯は底面の無文帯である。J26-19 と図柄の上での大きな相違点は、外周弧も内周弧も左右に分断されてしまうことである。内周弧は意図的に左右に分割される。外周弧の上位側は内周弧に接続し、下位側は相互の接続を放棄して、大きく開いたままで途絶する。外周弧の幅と内周弧の幅が同一とされるのがその誘因の1つだろうが、構図

の上でも分割の意図は明白に読み取れる。その結果、花卉部位は花芯部位によって半ば蓋をされつつ左右に分解し、左右1対となって線対称に配置される。幅が狭くなった為か、花卉部位の先端は尖り気味となり、花芯部位の三叉文はスペースを失って省略される。単位文を区切る位置に配置された上下繰込三叉文は、第2帯では蛇行する沈線に置き換わり、第3帯では下位側にだけ配置される。いずれもその末端に沈線が追加され、横位に足を伸ばした構図となる。外反縁で丸底のWi-3も3帯の点列界線帯で文様帯を分帯する。その第3帯にS2・G60と同一構図の花弁状雲形文が挿入される。第2帯には1つ置きに同一の単位文が並列するが、これは小形化した三叉状入組文ではあるまいか。第4帯の底面も全面施文され、D384・20の底面と同一系統の図柄が描かれる。花芯部位が欠損するJ14・G11も、多段の構成なので第2段階ではなかろうか。底部直上には線描で入り組む三叉文が1対で挿入されるが、三叉状入組文の転用かと考える。

全体像が不明なMi-17とMj-46は、上下繰込三叉文の脇に内周弧が配置されるように見受けられる。花卉状雲形文を左右に分割した上、その左側の構図だけを横に並べたのではあるまいか。片側だけの反復では線対称構図の原則が破られるのだが、異なる構図が入り込むわけではないので、S2・G60と同一段階に置いておく。J26・G18とU5・G14は、S2・G60の同類なのか、Mj-46と同一なのか判断できない。以上の4点にも点列界線帯が導入される。

第2段階は内面沈線が多用され、口唇の突起の中央や裾には三叉状の切り込みが入る。

【第3段階】 [Wg-32]②、Mi-47、Ni-24、(S2-1)]

外反口縁で丸底の浅鉢 Wg-32 の、上下を点列界線帯で画された肩部文様帯に描かれる花卉状雲形文は、第2段階を継承して左右に分割され、1対で対置する。だが、その左側と右側は花芯部位の形態が明白に異なり、左右対称にはなっていない。第2分冊図22の実測図では、正面左側の花卉部位を塞ぐ花芯部位は、その下端が蕨手状に巻き込むが、右側は花芯部位が明示されず、単なる楕円形に簡略化されている。拓影で正面左隣の図柄を示したが、そちらも左側の花芯部位上端は蕨手状に巻き込むが、右側はそうならないのが確実である。2対の花弁状雲形文は、4単位の独立した単位文に分解した。この4つはどれも少しずつ異なり、裏返しても同一の図柄になるものはない。似た図柄が4つ並列するだけの、秩序のない配列に転落したといえる。第2段階の花弁状雲形文は左右に分解しつつも線対称の構造は維持された。線対称という基本的構造の崩壊をもって、第3段階と考えたい。図左寄りの上下繰込三叉文も、下位側は弧線に変化している。Ni-24も第3段階に置く。直線化した花弁状雲形文らしき図柄が上下2段に対向して配置されるが、いずれも沈線が接続せず、花卉部位は閉じていない。これは第2段階以前にはなかった現象で、閉じているからこそ花卉部位は成り立つとすれば、図柄の解体の始まりではなかろうか。

鍵ノ手文をもつ深鉢の中には、展開の後半に、第3段階の花弁状雲形文や三叉状入組文と関わりそうな弧線が併用される例がある。鍵ノ手文第4段階の深鉢S2-1の口縁部文様帯には、1対の入り組む構図が太い沈線に描かれる。左側は弧線というより大きく開いた袋状で、右側も同様だが下端が蕨手状に巻き込んでいく。これは斜位に配された1対の花弁状雲形文ではなかろうか。袋状構図は花卉部位、蕨手状の巻き込みは花芯部位を継承し、左右分割で線対称ではなくなった段階である。その1単位を左右に区切るのは、下位側が弧線に変化した上下繰込三叉文である。いずれも第3段階の花弁状雲形文の様相に一致する。同時に安行3d式三叉状入組文の構図や描出方法の影響も感じられる。

小部屋付楕円浅鉢Mi-47は体部と高台部に点列界線帯で画された主文様帯が設けられる。体部文様帯は単位文が2単位残っており、その中間には1対の上下繰込三叉文が斜位に配される。左図に示した単位文は花卉状雲形文を受けているが、その末端はどこにも接合せず、花卉部位は閉じられていない。また、花卉部位は先端が尖り、幅狭い。花芯部位は入り組むので、第1段階の花芯巴系列Wi-21を継承し、巴が離れて入り組んだと見ることができよう。右図の単位文も基本は同一だが、右側の花芯部位から発する沈線は上位

の界線に接合してしまい、右端側から伸びてくる花卉部位の沈線とは接合しないので、左右で異なる図柄が成立する。花芯巴系列の基本である点对称構図は、左図の単位文では保たれ、右図の単位文では崩れている。高台部文様帯は3単位の構成で、単位文間には上位側にだけ上下線込三叉文が配される。単位文は沈線幅とその間の隆起部の幅がほぼ等しく、外見は沈線で埋め尽くされているが、その構図は体部文様帯と極めて近い。すなわち、入組構図の花芯部位から発する右側の沈線は、先端が尖った袋状の図柄を描いて花芯部位近くに戻り、どこにも接合せず途絶する。同じく左側の沈線は単純に延伸して途絶するか、繋がるべき斜線との接合を放棄する。これは体部文様帯の構図の末端を省略したと見てよく、花卉部位は寸断されてしまう。花卉部位はすべて開き、点对称構成は完全に喪失する。2つの文様帯とも、その構図は第3段階の花弁状雲形文に一致する。

【類似した構図】 [J29・G25] ①、D200-26] ②、En-3、P-52]

肩部が大きく張る大形の壺 D200-26 の肩部文様帯には、閉じた花卉部位が描かれる。花芯部位は接合した巴構図で、花芯巴系列第1段階に見る。しかし、尖った花芯部位が花卉部位に食い込んで異様な形状を呈し、花卉部位の外側には別の要素が挿入されるので、花卉状雲形文を取り入れた類似構図だと考える。

外反口縁で尖底の P-52 は3帯の点列界線帯で分帯され、第2帯の肩部文様帯と第3帯には、上下線込三叉文で区切られた幅の中に、1対の弧線が配置される。界線との接続は一定しないので、弧線・界線で囲まれた花卉部位とは言いにくい、花卉状雲形文の図柄との共通性は強い。第2帯に3対配置された上下線込三叉文を中心に見れば、その両側の弧線は3カ所とも点对称の配置である。また、正面突起の直下に位置する入組文も点对称配置である。花卉状雲形文とは異なるが、秩序だった配置である。花卉状雲形文と関連した別構図で、第1段階以前に対応するのではなかろうか。口縁部正面の突起は大洞 C1 式に似る。また、第3帯の幅広い構図は、浮線文浅鉢 NI-35 などにも引き継がれる可能性がありはしないか。

J29・G25 や En-3 など花卉状雲形文の構図を取り入れているらしいが、全体像は不明である。NI-18 は花卉状雲形文ではなく楕円形構図が用いられるが、近似構図との置換の例だろう。

【周辺地域の類例】

左右線対称で独立した単位文となる花卉状雲形文の類例は、県内各地に認められる。大町市一律遺跡からは何点か報告されており、中でも一律 27 は D200-26 の類例である (図 79)。花卉部位の構図は酷似するが、花芯部位は欠損しており、第1段階か第2段階であろう。一律 27 は宮崎遺跡 10 層一括資料と同一段階で、佐野 2a 式の類例との評価がある [中村 1997]。宮崎遺跡の立命館大学発掘資料にも類例が多数あり、第10層一括資料の中にも2点が報告されている [立命館大学 1995]。新潟県上越市藤生遺跡 [中川成夫 1967] にも類例が多く、信越国境周辺では主体的だと言えそうだが、山梨県では少量しか発見できない。

エ 波状沈線文 [古相:J13-25] ①、中相:Wg-13] ②、Wg-16] ②、新相:J21-27] ①、J22-G14] ①、U7-1] ①、D242-4] ②、D502-57] ②、Md-25、Md-26、Me-68]

埋裏 7 に使用された深鉢 U7-1 は、大形で目立つ土器である。外反する口縁部に3条楕円を弧線で囲んだ単位文を配し、点列界線帯で画した肩部文様帯は沈線で3段に細分される多段構成で、短線列とともに、波状の沈線が充填される。「波状沈線文」と呼ぶことにする。単位文の3条楕円構図は晩期初頭の Eq-34 などと差がないが、つながりについてはまだ分析できていない。それを囲む弧線は花卉状雲形文の花卉部位を想起させる。

波状沈線文を描く類例には、浅鉢 J21-27、D242-4、Md-25、深鉢 J22-G14、Md-26、小部屋付楕円浅鉢 Me-68 等が該当する。外反する口縁部に描くのは深鉢 Md-26 で、少数派である。波状沈線文は1条ごとに点列界線帯や沈線の界線に挟まれ、短線列や縄文帯などが併用される場合も同様である。界線に挟まれた1



条限定の波状沈線と見ることができそうである。

ところで、同様の構成の深鉢 Wg-13 は、波状沈線文と界線の隙間に点刻が加えられ、上下の界線から棘状の短線が出る。Wg-16 の波状沈線文の隙間には沈線の円が加えられる。点や円を組み合わせた波状沈線が共通し、界線に挟まれる構成も一致する。さらに、深鉢 J13-25 は口縁部～肩部を沈線 5 条で分帯し、各帯を縦の短弧線で区切り、縄文と点刻を挿入する。縦短弧線を波状沈線との置換だと見れば、一連の系統性を認めてよいのではなかろうか。J13-25(古相) ⇒ Wg-13(中相) ⇒ U7-1、D502-57(新相) という配列はいかがであろうか。J13-25 の口唇部には圧痕が加えられ、外端から短い弧線が垂下する。羊歯状文をもつ土器と同題の手法である。口縁部から緩く張る肩部までを一体の文様帯とし、それを多段に分割する構成や、その最下位を縄文帯とする点などは、鍵ノ手文第 2 段階の Mj-31 とも共通する。

#### オ 編年観の手掛かり

鍵ノ手文をもつ土器を 4 段階に区分した。メインモチーフの変化と連動して諸要素も変化することも判明した。その第 1 段階はなすな原遺跡と同一段階かその後、第 4 段階は粗大工字文に直結する段階であろう。中沢道彦が注目するとおり、鍵ノ手文は粗大工字文の有力な祖形候補である [中沢 2004]。鍵ノ手文第 4 段階は粗大工字文の初期と並存する可能性も大いにある。安行 3d 式との関わりを考慮すべき三叉状入組文類似構図は、鍵ノ手文第 3 段階～第 4 段階と共存する。

花弁状雲形文をもつ土器を 3 段階に区分し、その祖形候補も抽出した。その祖形を亀ヶ岡式のいずれに求めるかの探索は、手に余る課題である。エリ穴遺跡の土器を実見した研究者からは、花弁状雲形文第 1 段階の祖の可能性がある D384-20、第 1 段階 S2・G59、第 2 段階 S2・G60 は大洞 C1 式に、第 3 段階 Ni-24 は大洞 C2 式に対応する可能性を指摘していただいた。雲形文を祖と考えるのに肯定的な所見である。大洞 C1 式を中心に、後半は大洞 C2 式に対比することが期待できそうである。

正式報告未完ながら、佐野 2a 式の基準資料とされる宮崎遺跡第 10 層一括資料 [立命館大学 1995] の中には、花弁状雲形文の類例が 2 点ある (図 79)。宮崎-7 と宮崎-8 がそれで、小形で口縁部が外反する丸底浅鉢である。宮崎-7 は点列界線帯で、宮崎-8 は沈線で上下を画した肩部文様帯が主文様帯で、その下位に縄文帯や無文帯が設定される。宮崎-7 は花弁状雲形文の第 1 段階に似るが、花芯部位が大きく、図柄もかなり異なる。花弁部位は下位側が広がって三角形に近いが、これは上越市龍峰遺跡 [渡邊朋和 他 2000] などに類例があり、花弁状雲形文の別タイプではなかろうか。宮崎-8 は花弁状雲形文第 3 段階の好例だろう。小部屋付楕円浅鉢・宮崎-4 は閉じられた図柄だが、宮崎-8 の花弁状雲形文と関連する可能性があるかどうか。宮崎-3 の浅鉢は上下方向に詰まった三叉状入組文、宮崎-1 の浅鉢は波状沈線文で、一部を除けば花弁状雲形文第 2 段階～第 3 段階に対応するまともな方ではあるまいか。これに古相を示す大洞 C2 式の皿・宮崎-10 が加わる。

鍵ノ手文と花弁状雲形文の対比はどの程度可能か。鍵ノ手文第 1 段階をなすな原遺跡の段階 (安行 3b 式並行) の末期に位置付けてよいかどうか。よいのなら、(2) クでも記したように、佐野 1a 式の構成要素の一角を占めることになる。鍵ノ手文第 2 段階の位置付けには積極的な根拠を持ってないが、花弁状雲形文第 1 段階以前との対応は十分に期待できるだろう。鍵ノ手文第 3 段階は点列界線帯で多帯化した構成をとるが、花弁状雲形文第 2 段階 S2・G60 や Wi-3 も同様である。鍵ノ手文第 4 段階の深鉢 S2-1 が、第 3 段階の花弁状雲形文を併用することは既に記したとおりで、相互の対比は一定の根拠をもつ。ただし、花弁状雲形文祖形の D384-20 の肩部三叉文や、鍵ノ手文第 3 段階 Wc-6 の雲形文系譜の弧線の評価によっては、こうした組み立ては成り立たなくなる。課題を抱えつつも、鍵ノ手文第 3 段階と花弁状雲形文第 2 段階、鍵ノ手文第 4 段階と花弁状雲形文第 3 段階が対応する可能性は十分あるだろう。三叉状入組文は鍵ノ手文第 3 段階と第 4

段階に対比する根拠がある。鍵ノ手文の第4段階後続相は粗大工字文古相との対比が期待できる。

鍵ノ手文第2段階と花卉状雲形文第1段階が対応するなら、これらを主要な要素として、佐野1b式を考えてみてはどうか。鍵ノ手文第3段階、三叉状入組文の一部、花卉状雲形文第2段階という組み合わせ、鍵ノ手文第4段階、三叉状入組文の一部、花卉状雲形文第3段階という組み合わせが可能なら、いずれも宮崎遺跡第10層一括資料とある程度重なり、佐野2a式を考える材料になろう。粗大工字文の新相は佐野2b式の要素だろうが、その古相はどうであろうか。

#### (4) 粗製土器の見通し

##### ア 基本的な技法

粗製土器(深鉢)が確立するのは恐らく堀ノ内式の段階であろう。以来、甲信地域の粗製土器は口唇部の突起や圧痕くらいしか装飾要素はなく、原則的に無文である。これに例外が生じる時期が2回ある。その1は後期前葉～中葉で、西関東系譜の圧痕付隆帯を採用するタイプが、ひとまとまりある。その2は晩期後葉の後半で、細密条痕が広汎に採用されるが、これは何らかの図柄ではなく、意図的な整形痕跡と考えても良いかもしれない。

粗製土器は最終仕上げのミガキを省略しがちなので、ミガキに先行する成形・整形痕跡が観察しやすい。有文の精製土器も体部下半は大半が無文で、深鉢であれば粗製土器同様に整形痕跡が観察できる。その観察の結果、後期～晩期の深鉢形土器に共通する成形・整形技法を把握することができた。

底部は粘土の円板で、その上に粘土帯を積み上げる。輪積みあるいは巻き上げで、粘土帯の幅は作業を行なう親指の長さで規定されるだろう。接合面を斜めに整える例が若干観察される。接合面は内外両面からオサエて固めるので、帯状の凹部が形成される。オサエ痕や帯状のオサエ痕、粘土帯の接合線などは、成形の痕跡である。施文や整形は器体が乾燥する前に行なはずで、乾きすぎた場合の再加湿は必須だろう。施文の大半は生乾きでないと困難で、乾燥が進んでからケズリ、さらに乾燥させてミガキが可能になる。器壁が薄い個体ほどケズリの痕跡が少ない傾向がある。器厚は素材の粘土帯の厚みで調整するのだろう。ケズリは器壁薄化の手段ではなく、器面の凹凸をならす程度の、アタリの浅いあるいは軽いものである。そのためオサエ痕跡の最凹部にまでケズリが及ばず、凹凸がならしきれない例が多数見られる。ケズリの精度は個体差が大きい。外面のケズリの方向は、体部下半では下から上へ、口縁部近くでは右から左へ、その中間は右斜め下から左斜め上へ向かうのが標準的である。成形できた土器を左手で抱え、右手で底部側から口縁部に向かって削り上げたと推測する。ナデも同一方向で行なわれている。この技法は右利きの製作者にとっては最も自然な方法だろう。かつて、浮線文期に標準的なケズリ・ナデ技法と呼んだ[百瀬1998]が、エリ穴遺跡では堀ノ内式期以降、どの時代の土器にも標準的に認められることが確認できた。外面ほどではないが、内面にもケズリは行なわれる。精製土器で多用するミガキは最終工程だと推測するが、その方向は読み取りにくい。

イ 堀ノ内式期の粗製土器 [精製器形転写形：S1-3[①]、J19-10[①]、J19-68[①]・J19-69[①]、J38-24[①]、D101-1[②]、D339-8[②]、砲弾形：J18-7[①]、J39-163[①]、D339-9[②]]

堀ノ内式期の遺構に帰属すると判断できた粗製土器を挙げる。S1-3とD101-1は、器壁が厚く、体部は緩く膨らみ、口縁部は外傾する。口縁部外面側が肥厚して面を構成し、端部は尖り気味となる。これは堀ノ内1式の精製深鉢と同一形態で、口縁部の面は口縁部文様帯に対応するだろう。精製土器の形態ながら、施文を全面省略して粗製土器としたと見る。同一器形ながら口縁部肥厚と面を省略し、端部を尖らせたのがJ19-10、J19-69、J38-24などである。これらも精製土器の系譜に準ずるだろう。体部が膨らみ口縁部が内

傾する J19-68 や D339-8 の、口縁端部はやはり尖り気味である。若干プロポーションが異なるが、J19-69 と近縁であろう。

18号住居、39号住居、土坑339からは、単純な砲弾形の深鉢も出土している。J18-7やD339-9がそれで、口端部は丸く取め、尖り気味ではない。J39-163も同器形だが、器壁はやや薄く、口端部は尖る。

堀ノ内期の粗製土器は大きく二形態に区分できそうである。堀ノ内1式精製土器の形態そのままの「精製器形転写形粗製深鉢」と、単純な砲弾形の「砲弾形粗製深鉢」である。いずれも器壁が厚く、口端部が尖り気味となる傾向がある。粘土帯の接合は甘く、接合線が残りがちである。外面は凸部にはケズリを施すがオサエ痕跡が残り、内面にはケズリが目立たない。これに西関東系譜の隆帯文付の粗製土器がいくらか加わる。

ウ 加曾利B式期の粗製土器 [砲弾形：D406-44～D406-56] ②、西関東系譜：J25-1] ①、J31-22] ①]

加曾利B1式期前半の土坑406は絶好の一括資料である。粗製土器も明瞭に把握でき、すべて砲弾形で、堀ノ内式期の砲弾形を継承すると見てよい。異なるのは口縁端部形態で、D406-49だけは尖り気味だが、D406-44、D406-46、D406-48は平坦に変化する。器壁は厚く、外面のケズリは徹底しないが、堀ノ内式期より精度が上がるように見える。底部D406-51～D406-56は底板が外面側に張り出し気味で、オサエで仕上げている。

加曾利B2式期の28号住居出土の粗製土器もすべて砲弾形で、口縁端部は平坦かやや丸みのある平坦面を作る。器壁は厚く、整形方法や底部形態も土坑406出土土器と同様である。同じ砲弾形ながら、口唇部にユビ圧痕を加えるJ25-1やJ31-22などは、西関東系譜の隆帯文付粗製深鉢からの変化だと考える。隆帯と口唇圧痕を併用する例が塩尻市八窪遺跡[百瀬他1988]にあるからで、この仲間は器壁が特に厚い。

加曾利B式期の粗製土器は、砲弾形粗製深鉢を主体とする様相が確立したと見たい。精製器形転写形粗製深鉢は未確認だが、どの時期にも少量ずつ存在しても不思議はないと思われる。

エ 上ノ段式期の粗製土器 [精製器形転写形：Ek-12、砲弾形J17-54～J17-67] ①、J36・G12] ①]

上ノ段式期の17号住居と36号住居出土粗製土器は、すべて砲弾形粗製深鉢で、器壁は厚い。口縁端部は平坦が僅かに凸面となる。加曾利B式期の形態を継承するが、若干異なるのは口縁内面側に肥厚気味になることである。より正確には、口縁部は前段階同様の厚みを保持するが、それ以下は若干厚みを減ずるので、口縁部が肥厚したように見えるのだろう。底部のJ17-65やJ17-66も前段階とほとんど違いはない。Ek-12のような精製器形転写形粗製深鉢も少量存在する。

オ 隆帯文系土器と共伴する粗製土器 [中ノ沢K式共伴砲弾形：Ea-7、Ea-9、Ej-14、Ek-14、Eo-30、Ep-7、中ノ沢B類型共伴括形：J14-1] ①、J26・G1] ①、Ee-47、Em-7、同外傾形：J13-G7] ①、Er-48、同砲弾形：Ea-9、Eo-31]

隆帯文系土器前半、後期末葉の中ノ沢K式期は遺構が判然とせず、共伴関係を根拠に抽出できる粗製土器はない。隆帯文系土器後半、晩期初頭～前葉の遺構は、29号住居をはじめとして、全体に粗製土器が貧弱で、良好な資料が抽出できない。この時期の粗製土器は、別の方法で見つけ出さねばならない。

中ノ沢B類型の晩期平縁隆帯文土器の深鉢の大半は、口縁部の突起と隆帯文しか装飾要素はなく、それ以下は無文である。隆帯を省略すれば、そのまま無文粗製深鉢に転化しうと思われ、突起だけを装飾要素とした無文深鉢は多数存在する。それらは精製器形転写形粗製深鉢と見て良いだろう。

晩期平縁隆帯文深鉢には、括形深鉢と外傾形深鉢の2つの形態があること、外反して立ち上がる底部形

態をとることを(2)アで報告した。それらは成形・整形技法にも特徴がある。後期後葉以前の深鉢よりも明瞭に、また晩期中葉の深鉢よりも若干、器壁が薄い。オサエ痕跡が深く残り、それが器面に凹凸を生む。ケズリをあまり行なわない個体が多く、特に内面側はオサエでナデただけの器面の場合が多い。丁寧なケズリをもつ場合もあるが、オサエの凹部を消しきれない。薄くてオサエが顕著に残る器面をもつ括れ形深鉢が、晩期平縁隆帯文深鉢の主流派である。また、隆帯文に付随して多用される突起は、器壁と同厚の板状で、口縁と同じ傾きで上方に突出する。口唇の圧痕は稀である。

括れ形深鉢で板状の突起をもつ代表例はJ26・G1、Ee-47、Em-7などで、突起のないJ14-1も同類だろう。これらは平縁隆帯文深鉢の精製器形転写形深鉢だといえるだろう。外傾形深鉢ではJ13-G7、Er-48などが該当する。後期以来伝統的砲弾形ながら、Ea-9、Eo-31は器壁が薄く、成形・整形技法も晩期平縁隆帯文深鉢と同一なので、同段階の産と見る。併せて3形態の粗製土器が並存すると考える。

砲弾形深鉢Ej-14やEk-14も晩期平縁隆帯文土器と同様の技法で、器壁も薄い。若干異なるのは口縁端部で、そこだけは厚く、内傾傾向が明瞭に残る。器壁全体は薄く変化しつつも、口縁部の肥厚だけは上ノ段式期の特徴を継承したと見てはどうか。これらが後期末葉中ノ沢K式期の粗製土器の候補である。

カ 佐野1b式～佐野2式の粗製土器 [佐野1b式括れ形：J26・G8]①、Wi-26]②、D457-54]②、同外傾形：D457-45]②、同砲弾形：J26・G26]①、D457-46～D457-49]②]、[佐野2式精製器形転写形：D200-30～D200-32]②、同口縁外屈：S2-G74]②、Wa-25]②、同砲弾形：J21-14]①、J22・G287]①]、Wg-41～Wg-43]②、D91-11]②、D200-33]②]・D200-34]②]

佐野1b式期の遺構に帰属する粗製土器の好例は、土坑457と26号住居から得られる。括れ形深鉢D457-54は括れが小さく、内面側にだけ稜が形成される。J26-G8、Wi-26なども同様で、括れ形深鉢の形態化・衰退だと理解すべきだろう。D457-45のような外傾形深鉢は少数で、D457-47、J26-G26など砲弾形が多い。器厚や成形・整形技法は隆帯文系土器の時期と差はないが、ケズリの精度が良好な個体が増加する。口縁端部の装飾には変化がある。板状の突起は小さな瘤状に矮小化し、器体との間に貼付痕跡の隙間が残るようになる。また隆帯文系土器では稀だった口唇部の圧痕が目立つ。隆帯文系の終焉を受けた変化ではなからうか。土坑457出土の深鉢底部は単純に立ち上がり、平縁隆帯文深鉢のような外反する立ち上がり方は見られない。ガラス質の石英を多量に含む胎土が目立ち始める。

佐野2式期の遺構に帰属する粗製土器の好例は、土坑200、22号住居周辺、廃棄場Wから得られる。その形態には3者がある。隆帯文深鉢の括れ形深鉢とよく似た形態のD200-30は、鎌ノ手文施文の深鉢S2-1ともそっくりなので、肩部文様帯型深鉢の形態を転用した精製器形転写形粗製深鉢だと推測する。内傾する口縁部、小さく張り出す肩部、内面側のシャープな稜などが特徴である。Wa-25やS2-G74は口縁部がシャープに外屈する深鉢で、北陸中屋式以降に普遍化する形態とそっくりである。恐らく佐野1b式期から登場するのだろう。それら以上にD200-33・D200-34、J22-G287など砲弾形の深鉢が多数を占める。いずれの形態も技法は共通で、器壁は前段階より心もち厚くなる。ケズリの精度が向上し、外面は凹凸が少なく、内面のケズリも増加する。図示しきれていないが、ケズリの後に半光沢のナデを加える例が多くなる。口端部は瘤状小突起の他、裾に切り込みを入れた小突起が目立つ。この切り込みは精製土器の突起に加えられる三叉状の陰刻に由来するのだろう。口唇部の圧痕や、内面に沈線を巡らせる例も多い。佐野遺跡で指摘された、外面に粘土帯の接合線を意図的に残す深鉢はWg-41など少数に留まる。ガラス質の石英を多量に含む胎土は多いが、半数には届かない。

D91-11やJ21-14は内面の沈線が2条で、突起と関わって単純な直線ではなくなる。粗大工字文新相の深鉢Md-40と同一の様相で、佐野2b式に関わるのではなからうか。

晩期後葉の浮線文期に成立する囊形の器形は、D200-30などを祖とする可能性がありはしないか。J13-174[①]などはその先駆的存在ではなからうか。

### 3 特記すべき使用方法を示す土器 (図 76)

小形壺 c-126[③]は、既述のとおり内面全面に赤色顔料が付着している。付着物の材質分析はできなかったが、赤色顔料の容器として用いられた小形土器だと推測した。口縁端部が欠損するもののほぼ完形に近く、器壁はごく薄い。単純に遺棄されたなら早々に欠損するはずで、埋置など何らかの措置が講じられた可能性を考えたい。大洞 C1 式の範疇と思われる、違和感の強い胎土で搬入品の可能性があろう。大洞式分布圏で産出し、あるいは精製までなされた赤色顔料の容器として運び込まれた可能性は十分にあるだろう。また、その特別な由来ゆえに、使命を終えた後の廃棄に当たっては、廃棄場 M や廃棄場 W ではなく、南微高地中央の S21W21 グリッド周辺が選択された。このグリッドは、第 VII 章で報告する伝統的聖域の中心的エリアだと考えられる。c-126 を最終的に遺棄するにふさわしい場所だったのではなからうか。

p-1・p-2 と丸底の皿又は碗形の c-189[③]の内面にも赤色顔料が付着するが、c-126 とは異なる使用方法が推測できる。p-1 は素文平縁羽状沈線深鉢と同一の装飾を持つ浅鉢で、ごく浅く、直径は 15cm 程度と小形である。中村中平編年でこの器種の第 1 段階～第 2 段階に該当し、加曾利 B2 式末～上ノ段 1 式前半辺りに位置する。付着する赤色顔料は厚く、塗布されたのではなさそうだ。入手した顔料を取り分けたり、塗布する作業に用いたパレットの役割を果たしたのではなからうか。この器種の浅鉢は類例がごく少なく、パレットに用いるために製作された可能性もあろう。佐野式に関わる可能性がある c-189 も同様である。こちらはミニチュアサイズで、外面の文様は類例がない。特定目的に使用するために、器形・サイズを特化させた土器ではなからうか。p-2 は綱代圧痕のある底部で、器種・器形とも不明、時期も後期～晩期としかわからない。内面には厚く赤色顔料が付着する。器表面には使用による損耗が顕著だが、その損耗部分にも顔料は厚く付着し、割れ口にもかすかだが顔料が残る。使用して欠損した土器の底部を、パレットとして再利用したことが推測される。パレット用の土器は、廃物利用から特注品の可能性のあるものまで多様である。

廃棄場 E2 出土で晩期後葉の瘤入組注口土器口縁部の Eo-28 は、内面側に炭化物が厚く付着している。第 2 分冊所収の付録 4 で分析した土器片 No.8(P228 写真)がこれである。付着している黒色物質は漆の可能性が高いと報告された(P226)。瘤入組注口土器は中村中平遺跡や塩尻市館遺跡の類例から見て、丸い壺形の体部に外反する径の大きな口縁部を取り付ける。注口が付くものの、漆の容器としても十分に機能するだろう。南微高地包含層出土で大洞 BC 式小形壺かと推測する p-3 にもこれとよく似た付着物が観察された。これも漆容器の可能性があろう。

## 4 異形土器

### (1) 後期の異形土器

ア 釣手の付く土器 [J19-117[①]、J25-G5[①]、J28-104[①]、T3-36[①]、D457-69[②]、d-384[③]、d-397[③]、Ef-30・Ef-31、Eh-82、En-7、Eo-144、p-4～p-7]

釣手土器以外の釣手状部分が 23 点あるが、摘出漏れや、突起などの装飾の誤認を含むかもしれない。

明らかな釣手部分が 4 点ある。T3-36、p-4 は堀ノ内式注口土器に付く釣手だと思われる。J28-104 は器種不明だが、加曾利 B2 式磨消縄文系器種と同一の装飾を備える。橋状の釣手から枝がでており、頂部と思われる位置から貫通孔が突き抜ける。この貫通孔は釣手土器のつまみ孔(後述)と関わるかどうか。

同一個体の可能性もある Ef-31、Eh-82 は、横断面カマボコ形で環状を呈する。内側の平坦面を含めて全面的に顕著にミガキが施され、赤色塗彩もなされる。腕輪にしては直径が大きすぎるので、釣手の付く土器

に含めたが、土製品の可能性も残る。

扁平・板状の釣手状あるいは環状の部位が 12 点 (J25・G5、D457-69、p-5～p-7) ある。釣手土器の要件を満たさないとと思われるので、ここにまとめた。そのうち J25・G5、p-5～p-7 の 4 点に環の外側から内面に突き抜ける直径 4～5 mm の貫通孔が設けられ、孔の外縁には装飾が加えられる。どんな器種なのか不明だが、装飾や形態は共通性がある。D457-69、p-6 は後期前葉～中葉の土器と類似した胎土をもつ。一方 p-5 は香炉形土器とのかかわりも捨てきれない。すべて南畿高地上の遺構やグリッドからの出土である。

Eo-144 は接合しないが類似した胎土をもつ断片が 5 片あり、同一個体と推測した。J28-104 や T3-36 などと同様に、混入鉱物がほとんどない後期前葉～中葉の土器に似た胎土をもつ。そのうち 2 点は土偶の可能性があると考え、d-384 と d-397 として第 3 分冊に掲載したが、釣手の付く土器 Eo-144 の断片だと判断を変更する。Eo-144 は幅 11 mm、厚さ 7 mm の角柱状の粘土紐の上に、直径 7 mm 前後の楕円形粘土紐を交差させて貼り合わせる。面によって整形の精度が異なり、外面・内面が識別できるので、釣手状の部位だと判断できる。

三叉文をもつ釣手も 2 点ある。Ef-30 は楕円形、En-7 はより扁平な楕円形の横断面で、緩い弧を描くので、釣手土器の釣手部に似た形態である。香炉形土器に付くとも思われず、位置付けに窮する。

#### イ 靴形あるいは双口の土器 [p-9]

靴形あるいは双口の土器の可能性のある底部が 1 点ある。底面が正円形や楕円形ではない p-9 がそれで、内面整形も壺肩部の内面に似ており、底部でありながら指が届きにくい部位だったのだろう。靴形や双口の土器かと推測する。薄手で外面はミガキが卓越し、櫛状工具で施文するので、堀ノ内式石神類型の図柄が描かれるのだろう。

#### ウ 4 脚の付く土器 [D255-6] [②]

D255-6 は脚が 3 つ付く精製鉢だと報告したが、脚は 4 つの可能性が高いと判断を変更した。底部には 2 つの脚が対向配置されて残るが、現存する脚の中間にかすかな盛り上がりの痕跡が 2 カ所あり、それらを脚の痕跡と推測して 4 脚だと判断した。残存する 2 脚の横断面はほぼ円形で、底面中央が大きく窪み、外周には網代瓦痕が残る。脚は中空か中央は不明である。胎土・整形とも精度が高く、沈線内もミガキが卓越する。加曾利 B1 式前後と推測する。

エ 釣手土器 [古相：Mi-46、p-10～p-12]、中相：J17-53 [①]、J22-39 [①]、Eb-127、Ei-62、Eo-145、Er-49、p-13～p-21、新相：J17-34 [①]、Eh-83～Eh-85、p-22、不明：p-23]

これまでの研究で、中期の釣手土器とのつながりは辿りきれないこと、後期中葉以降に関東で盛行した後期末葉には衰退すること、後葉後葉には東北に波及して独自の形態(香炉形土器)に転換すること、後期末葉以降にそれが関東に逆輸入されることなどが推測されている[蜂屋 2004]。そこで、関東の系譜に連なるものを釣手土器、東北の後期後葉以降の系譜に連なるものを香炉形土器として報告する。

釣手土器に該当する可能性があるのは 39 点である。釣手土器の中心的分布域は利根川中下流～東京湾岸で、千葉県が多数を占める。中でも佐倉市宮内井戸作遺跡 124 点、市原市祇園原貝塚 83 点、同市西広貝塚 44 点など、集中的に出土する遺跡が知られる[蜂屋孝之 2013]。エリ穴遺跡の 39 点はそれらに次ぐ。甲信地域では中村中平遺跡の 7 点、安曇野市難山遺跡と山梨県北杜市姥神遺跡の各 1 点などが知られる。

浅鉢に釣手を掛け渡すのが基本形態で、部位名称として「鉢部」、「釣手部」を用いる。関東では鉢部に高台が付く例が少なくない。エリ穴遺跡では高台の有無は不明であるが、部位名称としては高台部を用意する。

釣手部の頂点には杯状のつまみが付けられる。鉢部との接合点や頂点との中間点に瘤状の把手が貼付される。つまみと把手には貫通孔が穿たれ、そこに紐を通して吊り下げられるようになっている。それぞれ、「つまみ部」、「基部把手」、「中間把手」、「紐孔」と呼ぶことにする。紐がずれない工夫なのか、基部把手からつまみ部中央まで、紐孔を繋ぐ沈線が縦貫する。「縦貫沈線」と呼ぶ。関東では紐ずれを防ぐ為に釣手部を縁取ったり、隆帯を縦走させるようだが、その類例は図示し得ない断片2点しかない。縦貫沈線の卓越は甲信地域の特徴だといえよう。つまみ部が杯状なのは、そこが紐を結わえる場所だったからだとされる。つまみ部中央には紐孔とは別に、上下方向に貫通孔が穿たれる。「つまみ孔」と呼ぶ。器体のサイズにもよるが、紐孔の直径は2～8mm、つまみ孔は10～15mm程度である。以上の釣手部の諸要素は、すべて紐を通して吊り下げる機能を荷っている。その中でつまみ孔の機能だけは不明である。アで記した釣手の付く土器の中に、J25・G5、J28-104、p-5～p-7など釣手頂部に貫通孔を穿つものがある。それらは時間的位置付けが定かではないが、J28-104は釣手土器と接点を持ちうるだろう。つまみ孔を考えるヒントになるかもしれない。なお、ごく一部だが紐孔が貫通しない把手部がある。

鉢部外面には一般的な浅鉢同様の文様が描かれる。紐孔を繋ぐ沈線とは別の、把手を突き抜けない沈線が、釣手部には加えられ、把手の上にも沈線・圧痕・縄文が描かれる。これらは単なる装飾である。

中期の釣手土器も後期のそれも、釣手部の形態の相違から、第1種～第4種に区分できる。第1種は釣手部がアーチ状とならず、単に上方に延伸する。中期には類例があるが、後期には希少らしい。釣手部には基部把手と中間把手が付き、紐孔が穿たれるので、第1種にも紐を通して吊り下げる機能は十分にある[蜂屋2016]。第2種は単純なアーチ状の釣手部で、第3種には第2種のアーチ頂部から別のアーチを掛け、第4種は十文字に交差するアーチを掛ける。アーチ状の釣手部によって、それぞれ2窓、3窓、4窓を形成すると見ることができる。

釣手土器は羽状沈線文系の器種である。エリ穴遺跡や中村中平遺跡では、体部は無文の比率が高いが、縄文はなく、羽状沈線は第5種が確認できる。関東の第2種や第4種の体部も各種斜線文をもち、縄文や無文は少数派である。

エリ穴遺跡出土の釣手土器の大半は第2種である。第1種の可能性があるのは1点J17-34のみ、第3種も1点(p-23)である。第2種～第4種の識別は、半完形以上かつつまみ部以外では困難だが、4点あるつまみ部のうち3点は第2種であった。関東でも第2種が大多数を占めるようである。釣手部が残らないEh-83も種別不明である。残りの36点を第2種と考える。

唯一第1種の可能性があるJ17-34は、上ノ段2～3式期の17号住居から出土した。鉢部は3/4が残存する半完形品である。口縁端部に大小4対の突起をもつ浅鉢と考えて報告したが、大突起の剥落部分の2カ所に縦方向の貫通孔の痕跡を見出した。それは実測図の正面ではないので、表示されていない。大突起残存部分のサイズは、第2種釣手部最小のp-15とほぼ同じなので、第2種～第4種に入らないとは言えない。しかし、鉢部の形態や文様構成は第2種とはかなり相違しており、関東の第2種にも類例がなさそうなので、第1種の可能性を考えたい。J17-34は底部が残る唯一の例である。緩い凸面を呈する平底で、高台は付かない。椀状に立ち上がり、口縁部は屈曲を持たない。口縁部には2条、底部直上には3条の沈線帯があり、縄文が充填される。口縁部は4等分されるので、釣手部は4個有ったと推測され、そのうち3個の欠損・剥落痕跡が残る。釣手部の形態は不明だが、剥落痕からは幅20mm程度、厚さ10mm未満の板状と推測され、エリ穴遺跡では最小ではなかろうか。その釣手は口端外面側に、水平な口縁部とほぼ直交するように貼付される。第2種は釣手基部を補強し、口縁に斜めに擦り付けるのが大半であるのに比べれば、J17-34の成形方法は安直で、手抜きといわざるをえない。第2種のp-22も同様で、注意すべき特徴である。釣手部の中間の口端には大きめの丸瘤が貼付される。このような形態・装飾の浅鉢は、上ノ段式にも加

曾利 B2 式にも近似例が見出せないが、その描線は加曾利 B2 式より上ノ段式に近い。釣手部は鉢部口縁の上に乗るが、その末端は鉢部外面側を垂下し、口縁部文様帯を分断する。これは第Ⅱ種 p-22 と共通の特徴で、p-22 は上ノ段 3 式末に位置付く（後述）。17 号住居出土土器は上ノ段 2～3 式の半完形品が主体的で、加曾利 B2 式は小破片に留まる。総じて J17-34 は上ノ段式に共伴すると見たい。

唯一の第Ⅲ種は p-23 で、つまみ部だけが剥落して残存する。そこには 3 方向からの紐孔が穿たれるので、確実に第Ⅲ種である。つまみ孔は確定できないが、恐らく貫通していただろう。つまみ部は根元に縄文が施されるが、沈線はなく、時期決定の根拠を見出せない。

36 点の第Ⅱ種のうち、部分的にせよ鉢部が推測できるのは 6 点（J17-53、Eh-83、p-10、p-12、p-19、p-22）である。Eh-83 以外は鉢部と釣手部の接合部分で、基部把手が明瞭に残る。Eh-83 はごく浅い鉢の口縁部に何かを取り付けられている。断面形や装飾から見て「フ」の字文鉢の仲間であることは確かだが、口径が小さい上、非常に浅い。また、その何らかの貼付の直下の体部無文帯に単位文が描かれるが、この位置への施文する器種は皆無である。単なる浅鉢とは思わず、釣手土器の鉢部だと判断した。

釣手部と口縁端部はほぼ同厚で、口端の真上に釣手部の基部が乗るように接合する。釣手部の断面形は平たい板状で、その基部はやや幅を広げ、口縁部との接合面を広く取ろうとする。釣手部は僅かながら末広がり形態をとるのが基本らしい。その中で、p-12 の釣手部基部は特に大きく広がり、むしろ波状口縁の波頂部に釣手部を接合させたように見受け、p-10 もその傾向がある。釣手部と口縁部とはほぼ直交するが、接合部では滑らかに擦り付けていると言えよう。こうした中で、唯一例外なのは p-22 で、釣手部のほうがかなり厚く、口端から外面側に大きくはみ出して接合する。釣手部断面形はやや厚めで、柱状に近い。

釣手部と口縁部の接合部に基部把手が貼付される。口縁端部とほぼ同じ高さの位置である。基部把手には紐孔が穿たれ、そこから縦貫沈線が発する。縦貫沈線末端は基部把手の紐孔で止まる（p-10、p-12）か、より下位側（口縁部側）に僅かに延伸する（J17-53、p-19）だけである。基部把手までが釣手部、その直下からは鉢部のスペースで、鉢部独自の装飾などが加えられる。これが共通の様相だが、p-22 は異なる。厚みの異なる釣手部は口縁端部より下方に延伸し、鉢部の屈曲部に貼付される装飾の瘤にぶつけられる。縦貫沈線は基部把手の紐孔を突き抜けて延伸し、その装飾瘤にぶつかって止まる。p-22 の釣手部は鉢部のスペースを明瞭に侵犯しているといえる。

鉢部の形態は判然としなが、Eh-83、p-22 以外は口縁部と体部を区分する屈曲を持たないらしい。体部の装飾は、p-12、p-19 は無文、J17-53 は 2 条の沈線で水平に分帯、p-10 は釣手部から延伸した沈線が口縁部と併走するようだ。J17-53 の沈線は加曾利 B2 式以降の羽状沈線文系器種に時折見かける。一方、Eh-83、p-22 は明瞭な屈曲をもち、羽状沈線文系の「フ」の字文鉢とほぼ同一構成である。屈曲部より上位が口縁部で、そこに 2 条の沈線を横走させ、その上下を縄文帯とし、屈曲部直下にも沈線 1 条を配する。上ノ段 3 式の標準的な様相と差がない。p-22 釣手部直下の瘤は、その窟に弧状の沈線をめぐらせ、中央に太い圧痕を加えており、上ノ段 3 式末期に限定的な単位文である。体部に配される羽状沈線は第 5 種である。どの特徴をとっても、上ノ段 3 式末期の標準的な様相を示し、関東の曾谷式との対比が期待できる。Eh-83 も近い位置だろう。p-22 の釣手部の断面形は幅に比べて相対的に厚く、柱状に近かった。他の 4 点は相対的に薄く、板状であった。柱状は新相、板状はより古い相（古相～中相）であろう。鉢部の様相から判明した p-22 の位置付けをもとに、次に断片を含めて釣手部を検討する。

新相と推測した柱状に近い釣手部には、幅が狭い割りに厚みがあり、内面側が凸面を呈する Eh-84・Eh-85 などの 3 点が該当する。カマボコ形断面ともいえるこの 3 点は、いずれも内面側に丁寧なミガキを加えるのも特徴だ。それ以外は板状で、p-20 など中間の様相をもつものも若干あるが、不明瞭なのですべて一括し、古相～中相と考える。



p-22の紐孔は2孔で、紐孔を縦貫する沈線は、基部把手の下方まで明瞭に突き抜ける。J17-53の紐孔は2孔、p-19の紐孔は1孔で、縦貫沈線は基部把手直下まで僅かに延伸する。p-12の紐孔は3孔、p-10の紐孔は2孔で、縦貫沈線は基部把手下端で止まる。縦貫沈線が止まる位置は、p-22が新相なら、p-10、p-12は古相、J17-53、p-19は中間的で中相であろう。紐孔の数は中間把手の紐孔数、紐孔を貫通する縦貫沈線の条数と連動する。エリ穴遺跡では2孔が大多数を占め、3孔をもつのはp-12が唯一である。1孔も4点(Mi-46、p-19・p-20、p-23)しかないが、関東では1孔が主体なので、関東の影響を受けた系統差を示すものかと推測する。3孔のp-12は異様で確立以前の古相を示し、中相～新相は2孔が標準的になるのであろう。

紐孔が貫通しない例が3点あり、Er-49、p-13、p-20が該当する。Er-49、p-13は2孔で中間把手部分にあたり、1孔は貫通するがもう1孔は途中で途切れる。p-20は1孔で、これも中間把手らしく、縦貫沈線は把手にぶつかって止まっている。機能形態化だと考えればこれらは末期相に該当することになるが、以下で検討するように、この3点は末期相とは言い難いので、個別の手抜きなのだろう。1カ所や2カ所、紐が通せない箇所があっても、吊り下げる機能が損なわれるとは思えない。逆に、すべての紐孔に紐を通すなら、不必要なほどの厳重さで、実用性とは別次元の何らかの意図が込められていると考えることもできよう。

基部把手、中間把手ともその上に装飾が加わる。9点と最も多いのは把手上を縦貫する沈線で、縄文を併用する場合もある。把手に直交する連続圧痕(刻目)が2点(Mi-46、p-12)、丸い点刻が1点(p-11)、縄文を充填するものが1点(p-16)、無文が4点である。甲信地域では加曾利B2式のそろばん玉鉢屈曲部などに連続圧痕が加えられる。だが、上ノ段式の指標である「つ」の字文鉢には採用されず、早々に衰退する。これは刻目を多用する関東地方とはかなり異なる。丸い点刻はそろばん玉鉢の単位文にも見られるが、加曾利B2式段階の磨消縄文系器種の単位文にも付随的ながら多用される。Mi-46、p-11・p-12の3点は加曾利B2式段階に位置付けるのがよさそうで、これが古相だろう。最も多い縦貫沈線はp-22にも用いられる。その末端は把手の末端を突き抜けて、釣手部の本体の上まで延伸する。同様の延伸はEh-84・Eh-85にも確認できるので、釣手部断面形の新相に通用の特徴だと判断する。これが把手の装飾の新相である。新相以外の沈線は中相と考える。隆帯上を縦貫する沈線は中ノ沢K式の指標となる装飾である。把手上を縦貫する沈線はこれに近いが、上ノ段3式の波状縁深鉢Eo-13にも同様の縦貫沈線が採用されるのが確認でき、上ノ段3式以前に遡りうる装飾であることが判明した。中相は上ノ段3式との接点を持つ。無文や縄文のみの把手は位置付けが難しいが、古相や新相に置く積極的な理由はなく、中相に含める。

把手以外の釣手部本体には、沈線や縄文が付加される例が多数ある。紐孔を縦貫する縦貫沈線両側(外側)に沈線を描く。「付加沈線」と呼ぶが、把手やつまみ部にぶつかって途絶するので、単なる装飾である。中相にも新相にも付加沈線の有るものとないものがあるので、両者は並存し、その有無は時間差ではない。沈線間の隆起部分は縄文部と無文部が交互に配置される。新相のEh-85は全面に縄文を加えるが、これが新相の特徴だとは言い切れない。

つまみ部が推測できるのは2点(Eh-85、Eo-145)である。釣手部の特徴からEh-85は新相、Eo-145は中相である。2点ともつまみ部は器壁の薄い杯状で、つまみ部の根元付近に隆帯を一巡させ、口縁直下には沈線を巡らす。いずれにも小さな瘤が付加されるが、その形態や貼付位置は微妙に異なり、縄文の有無にも違いがある。それらを時間差として普遍化してよいかどうかはわからない。つまみ部が乗る釣手部頂部は幅が大きく広げられて、左右に突出する。これは関東の第Ⅱ種にも類例があり、普遍的な特徴なのだろう。

以上、エリ穴遺跡の釣手土器の第Ⅱ種を、古相、中相、新相に段階区分した。古相はMi-46、p-10～p-12の4点、新相はEh-84・Eh-85、p-22他の4点で、中相は残りの28点である。中相はさらなる細分の可能性を内包する。古相は加曾利B2式に対応する。新相は上ノ段3式に対応し、その末期に該当するものを含む。中相は加曾利B2式後半～上ノ段3式前半あたりに対応することが期待できるだろう。17号住居

出土の第Ⅰ種 J17-34 は新相に対応し、出土状況も合致する。第Ⅲ種の p-23 は段階不明である。中村中平遺跡出土の 7 点は、エリ穴遺跡の中相に対応するだろう。その編年観は紐孔の形骸化を主要な根拠としたが、既述のとおり、それは個別の手抜きの可能性が高いことがわかった。中村中平編年は見直しの必要がある。ただし、その中には上ノ段式が含まれる可能性が高く、加曾利 B2 式の幅の中だけでは取りまきらないだろう。

釣手土器の分布は南微高地中央、廃棄場 E、17 号住居（上ノ段式）にある程度まとまる。特に新相は廃棄場 E に集中し、後期後葉の土器の分布に近いだろう。

オ 異形台付土器 [関東系：J18・G9〔①〕、J36・G16〔①〕、Ej-33、p-25～p-27、東北系：Eb-128、Ej-34、p-28・p-29]

異形台付土器の祖形は加曾利 B2 式の注口土器の一種と考えられ [内田儀久 1984 他]、変遷の末異形台付土器に至り、さらには手燭形土製品が派生する [蜂屋孝之 2006]。中村中平遺跡で確認できた羽状沈線文系瘤入組注口土器 [馬場・百瀬 他 2011] は、変遷前半の異形台付土器との共通点をもつことも判明している。全体像が推測できるのは 1 点しかなく、断片的な資料なので、内田編年に基づきつつ概観する。10 点出土したが、6 点は関東で標準的な異形台付土器で、4 点は後期後葉の東北系香炉形土器の可能性もあり、器種判断に迷いつつここで取り上げる。

p-25 は唯一全体像が推測できる。口縁部を欠失するが、胴部には小さく突出する袖部が残る。胴部上半には対になる弧線に分解していない構図が、下半には第 3 種羽状沈線が描かれる。高さのある台部は円形の透孔をもち、その下位には第 3 種羽状沈線が描かれる。内田編年第Ⅲ段階（加曾利 B2 式）に該当する。p-26 は注口部の断片で、筒形に突出する形態をとらない。周辺の構図は不明だが、対の弧線ではない。内田編年第Ⅳ段階以前に位置付くだろう。p-27 は胴部が丸く、注口部は筒形に突出する。描かれる図柄は弧線に接近する。内田編年Ⅳ～Ⅴ段階（加曾利 B2 式～B3 式）に位置付きそうだ。J36・G16、Ej-33 は口縁部で、胴部から単純に立ち上がる。2 条 1 対の沈線を何組か横走させる。内田編年第Ⅶ段階（曾谷式並行）に該当しそうだ。瘤入組注口土器の口縁部第 3 タイプともそっくりである。

Eb-128、Ej-34、p-28・p-29 の 4 点は判断に苦しむ土器である。Ej-34 は口縁部で、鋭く屈曲して胴部に至る。底部を欠損するが、屈曲以下の胴部の傾き方から見て、台部が付く可能性があるだろう。内傾する口縁部は狭いが明瞭な文様帯となり、4 単位に分割されて、2 種類の単位文を交互に配置し、それを縦貫する沈線を加えた弧降帯で繋ぐ。第 1 の単位文は丸い透孔の下に 1 対の丸瘤を貼付し、第 2 の単位文は縦降帯の中央に尖った瘤を付加する。p-29 は別個体だが Ej-34 に酷似する。この 2 点は瘤付土器前半の様相をもつのではあるまいか。p-28 も Ej-34 に近似するが、貼付される瘤はさほど尖らず、単位文を繋ぐ降帯は直線的で、降帯裾には沈線を巡らせて楕円形を描く。この楕円沈線は後期安行式の隆起帯縄文の裾に描かれる構図とそっくりで、東北系譜・安行系譜の折衷のように見受けられる。Eb-128 も Ej-34 と同様なプロポーションの鉢部で、屈曲を補強する降帯が貼付される。鉢上部は丸瘤を付加した単位文の突起を、2 列の刺突列で繋ぐが、刺突は所々で貫通する。器壁が柔らかいうちに外面側から丸棒状工具を押し込んだ刺突で、多孔底土器の孔を彷彿とさせる。資料収集が不十分だが、東北地方の後期の香炉形土器にも、関東地方の異形台付土器にも、あまり類例を見ない。器種の判断に苦慮する。

異形台付土器は概ね後期のうちに納まりそう、その出土状況は新相の釣手土器に近いのではなからうか。

## (2) 後期～晩期の異形土器

ア 透孔をもつ注口土器 [後期東北系：J17-122〔①〕・J17-123〔①〕、p-30、晩期東北系：Me-66] [S=1:2]

体部中央～上半に多数の透孔をもつ注口土器が若干存在する。少なくとも液体の容器にはならず、異形土器だともいえるので、ここで取り上げる。

第1のグループは微隆起線文を施した後期の東北系譜の注口土器3点と、その類品の断片1点である。J17-123とp-30は体部中央付近に多数の透孔があり、J17-122もその同類である。J17-123は体部が丸く、屈曲して外反する口縁部をもつ。最大径付近に注口が1対、その中間には環状の把手が取り付けられる。最大径以下は欠損して不明だが、残存する体部上半分に全面的に三叉状の小さな透孔が穿たれる。外面側から器壁を切り込んで、内面側に粘土層がはみ出して残る。瘤付土器第1段階の可能性(小林圭一氏教示)がある。

第2のグループは亀ヶ岡式の注口土器 Me-66 で、1点のみである。佐野式後半に顕著なガラス質の石英を多量に含む胎土である。体部はそろばん玉状の断面形となり、体部中央で鋭く屈曲、屈曲部にはB突起が並列し、B突起間は三叉状に削り取られる。体屈曲部より下位には雲形文が描かれ、ネガ部分は陰刻されて浮彫となる。こうした特徴から大洞C1式の注口土器だと判断する。問題は屈曲部より上位で、玉抱三叉文状の図柄が透孔で表現され、それが連続するので、透孔だらけとなる。外面側から切り込んで表出し、内面に粘土層が残る。

イ 香炉形土器 [後期末葉東北系:p-31・p-32、同関東系:S18-27②]、p-33・p-34、晩期第1タイプ: Ee-109、Ei-64・Ei-65、Eo-146、Ep-102、p-36・p-37、同第2タイプ: Ei-66、Es-63、Mj-71、p-35、同その他: D750-2②]、Mg-25・Mg-26、釣手部: J33-63①]、En-8、p-38、p-42、晩期? 鉢部: p-39～p-41、晩期? 釣手部: J13-G24①]、J13-G40①]、J14-G5①]、J26-G24①]、We-55②]、D457-70②]・D457-71②]、Ec-9、Eg-45、Ei-63、En-9、Ep101、Ep-103] [S=1:2]

釣手土器を祖形として、東北地方で後期後葉に香炉形土器が成立するとの見通し[蜂屋2004]に従い、後期後葉以降の東北系譜を香炉形土器として扱う。ただし、その中には後期安行式の裝飾要素をもつものが含まれている。

エリ穴遺跡の香炉形土器の大多数は断片で、器形は把握しきれない。透孔を多用する破片を集めたので、他の器種の断片が混入している恐れもある。また高台をもつ例が多いようだが、香炉形土器の高台を特定するには至っていない。香炉形土器として報告するのは62点である。そのうち後期末葉の可能性のあるのは5点、晩期と思われるのが21点である。残り36点の多くは三叉文や三叉状の透孔を持つので、晩期の産ではなかろうか。晩期に属する人面付の土器の中に、香炉形土器の可能性のあるものが含まれるが、それらはこの数に含めず、次のウで報告する。

記述の便を図るための部位名称は、祖形の釣手土器を受けるのが良いと考え、高台部と鉢部を使用する。鉢部はその上位で内屈する例が多いので、必要に応じて、鉢下部、鉢上部を用いる。問題は釣手部で、その形態は大きく変化しているが、適切な名称が見出せないで、祖形の部位名を継承して「釣手部」と呼んでおく。釣手部を細分する表現は、「釣手頂部」、「釣手基部」とする。香炉形土器の釣手部には2～4個の窓が開けられる。釣手土器釣手部の中間の空白部を受け、そこをデザイン化したものと思われる。鉢部と釣手部の境界はこの窓の位置だと思われ、窓以上を釣手部、それより下を鉢部とする。高台をもつ皿状や浅鉢状の鉢部は、内屈あるいは内湾して立ち上がり、その上に内傾して大きな窓をもつ釣手部が乗り、その頂部は閉じて明瞭な突起が付く、といったところが代表的な釣手土器のプローションなのだろう。釣手部の器壁は概して薄く、内面は生乾き状態でナデられて、表面に凹凸が残る。

ところが、中部～関東には鉢部と釣手部が一体化して丸く、透孔は穿たれるが窓はなく、頂部は普通の鉢のように開く例がある。普通の浅鉢と違わないプローションながら、体部に大きな透孔を穿つ Mg-25 などは、そうした変形の仲間ではなかろうか。破片では香炉形土器か否かの識別は難しい。高台部以外に透孔

をもつ土器も香炉形土器に含めて報告する。

後期末葉の可能性のある香炉形土器のうち、東北系譜と考えるのは釣手部の断片 2 点 (p-31・p-32) であるが、天地も傾きも判然としない。p-31 の透孔は注口土器 J17-123 の透孔と類似し、p-32 は窓の一部ではなからうか。S18-27、p-33・p-34 の 3 点は後期安行式の装飾要素をもつ。断片ばかりなのでどの部位か確定できないが、3 点とも器壁がやや厚く、明らかに内傾し、直径は 10cm に満たない。すべて縦列する大きな丸瘤と、大きな透孔をもつ。

晩期の香炉形土器は鉢部 16 点、釣手部 5 点である。鉢部のうち Ei-66、Mj-71、p-35 は高台が付き、Es-63 もその可能性が高い。それ以外の底部は不明だが、p-36 は高台が付かないかもしれない。Ei-66、Mj-71 とも高台に施文するが、欠損して図柄は不明である。Ei-66 以下の 3 点とも高台部と鉢部の境界の界線を表示しており、Ei-66 は点列界線帯、Mj-71 は短線列を加えた隆帯が使用される。また、p-35 は沈線 1 条を界線とする。

鉢部と釣手部の接続の仕方には 2 者がある。第 1 タイプは鉢部上位が明確に内屈して短く立ち上がり、その上に釣手基部が乗る。この屈曲部分は様々な装飾が加えられ、部位の境界の鉢部側を強調する界線の役割を果たす。透孔は屈曲より上位に穿たれる。界線より下位は無文らしい。第 1 タイプは 9 点 (Ee-109、Ei-64・Ei-65、Eo-146、Ep-102、p-36・p-37 など) が該当する。第 2 タイプは鉢部が屈曲せず、外傾する鉢部上端に釣手基部が乗る。鉢部と釣手部の接合はシャープな屈曲を持たせず、釣手部は次第に内傾して立ち上がり、界線は設定されないようだ。透孔は鉢部にまで及ぶ。また、鉢部下位からその下の高台部まで全面的に施文される。第 2 タイプは 4 点 (Ei-66、Es-63、Mj-71、p-35) で、すべて高台が付く。2 つのタイプの相違は文様帯構成の相違を含むので、系統の違いだと推測する。

第 1 タイプ Ep-102 の屈曲部には把手状の突出部が貼付され、その先端に小丸瘤 4 個が付加される。Ee-109 の屈曲部には大きめの突起が貼付され、突起を刺突列と B 突起で繋ぐのではなからうか。この 2 点は晩期でも前葉に属するのではないか。p-36・p-37 は別個体と判断するが、器形・文様とも近似する。鉢部の屈曲部には突起が貼付され、それを点列界線帯で繋ぐ。突起には大きな点刻が加えられ、p-37 ではそこから発した沈線が突起の一角を刻む。この図柄は花卉状雲形文をもつ浅鉢 J26-19 の口唇部突起と一致する。p-36 は単純な点刻だけで、省略化されているのかもしれない。J26-19 とほぼ同段階で、晩期中葉ではなからうか。Eo-146 の鉢部屈曲部の上限は点列界線帯で画され、屈曲部には陰刻によって楕円形の玉状の隆起部が形成される。Ei-64 の鉢部屈曲部はレンズ状付帯文かと思われ、Eo-146 に後続するのではないか。この 2 点も晩期中葉に取まるのだろうか。

第 2 タイプの Ei-66 は晩期中葉かと推測するが、Mj-71、p-35 は決め手を欠き、Es-63 は判断を保留する。なお、p-35 の底部内面は、中央をのぞいて黒色に変色しており、透孔の切り込み部分や、器壁の欠損部分も同様に変色している。使用による変色の可能性がある。

第 1 タイプ、第 2 タイプのいずれとも異なるのが Mg-26 である。第 1 タイプの p-37 とそっくりな単位文をもつが、器形は異なり、鉢部は外屈するし、底を挟んで透孔が穿たれる。全体像は全くわからないが、単位文周辺には付加的な瘤が加えられ、その裾が若干切り込まれる。p-36 等と同段階であろう。

釣手部破片のうち、ある程度形状が推定できるのは Mg-25 である。体部が丸く、口縁部が屈曲して開く鉢とそっくりだが、その丸い体部に大柄な玉抱三叉文の図柄の透孔が穿たれる。Mg-25 の口縁部は釣手部の窓ではなさそうで、釣手頂部とせざるをえない。釣手部が閉じないタイプの 1 例かもしれない。J33-63 は外傾する鉢の口縁部のように図示したが、釣手部の窓の縁取り部分の可能性が高い。それ以外の釣手部断片は、どの位置なのか不明である。第 1 分冊・第 2 分冊で報告した香炉形土器の多くは、同様の釣手部の断片で、それらの中には円形の透孔を釣手頂部として図示したものがある。Mg-25 の類例かと考えたから

だが、それらの多くは釣手頂部とは言い難く、ここで訂正する。第1分冊のJ13・G24、J13・G40、J14・G5、J26・G24、第2分冊のWe-55、D457-70・D457-71が該当する。これらの正しい位置は不明である。

香炉形土器は小断片が多く、2次の移動を考慮すべきだが、廃棄場Eにある程度集中しつつ、南微高地の中央付近からも散漫に出土する。時期的に重なる土製耳飾の分布に近いが、廃棄場への集中度は落ちる。

ウ 人面の付く土器 [Eb-129、p-43～p-46] [S-1:2]

明瞭な人面表現をもつ土器が5点あり、2種類に大別できる。

p-43は瘤付土器の仲間、注口土器の口縁部と思われる。大きく尖る突起の直下、若干反する口縁屈曲部に、目と鼻が貼付され、目には短線が追加される。屈曲部が眉を兼ね、鼻の上には小さな丸瘤が付加される。甲信地域の土偶の目鼻の表現とは異なる。口唇部は内傾し、突起周辺には丸瘤がいくつも貼付される。瘤付土器第1段階の可能性があろう(小林圭一氏教示)。

Eb-129、p-44～p-46の4点は器壁が薄く、香炉形土器の釣手部だと思われる。Eb-129とp-44は人面のお全貌が把握できる。

廃棄場E1出土のEb-129は内面側から見ると、釣手土器Ⅲ種に対応した釣手部をもつ香炉形土器のように思われる。鉢部との繋がり方が不明なので、形態は断定できないが、以下のように推測してみた。人面の左右方向が鉢部をまたく釣手部で、人面の頭部側に直交する釣手部を加え、それが若干延伸して顎になる。平たい板状の人面は、この釣手部が交差する位置の真上に乗せられ、真上を向く。これが一番素直な解釈ではなからうか。内面側の整形は丁寧で、表面には半光沢がある。窓は3個設けられるが、それが大きかったので、手指が内面に届いたのではなからうか。顔の形態は顎が尖る逆三角形で、眉・鼻は一体化したハート形が貼付され、目は短線、口は小さく丸い刺突で貫通しない。眉の上位の沈線から三叉状の枝が分かれ、頭頂部の突起は透孔状ではなからうか。顔全体にはごく細かい縄文が、目の下には細かく浅い刺突が、それぞれ加えられる。耳の表現は中央に貫通孔をもつ二重の円で、圧痕を伴うので、これは耳飾の表現であろう。Eb-129の眉・鼻の表現はポスト山形系土偶に通じ、土製耳飾の存続期間のうちに収まるとすれば、晩期前葉に位置付くのではなからうか。

廃棄場W出土のp-44は、南微高地出土破片と接合した。その形態はわかり難い。人面の顎の位置に窓が開くが、内面整形からはここが口縁端部であるかのようにも見える。だが、それでは人面は逆さまに取り付けられることになり、不自然である。顎の位置は釣手部の窓に該当し、人面の位置は釣手頂部で真上を向くと見ておくと、少々不安が残る。顔の左側には大きな透孔が切り込まれる。人面は凸面で、眉・鼻は一体化したハート形が貼付される。眉には細かいキザミが加えられ、眉の上位には沈線、鼻の上位には三叉陰刻が加えられる。眉の両端には圧痕付きの丸瘤が重ねられるが、これは耳の表現なのか耳飾表現と見るべきなのか。目は中央に短線を付加した丸瘤で表現されるが、これは甲信地域ではあまり用いられない手法である。口はないが、人面の下限を画する沈線1条が、口の役割も果たすのかもしれない。凸面の顔面中央は丁寧なミガキで光沢をもつ。廃棄場W出土土器は晩期中葉が主体で、晩期前葉は少量にとどまる。p-44は晩期中葉の可能性を考えるが、耳の表現については気がかりな点が残る。

廃棄場W出土のp-45・p-46は顔面の断片である。板状で平坦なp-45は、残存部分から見てかなり大きな顔面になりそうである。眉・鼻表現は他と同様のハート形の貼付、目はp-44同様の貼付表現である。p-46は頭部側と口が透孔となる。眉・鼻は一体のハート形が貼付され、眉の上位には沈線が併走する。目は短線で、頬には何らかの貼付が残される。遮光器系土偶d-313[③]の第2の顔面表現に近似する。廃棄場W出土であることも合わせて、この2点も晩期中葉に属するのではなからうか。

エ 蓋形土器 [J17-135] ①、J21・G1 ①、J22・G49 ①、J29・G32 ①、T4-123 ①、Wa-33 ②、D486-10 ②、Eb-130、Ek-36、Eo-147・Eo-148、Eq-77、Er-50、p-47・p-48] [S=1:2]

皿形の土器を伏せた形態の蓋形土器だが、その認定は難しい。頂部に仰向けに置くことができない形態のつまみが付くもの、内面が光沢をもたず容器にふさわしくないものなど、16点を蓋形土器だと判断したが、突起などを認識している可能性も残る。後期初頭の三十稲葉式や、晩期初頭の御経塚式に類例が知られている。

T4-123は頂部に環状の装飾が付くので、蓋形だと判断した。石神類型に特有の櫛状工具でクランク構図が描かれるので、堀ノ内2式期と思われる。

頂部に丸かったり尖り気味の突起が付く J17-135、J21・G1、Eb-130、Er-50、p-47・p-48 の6点と、頂部に貫通孔を穿つ J29・G32 は、仰向けに置くことができないので蓋形だと判断した。突起は「つまみ」と呼ぶべきだろう。J21・G1、Er-50 は頂部に1対の小さな瘤を貼付、欠損する p-47 も同様で、J17-135 はつまみ部の剥落痕跡が残る。頂部が剥落した p-48 は、凸面の円板を貼り付ける Eb-130 の同類と思われる。p-47 は隆帯文系土器で後期末葉～晩期前葉であろう。J17-135 の入組文は横位連鎖型の変化なので晩期前葉かと思われる。J17-135 には2個1対の小孔が穿たれるが、晩期前葉～中葉の精製鉢などの口端にも同様の小孔が多用される。両者を紐で結わえようとしても、口径は蓋形の方が断然小さく、合致しない。J21・G1 にも小孔が2個穿たれるが、位置が少々離れており、1対にはなりそうもない。

頂部に杯状のつまみが付く J22・G49、D486-10、Ek-36、Eo-147・Eo-148、Eq-77 は、内面の整形が容器とは思えないか、つまみが小さすぎて不安定すぎるかで、蓋形だと判断した。J22・G49、Eq-77 の2点をのぞいて無文品である。欠損する Eq-77 は天地が逆の可能性もある。つまみ部との接合部分に隆帯を貼付し、身部には点列界線帯を施し、胎土にガラス質石英が目立つ。断片の J22・G49 もつまみ部との境界に同様の装飾をもつ。2点とも晩期中葉の可能性があらう。

#### オ 多孔底土器 [Ek-37、Me-67、p-49～p-51] [S=1:2]

新潟県北部を中心に東北地方にまで分布する多孔底土器は、下部に鉢を接合させた二段構成のもの（Ⅰ類）と、単純に多孔底土器だけのもの（Ⅱ類）に大別され、後者は器形の相違から細分される。以下、八木勝枝の分類基準[八木2003]に従って報告する。該当するのは7点である。

唯一Ⅰ類の可能性のあるのは p-49 だが、肝心の底部が欠損しており、天地も確定できない。穿孔は内側から外側へ向かうものが多いとのことなので、実測図はそのように作図した。だが、下部に別の注口鉢などが接合するⅠ類なのか、高台が付くだけのⅡ類なのかは判別できない。孔径は6mm程度、孔間隔は10mm前後で、底部全面に穿たれる。

底部が欠損する p-50 は浅いⅡA類、Ek-37 はやや深めだがやはりⅡA類、底部断片2片はⅡA類かⅡB類、Me-67 は底部立ち上がり付近にかすかな稜があるのでⅡC類、p-51 はⅡD2類である。

ⅡA類～ⅡB類の可能性のある4点(Ek-37、p-50他)は、いずれも浅鉢か皿形の器形で、推定直径10cm程度の小形品である。器壁は通常の浅鉢よりやや薄い印象を受ける。ⅡA類～ⅡB類は底部周辺に孔が穿たれるが、口縁部が残る Ek-37、p-50 は底部周辺だけでなく、口縁部近くまで貫通孔が穿たれるのが確認できる。特に残りの良い Ek-37 は、オサエ痕や粘土帯の接合痕が残って器壁にゆがみが多く、口縁部は不定形で、器としての精度は低い。他の3点も同様である。貫通孔は径2～4mmとばらつきが大きく、孔間隔も2～5mmと不定である。孔は工具を突き刺して穿たれ、はみ出した粘土が孔縁辺に付着するが、同一の孔の両面に付着粘土が残る場合もあり、双方向から繰り返し刺突されたと思われる。Me-67 は浅鉢か皿形の断片だが、孔は底部に限定的なので、その点からもⅡC類の要件に合致するが、これも精度は低い。

平底のⅡ D2 類 p-51 は深鉢で、底部外面には網代圧痕が残る。径 7～9 mm の貫通孔が 10 mm 程度の間隔で穿たれるが、底部全面にはなく、拓影の上位側に列状に並ぶ。孔縁辺には内外面とも粘土層が残る。p-51 と深鉢形のⅠ 類もしくはⅡ F 類の p-49 とは、底部しか残存しないが特に小形というわけではなく、やや小ぶりか中程度のサイズではなかろうか。器壁も厚く、孔がなければ標準的な深鉢とほとんど差がないのではなかろうか。丸底浅鉢の Ek-37 などとは、機能上も少々差がありそうだ。

多孔底土器は後期中葉～晩期前葉の時間幅が推定されている。エリ穴遺跡出土の底部丸底浅鉢は、大半が晩期に属するが、それを多孔底土器の年代観の材料としてよいかどうかは不明である。エリ穴遺跡は多孔底土器の分布域南西限に当たる。新潟県村上市の元屋敷遺跡と新発田市村尻遺跡以外では 10 点を越える出土遺跡はないとのことなので、エリ穴遺跡の 7 点は注目すべき出土数であろう。

### (3) 晩期の異形土器

#### ア 尖底の土器 [We-36] ②, [We-41] ②, [Wi-21, p-52]

尖底の土器として、廃棄場W出土の We-36、We-41、Wi-21、p-52 の 4 点を例示するが、他にも該当例は少なからずある。いずれも小形の浅鉢か鉢で、丸底との識別は難しいが、底部中央は明らかに突出して尖り気味となる。丸底は据え置くには不安定だが、尖底はなおさらで、紐をかけて吊り下げた可能性もあろう。いずれも晩期中葉に帰属すると見られ、信越国境には類例が多いので、地域的な特色かと推測する。今後、注意を払うべき存在だろう。

#### イ 小部屋付楕円浅鉢 [古相：D502-52] ②, [新相：J22・G259] ①, [En-10, Md-53, Me-68, Mi-47]

6 点出土している。J22・G259 は佐野 2 式の 22 号住居関連グリッド (住居埋土の可能性大)、D502-52 は佐野 1b 式～2b 式の土坑 502、Md-53、Me-68、Mi-47 は晩期中葉主体の廃棄場 M1 と M2、En-10 は廃棄場 E2 のうちで佐野式以降と推定した炉 3 に隣接するグリッド出土である。晩期中葉に帰属する可能性が高いこと、最終廃棄は遺物量が多い土坑や廃棄場が多いことが窺われる。

丸底の浅鉢を基本とするが、形態は特異で、器 (本体) の側壁に小部屋が設けられる。本体の平面形は正円形ではなく、幾分楕円形がかっており、小部屋は長軸方向の一端に設けられる。長軸の長さは 10～20 cm 程度、高台を除く本体の高さは 10 cm 未満と推定され、概して小形であるが、サイズ不明の J22・G259 はやや大きい。D502-52 は丸底で高台は付かない。Mi-47 は高台が付く。それ以外の底部は欠損するが、En-10 は高台が付く可能性が高い。

本体の成形後、その側壁に中仕切りを追加して小部屋を付加したことが、欠損面から観察できる。中仕切りの部分も本体同様の成形で、表面は整い、側壁に擦り付けるように、半円形に粘土帯を積み上げて成形したと推測する。小部屋は本体の 1/3 程度のスペースを占めるものが最大で、その底は本体の側壁下部に当たる。小部屋の中仕切りは本体の口縁部と同じ高さを保つ。

D502-52、Md-53 以外はガラス質石英を多量に含む胎土を用いる。一方、D502-52、Md-53 は赤色塗彩される。

本体の装飾は豊かで、ミガキも丁寧に施され、精度は高い。D502-52 の外面は底面まで全面施門スペースだが、文様帯は分帯されず、1 帯構成の主文様帯である。それ以外は高台部を除いて 3 帯構成で、上位から、口縁部縄文帯、点列界線帯で画した主文様帯、無文もしくは縄文帯となる。高台部が付く Mi-47 は、その下に高台部主文様帯と無文帯が設定される。En-10 は 3 帯めの縄文帯の下位に点列界線帯があり、これは高台部主文様帯の上限の可能性が高い。

長軸の小部屋側の先端が正面とされた可能性があり、Me-68 にはそこに突起が付される。それ以外は欠

損して確定できないが、小部屋部分の口唇部には裾を三叉状に切り込んだ小さな突起が付されるのが基本ではなかろうか。突起内面にも三叉文が挿入される。ただし、D502-52の口唇部は装飾が簡素なので、突起は付されないのかもしれない。小部屋の中仕切りと本体との接合部分も重要な装飾ポイントである。口唇部を円形(D502-52)や三叉文(En-10)に窪め、巴を挿入し(Md-53)、突起を貼付する(Me-68)。Md-53は中仕切りの口唇部にも施文する。口縁内面には沈線が1条巡る。Md-53は本体部分のみ、Me-68、Mi-47は本体部分と小部屋部分両方の内面に、さほど太くない沈線が描かれ、D502-52、En-10は内面沈線をもたない。

主文様帯に採用される構図には、4種類の系統がある。D502-52は3条1組で縄文を充填した沈線帯を用いて、1対の巴構図をメインに描き、その一端が三角形に尖る。底部全面を画面とする楕円浅鉢D384-20[②]の構図と一定の共通性があり、同系統であろう。En-10、Md-53の構図は同系統と思われる、三叉文、短線、入り組む三叉などが独立して挿入される。En-10はそれらが界線から完全に離れるのに対し、Md-53は界線から延伸する弧線なども入り組む点が異なる。Me-68は単純な波状沈線文が挿入される。Mi-47は2(3)ウで詳述したとおり、体部主文様帯は花卉状雲形文の第3段階で、モチーフは変形が進み、末期的様相の可能性もあるだろう。以上、5個体に対して4系統のメインモチーフが存在するので、どの系統がこの器種にとって中核的なのか判断できない。むしろ、様々な系譜の図柄を超越、あるいは統合するような位置を占めるのかもしれない。

D502-52は他の4点と文様帯構成が大きく異なる。点列界線帯や内面沈線を欠き、口唇装飾もシンプルなので、5点の中では古相を示すだろう。残り4点は新相ではなかろうか。底部全体を画面にする器種の代表例は楕円皿で、晩期初頭～前葉の類例がある。D502-52はその要素の一部を継承している可能性を考えたい。しかし、それだけでは小部屋の成立過程はまるで見通せない。D502-52は土坑502(佐野1b式～2b式期)一括出土資料の一角を占める。この器種の成立は晩期前葉から中葉への変遷のどこかにありそうだ。一方、底部全面施文を放棄して、はじめて高台は導入可能となるだろう。高台導入はこの器種の変遷の画期になるだろう。浮線文土器の中には全く存在しないので、晩期中葉の内に終焉を迎えるのだろう。

#### ウ 舟形の土器 [p-53・p-54]

晩期後葉の浮線文期に類例の多い舟形の土器が1点、それと関連しそうな平面形楕円形の浅鉢が1点ある。p-53は器壁が薄く、外面側全面に細密条痕が施されるので、舟形の土器だと判断した。舟というよりは「お絞り入れ」に近い形態で、容器というよりは土製品とするほうが良いくらいである。内外面ともオサエ痕が顕著で、胎土にはガラス質石英が多量に入るなど、浮線文土器としては異質である。p-54は平面楕円もしくは長円形の浅鉢である。無文で内外面ともオサエ痕が残り、ケズリが顕著な底面は緩い凸面を呈する。舟形土器としては大きすぎるが、その成立に関わる可能性がありはしないか。

#### エ その他の異形土器 [J17-134]①、Eh-86、Ep-104、Es-64、p-55～p-59]

類型化ができない異形土器もある。断片的資料で全体像が推定できず、個別の説明は省略する。大形の透孔をもつJ17-134、Es-64、口縁部に貫通する孔列をもつEh-86、p-57・p-58などが目立つ。

## 5 補遺

第2分冊～第3分冊に掲載すべき資料の一部を、都合上本分冊の図80～92と写真図版20に掲載した。

第2分冊の補遺は廃棄場WのS6W36グリッド出土Wa-35、及びS2・G61、Wi-21の写真である。第3分冊の補遺は土製耳飾260点(e-4001～e-4260)、中空動物形土製品2点(c-401・c-402)、中空土偶もしくは中空の土製品4点(c-403～c-406)と、ミニチュア土器4点(c-407～c-410)である。土製耳飾について



は第3分冊中で本分冊掲載資料も含めて記述した。中空の土製品は第3分冊刊行時には異形土器と誤認していたもので、土製品に判断を変更した。器面が平坦に近いことと、内面の整形が土器とは思われないのが根拠である。第3分冊掲載の土偶 d-322 や中空動物形土製品の多くは、中空の空隙が狭いので内面に指や工具が届き難く、しかも成形直後の生乾きの器面状態でしか整形が行なえない。深いナデ痕跡が顕著に残るのが特徴的で、本分冊掲載の6点もそれらと共通の整形が行なわれている。ミニチュア土器も第3分冊刊行時には一般的な土器に含めていたが、土器の検討中に判断を変更した。

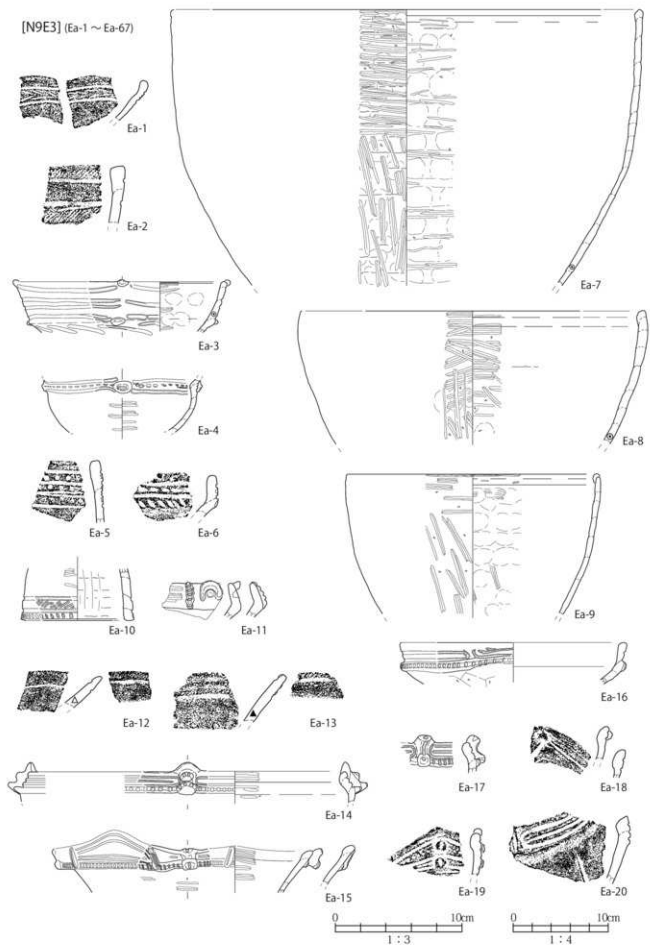


図1 鹿棄場 E1 出土土器実測図・拓影(1)

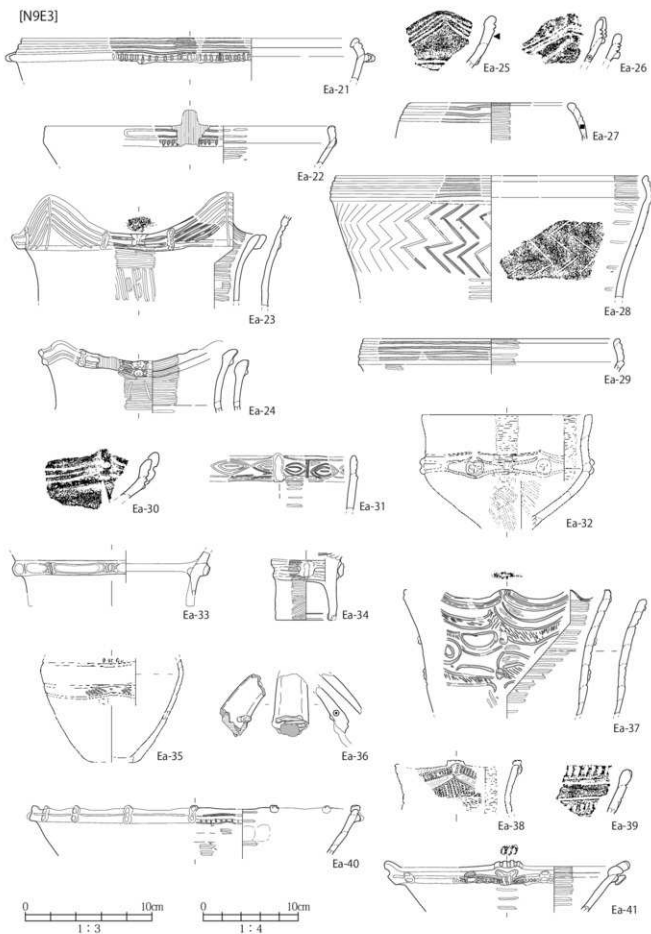


图2 鹿棄場 E1 出土土器实测图·拓影(2)

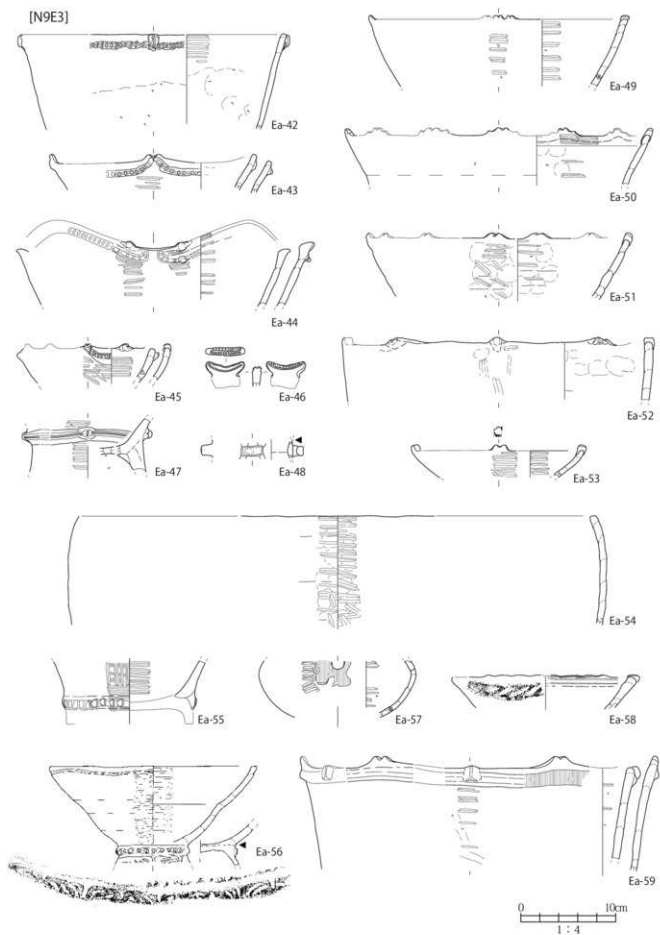


图3 廃棄場E1出土土器実測図(3)

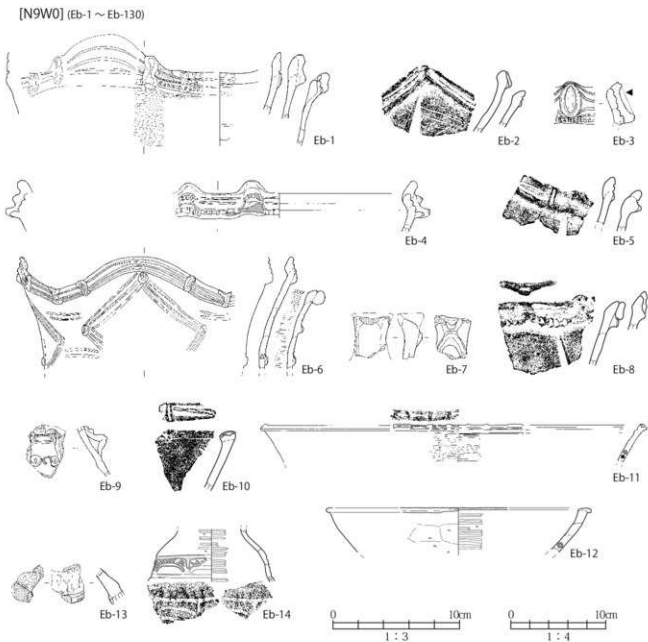
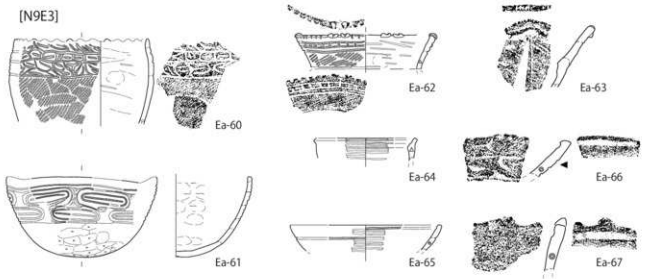


図4 鹿棄場 E1 出土土器実測図・拓影(4)

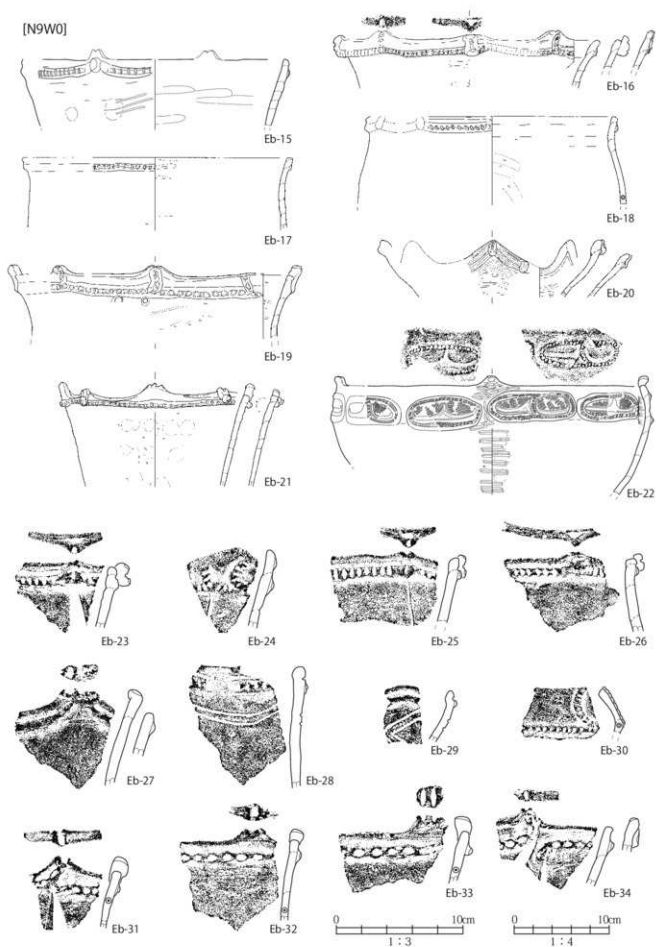


图5 鹿棄場 E1 出土土器実測図・拓影(5)

[N9W0]

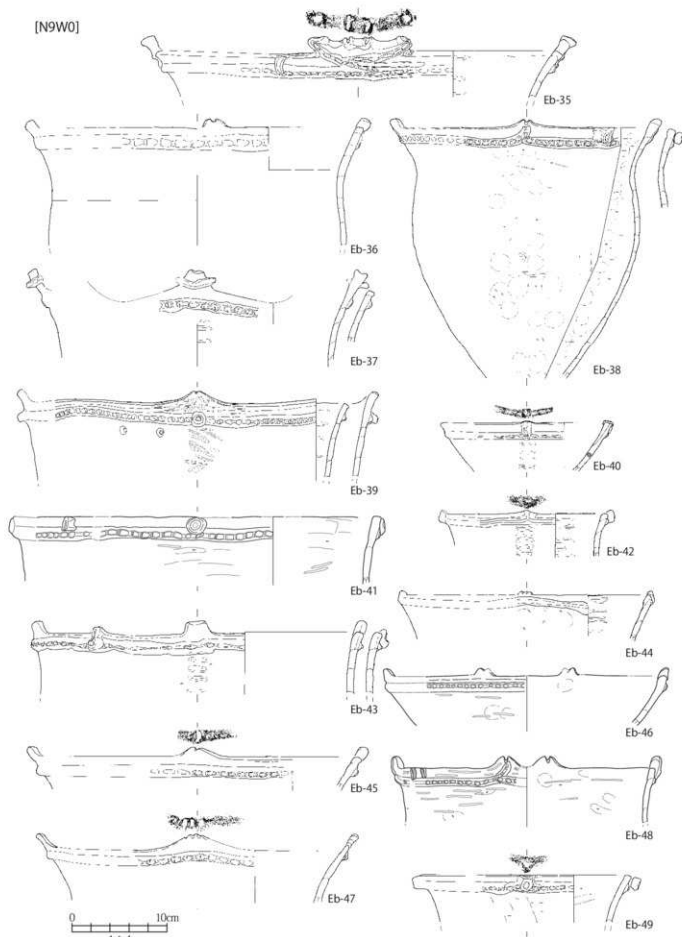


图6 廃棄場 E1 出土土器実測図(6)

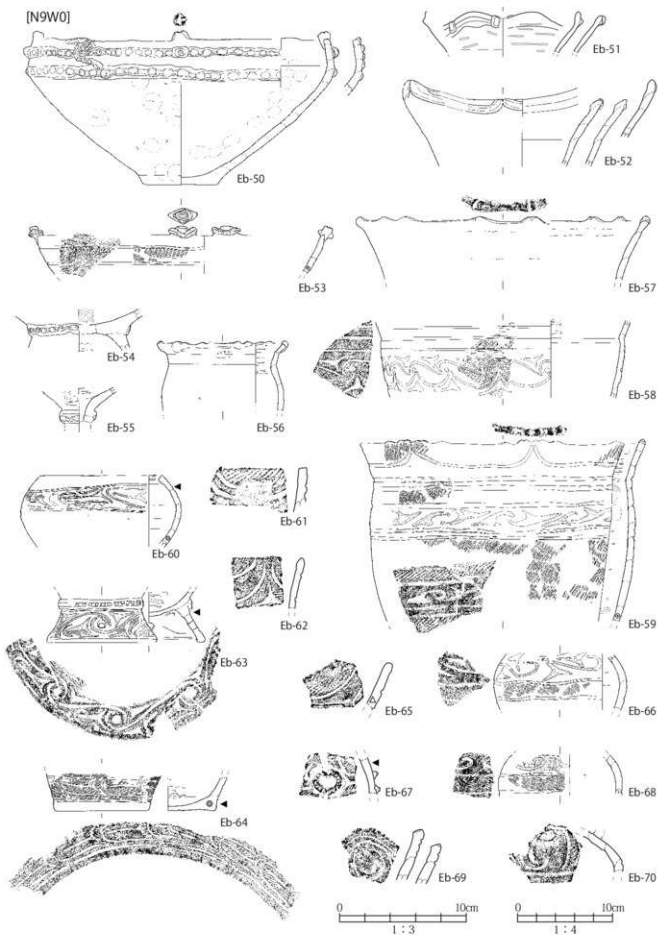


図7 廃棄場 E1 出土土器実測図・拓影(7)



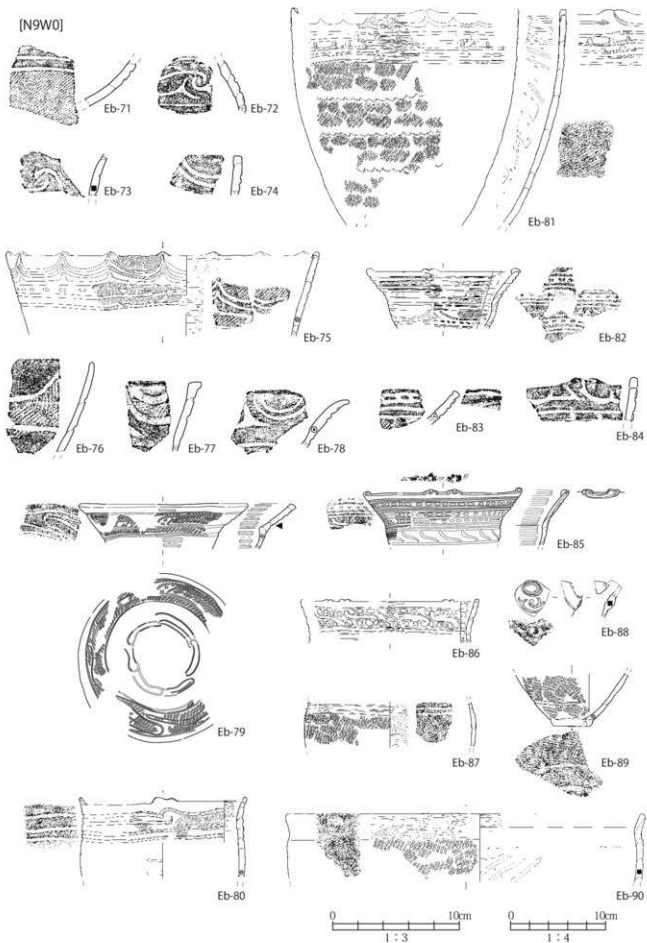


図8 廃棄場E1出土土器実測図・拓影(8)

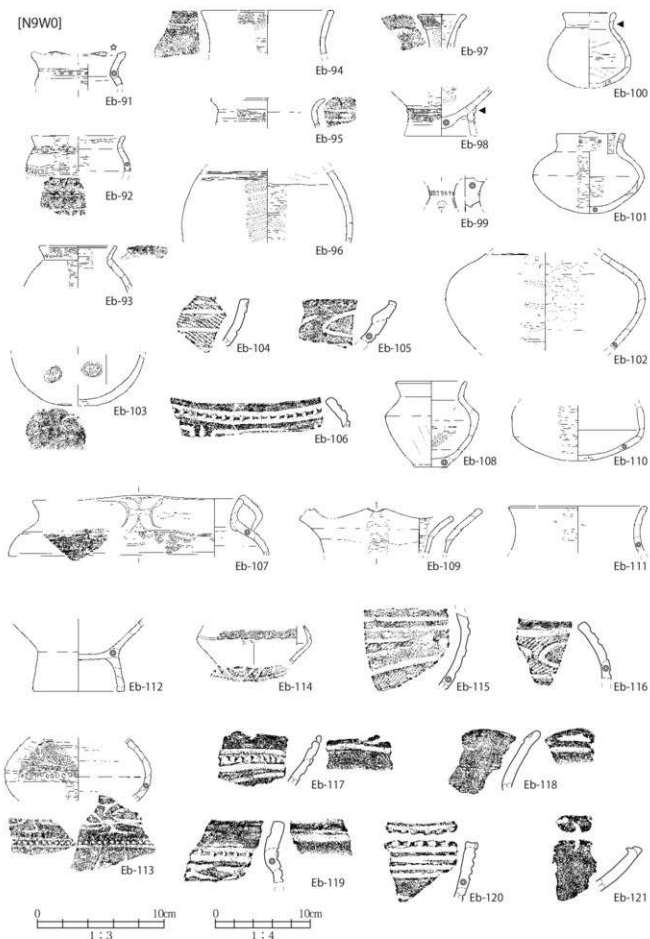


図9 鹿棄場E1出土土器実測図・拓影(9)



图 10 鹿棄場 E1 出土土器実測図・拓影(10)

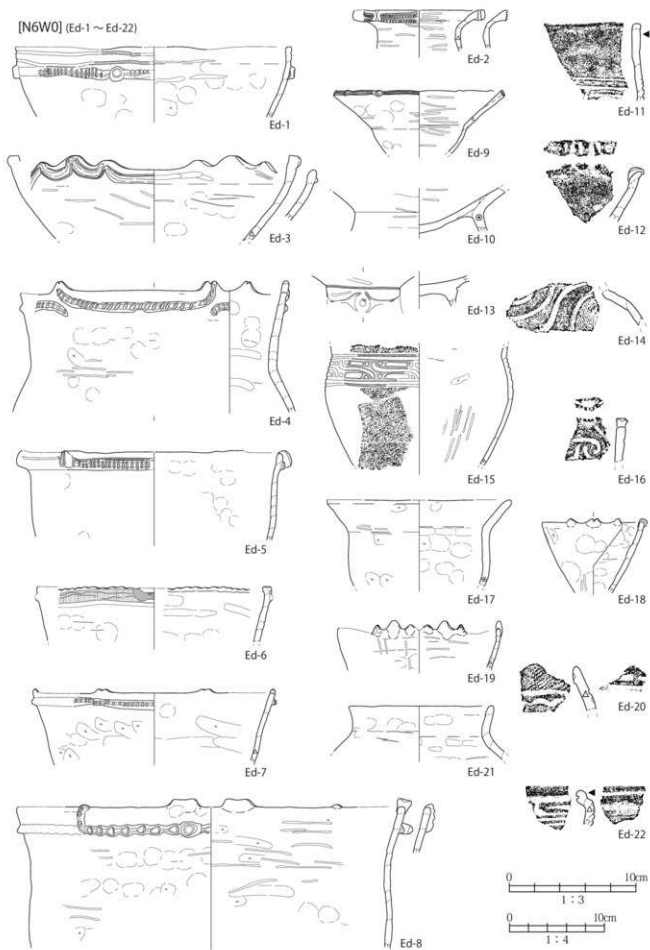


图 11 麻葉場 E1 出土土器実測図・拓影 (11)

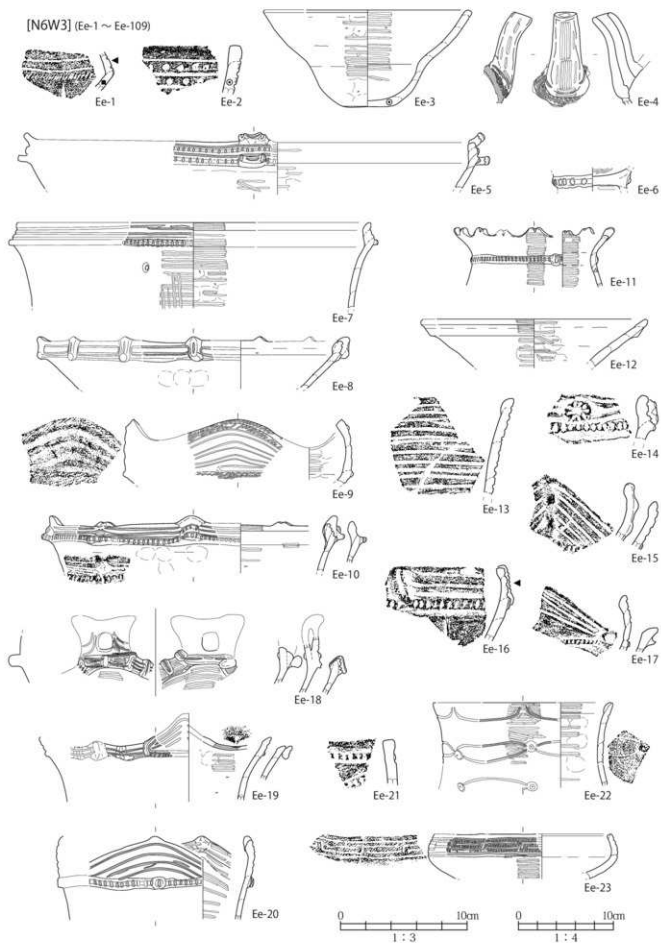


图 12 麻葉場 E1 出土土器実測図・拓影 (12)

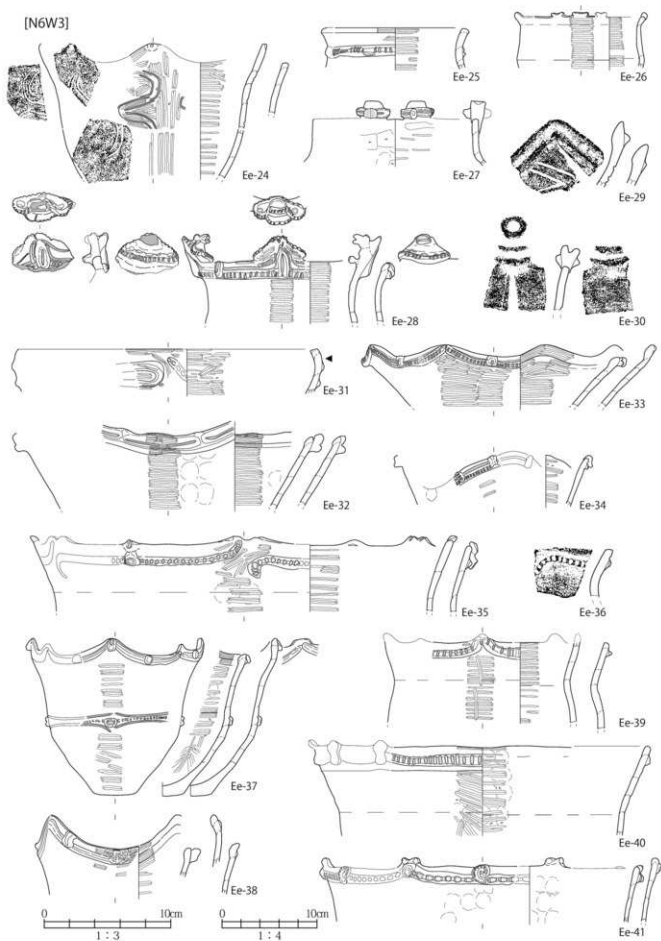


图 13 廃棄場 E1 出土土器実測図・拓影 (13)

[N6W3]

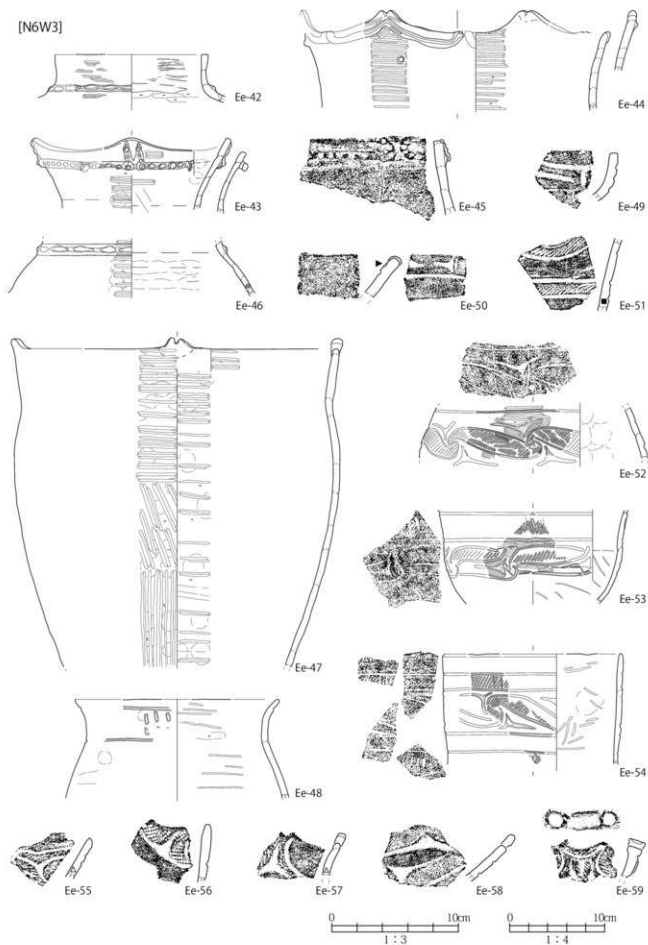


图 14 廃棄場 E1 出土土器実測図・拓影(14)

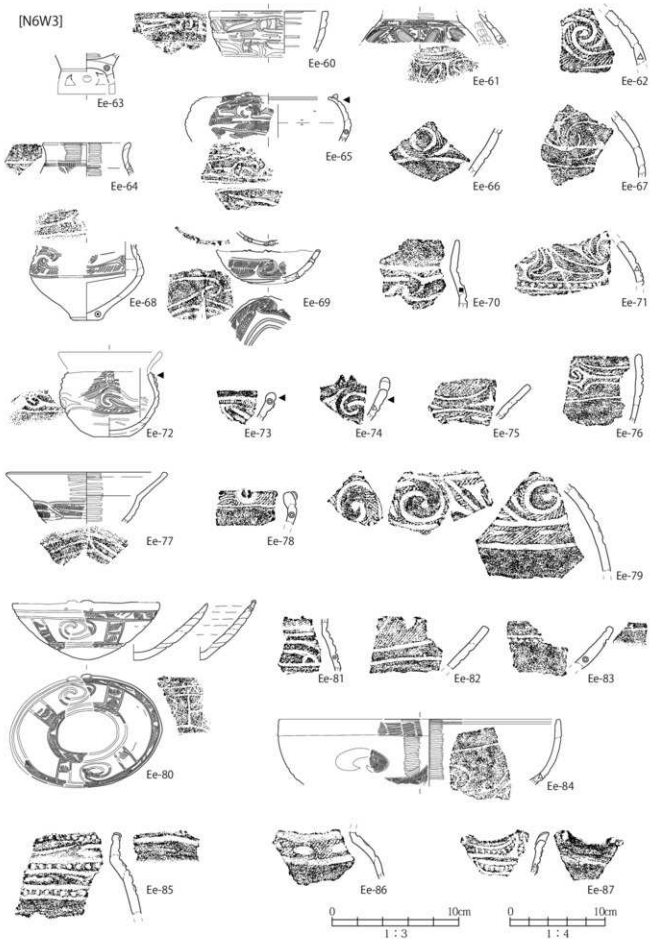


图 15 廃棄場 E1 出土土器実測図・拓影 (15)



[N6W3]

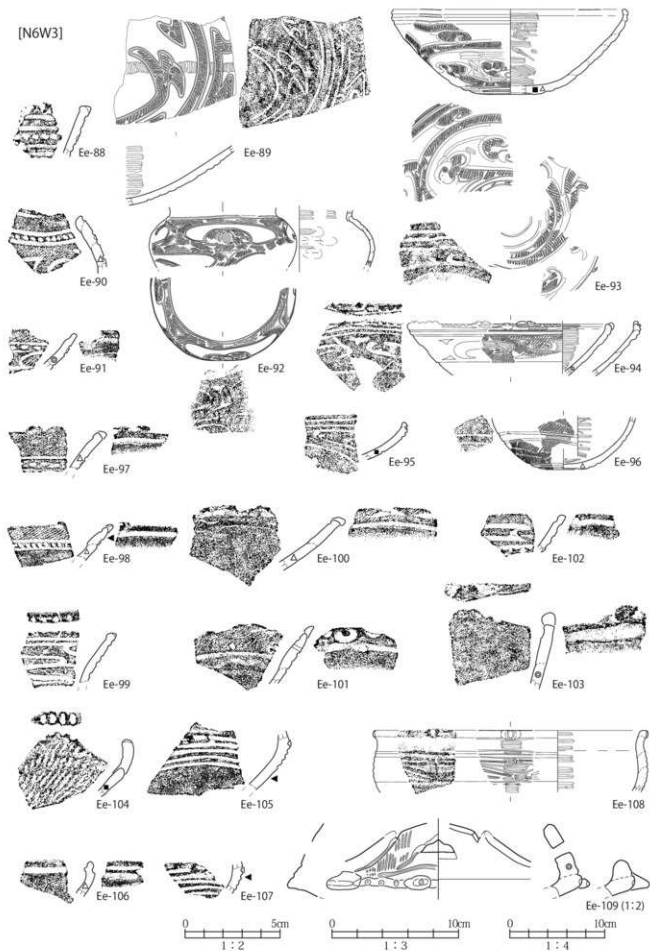


图 16 麻葉場 E1 出土土器実測図・拓影 (16)



图 17 廃棄場 E1 出土土器実測図・拓影 (17)



[N3W3]

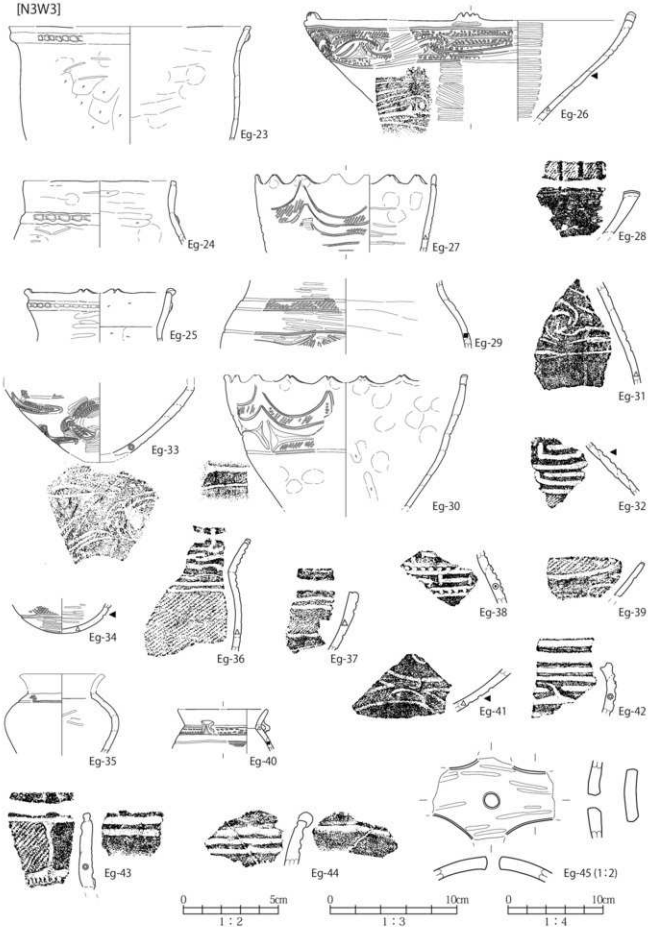


图 19 廃棄場 E1 出土土器実測図・拓影 (19)

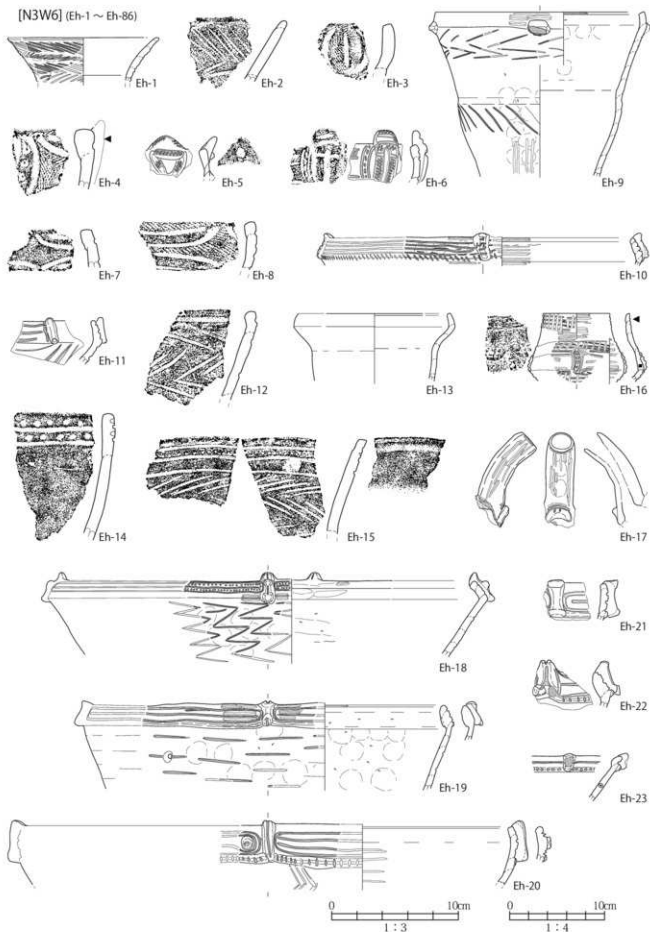


图 20 麻葉場 E1 出土土器実測図・拓影 (20)

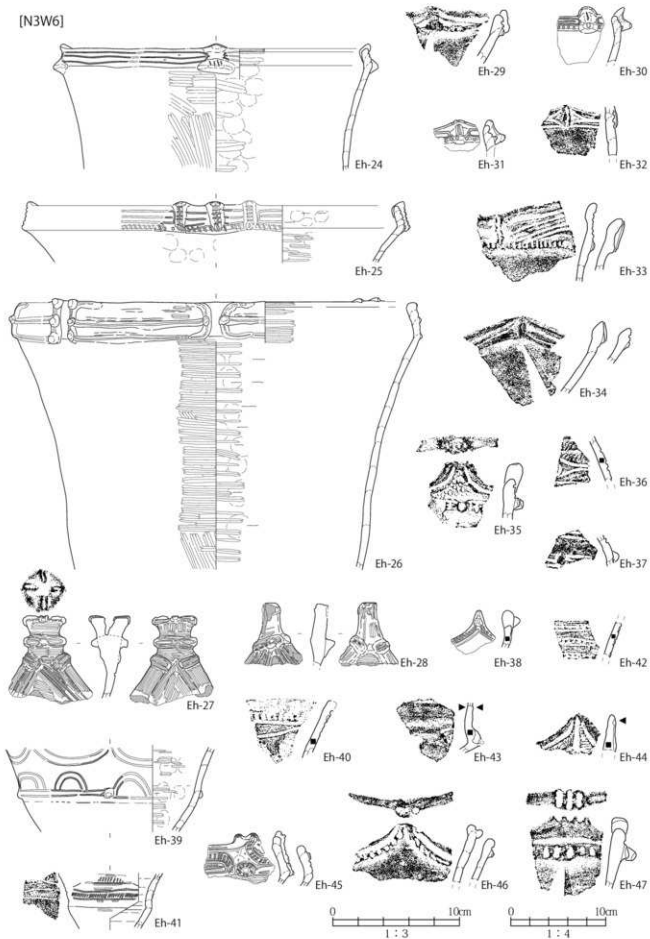


图 21 鹿棄場 E1 出土土器実測図・拓影 (21)

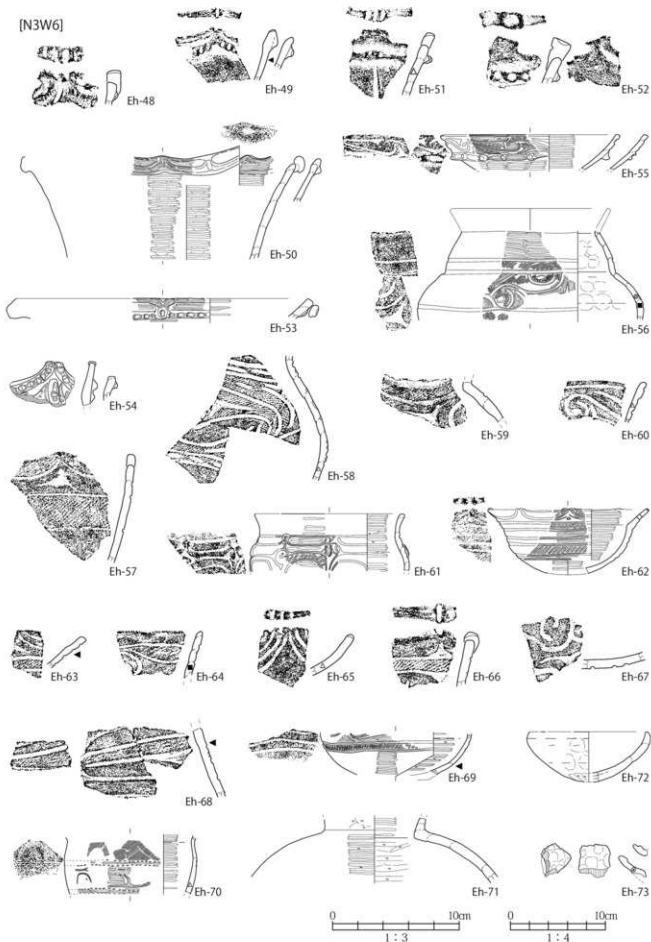
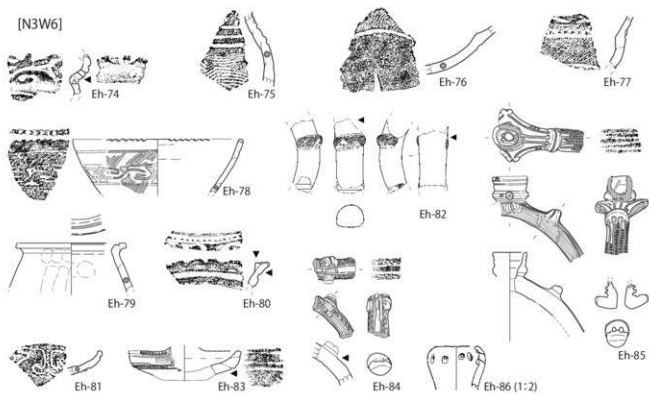


图 22 麻葉場 E1 出土土器実測図・拓影 (22)



[N3W9] (E1 ~ E1-66)

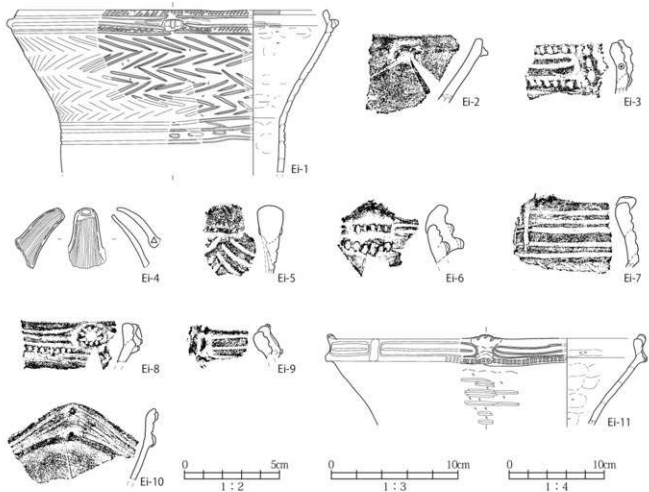


图 23 廃棄場 E1 出土土器実測図・拓影 (23)



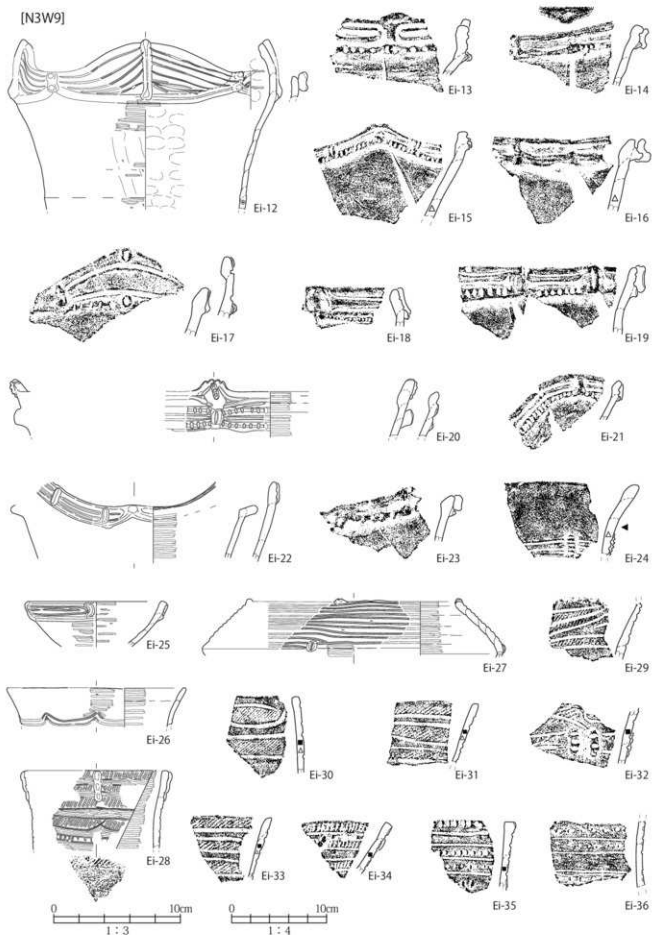


图 24 廢棄場 E1 出土土器実測図・拓影 (24)

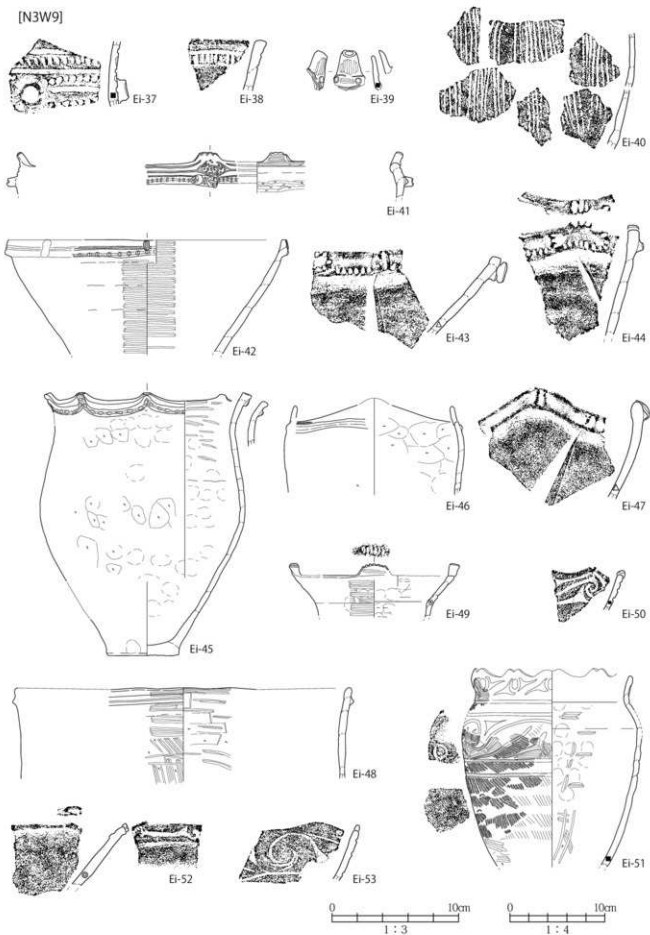
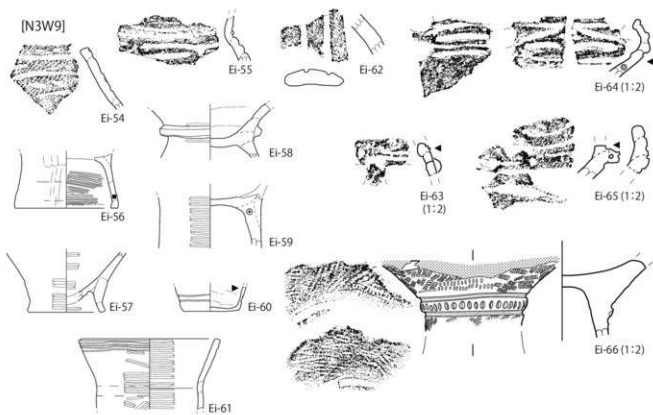


图 25 廃棄場 E1 出土土器実測図・拓影 (25)



[N3W12] (Ej-1 ~ Ej-34)

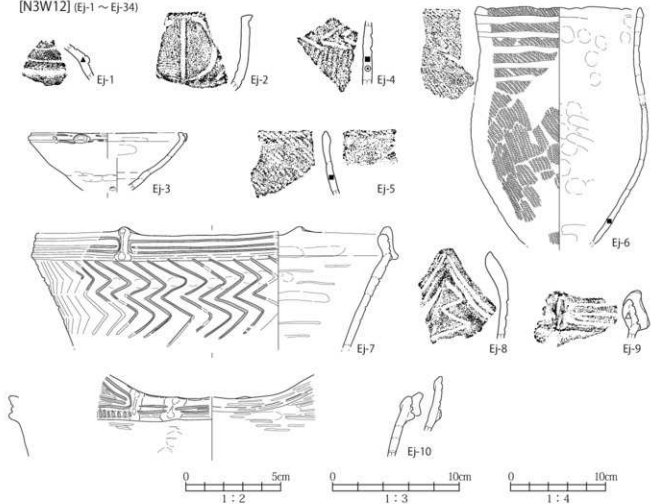


图 26 麻葉場 E1 出土土器実測図・拓影 (26)

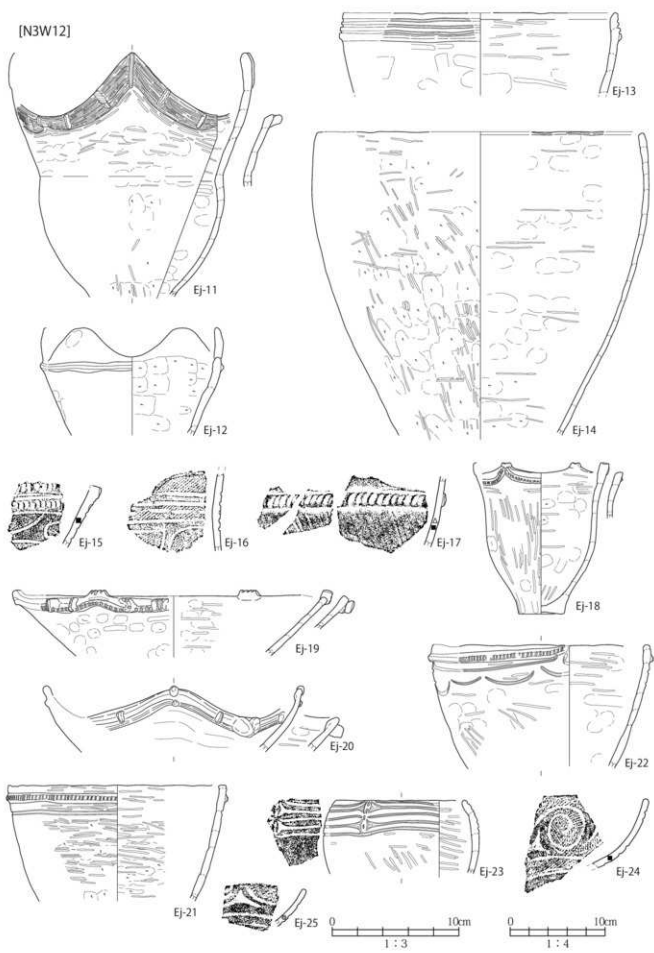


图 27 廢棄場 E1 出土土器実測図・拓影 (27)

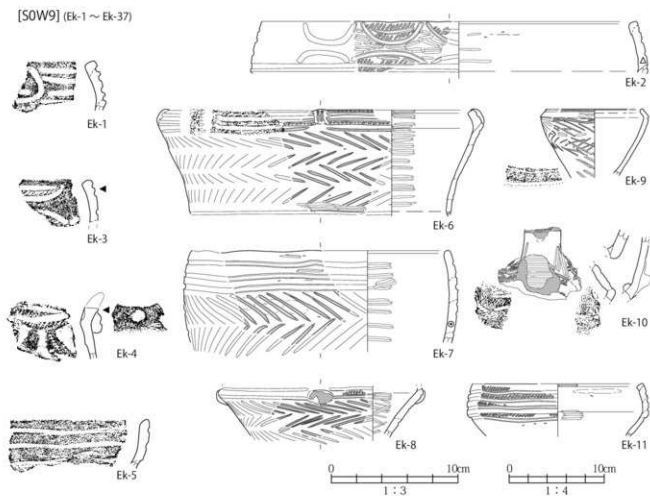
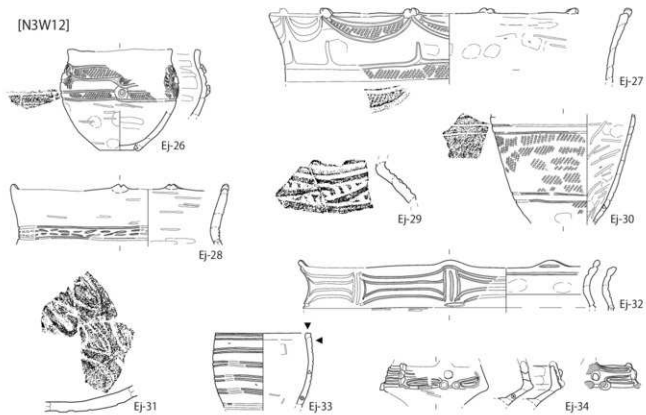


图 28 麻葉場 E1 出土土器実測図・拓影 (28)

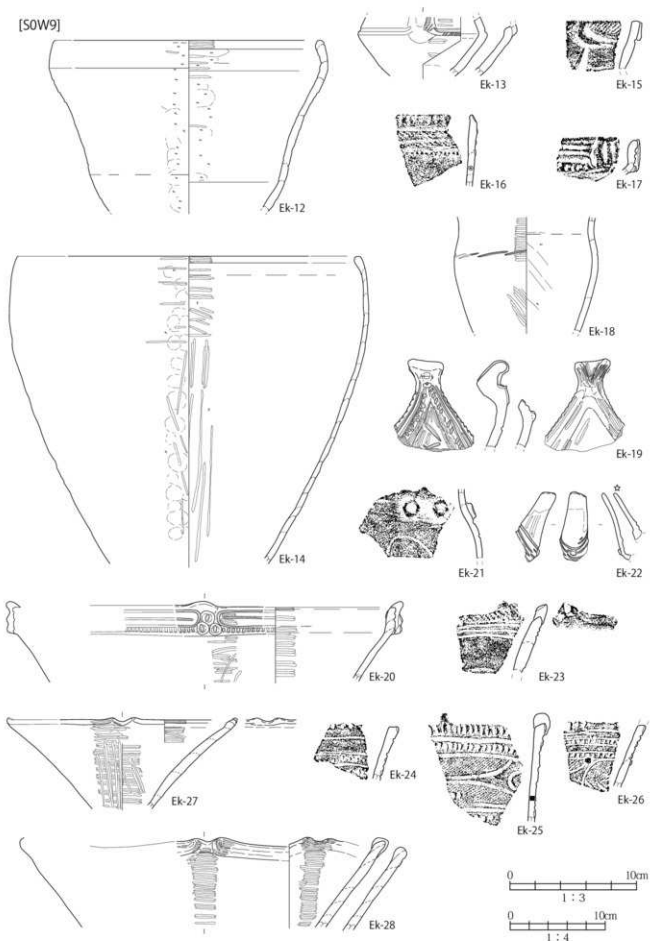


図 29 廃棄場 E1 出土土器実測図・拓影 (29)

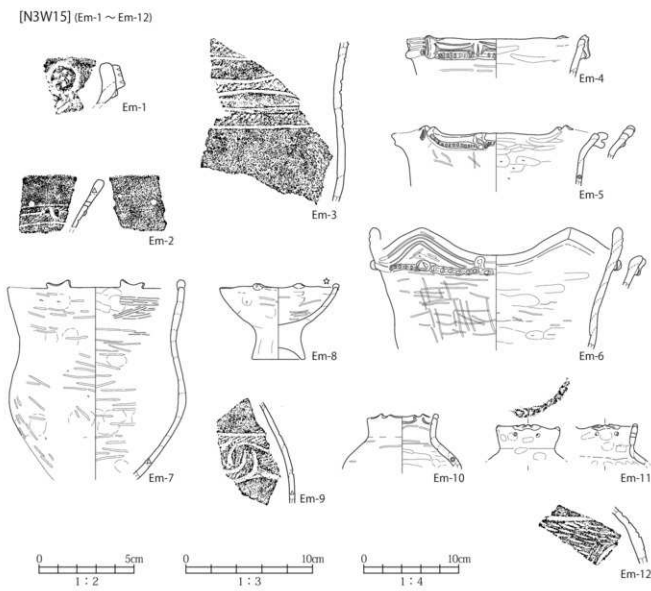
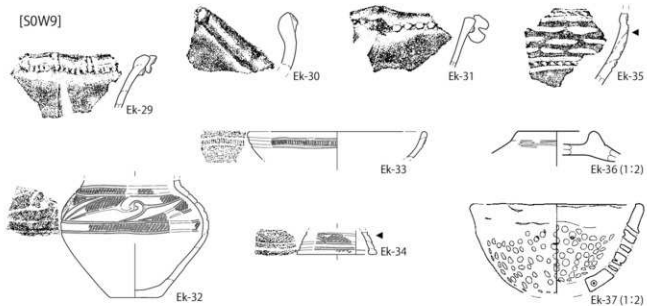
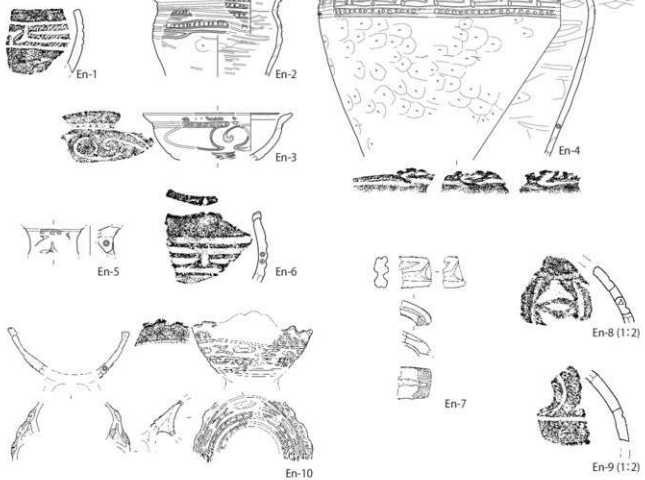


图30 廃棄場 E1 出土土器実測図・拓影 (30)  
 廃棄場 E2 出土土器実測図・拓影 (1)

[N3W18] (En-1 ~ En-10)



[SOW12] (Eo-1 ~ Eo-148)

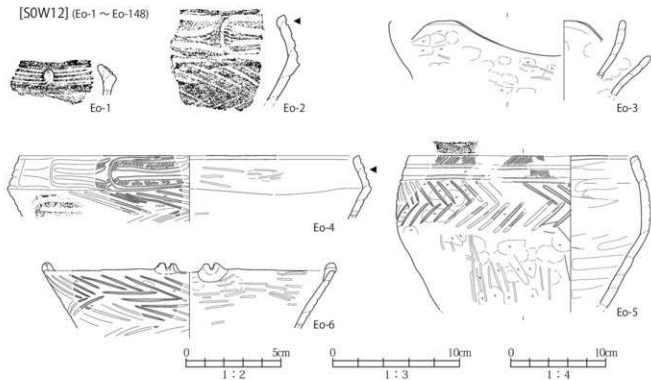


图 31 廃棄場 E2 出土土器実測図・拓影 (2)



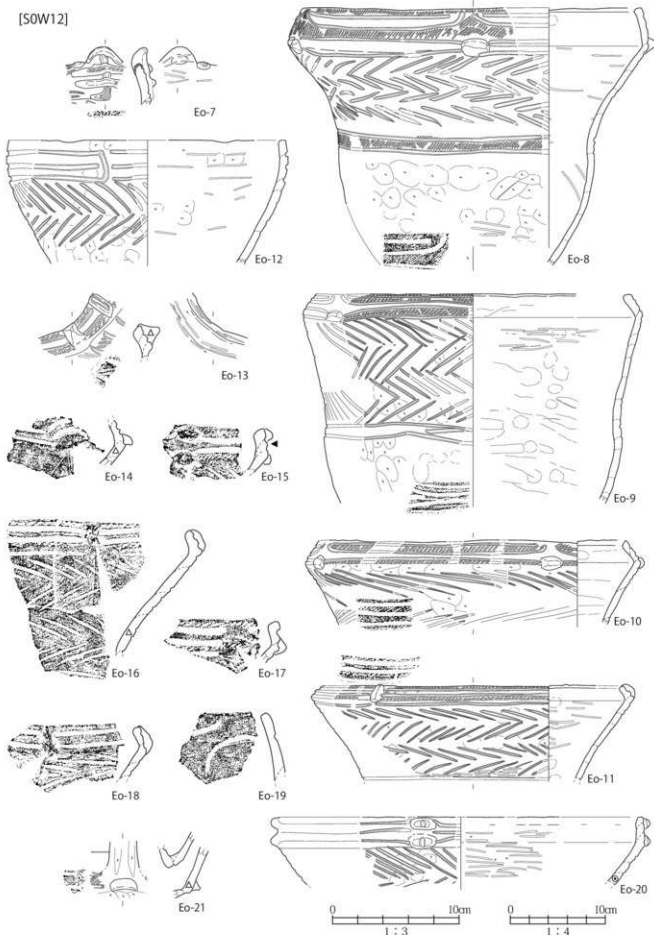


图 32 鹿棄場 E2 出土土器実測図・拓影 (3)

[SOW12]

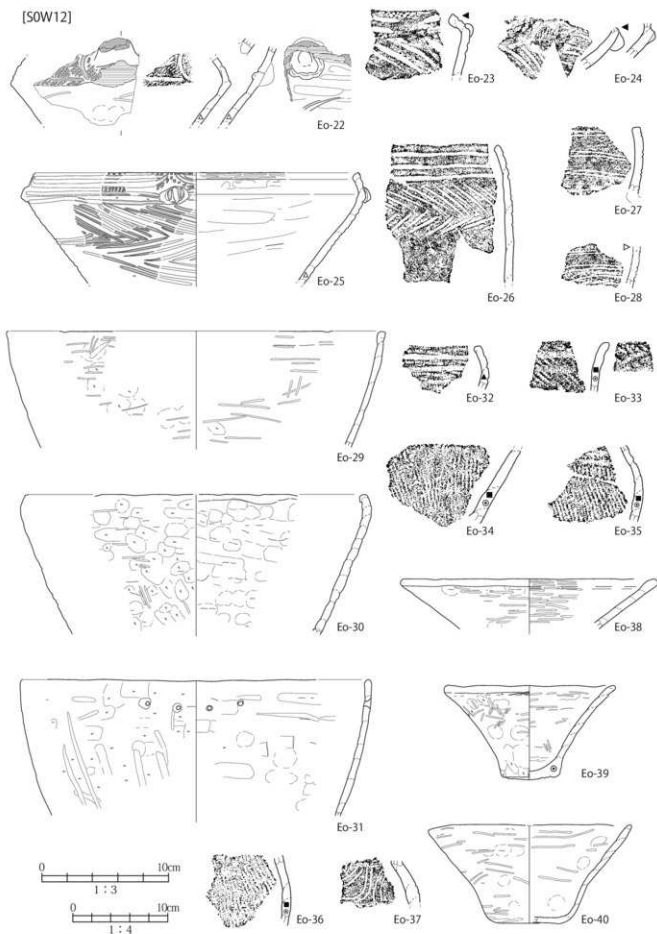


图33 麩棄場E2出土土器実測図・拓影(4)

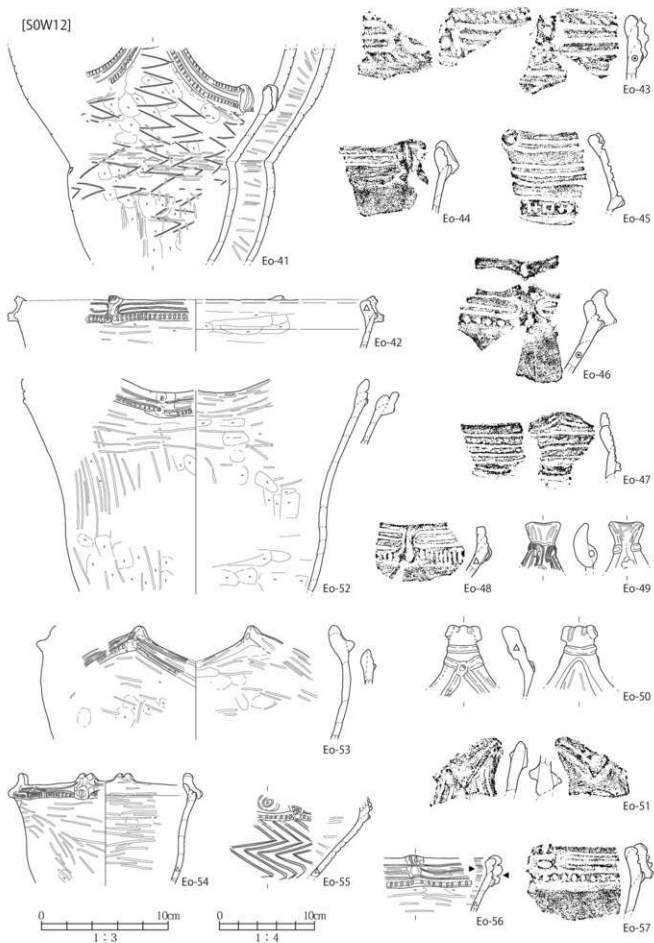


图34 鹿棄場E2出土土器実測図・拓影(5)

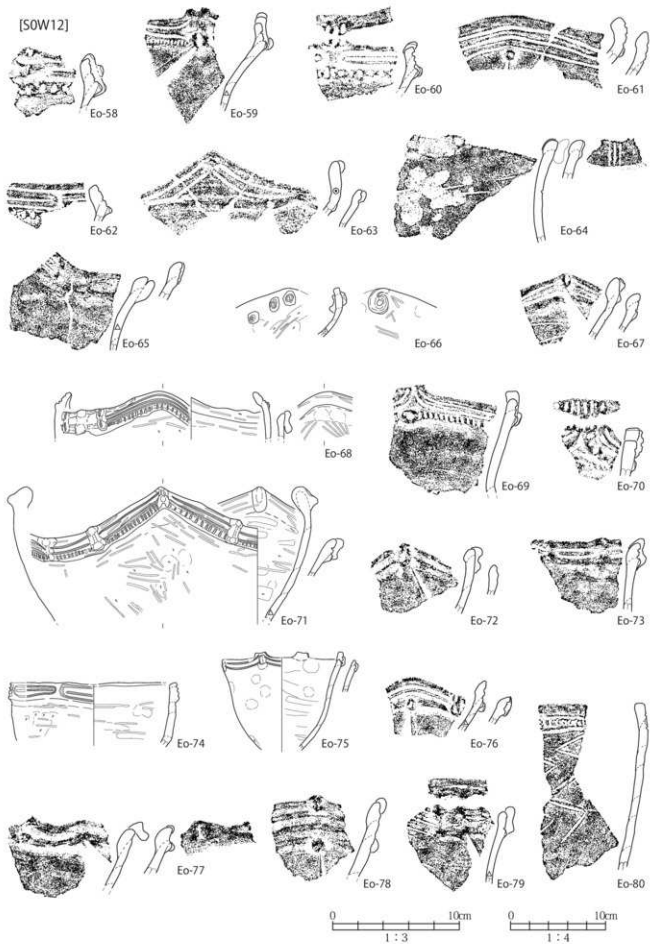


图 35 鹿棄場 E2 出土土器実測図・拓影 (6)

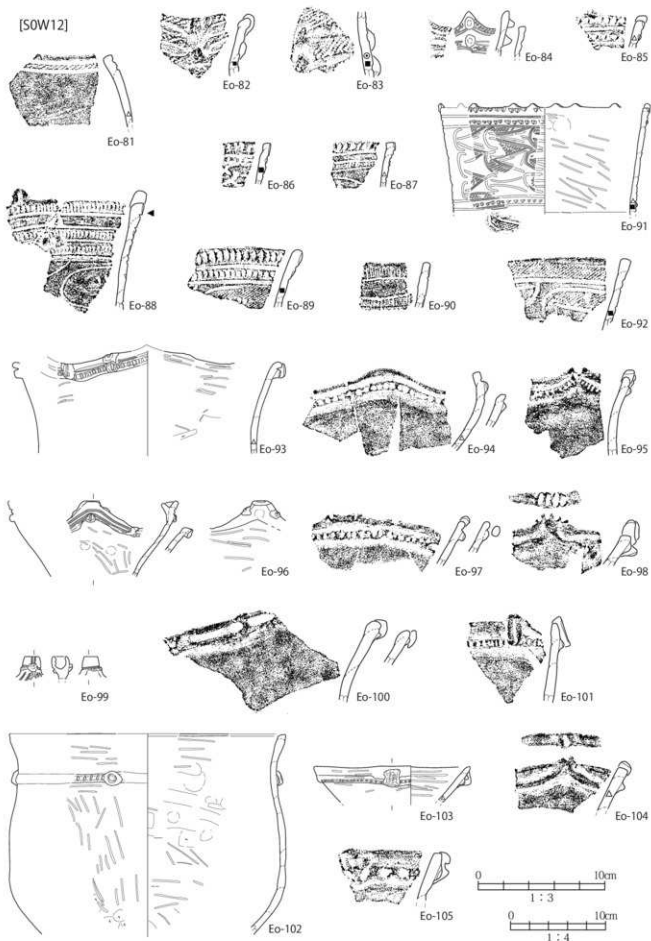


图 36 廃棄場 E2 出土土器実測図・拓影 (7)

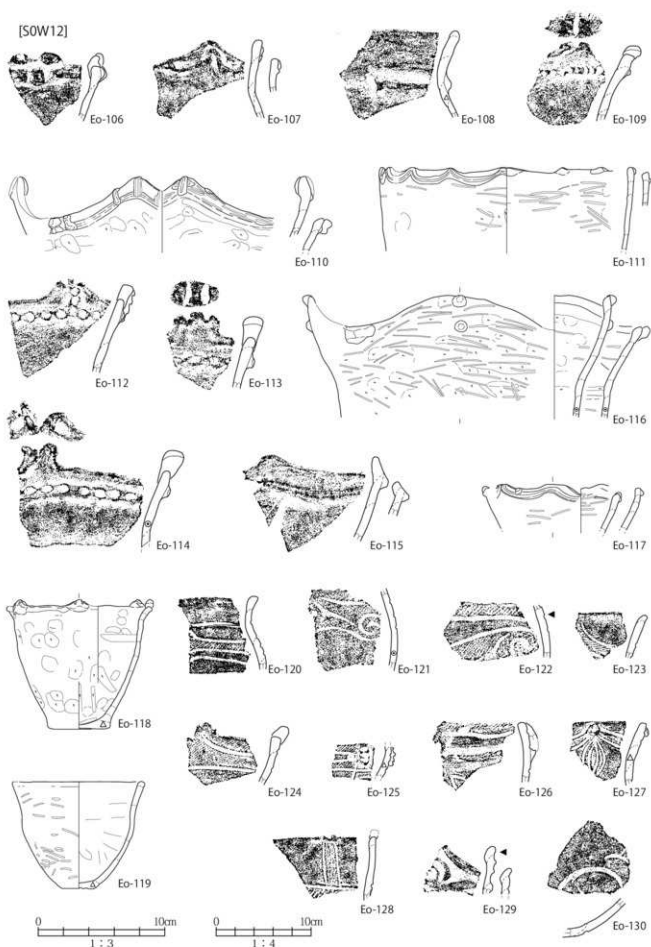
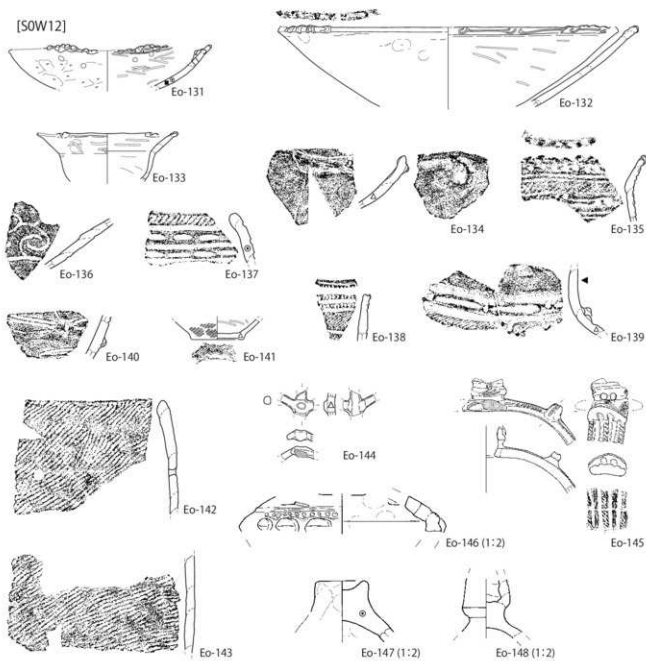


图 37 廃棄場 E2 出土土器実測図・拓影 (8)



[SOW15] (Ep-1 ~ Ep-104)

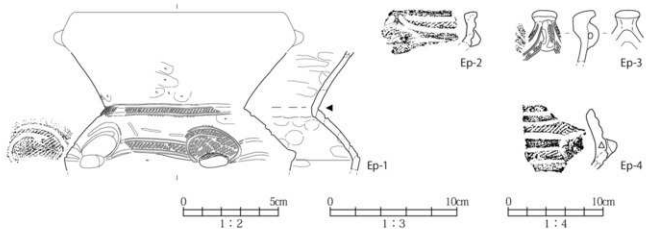


図38 鹿棄場E2出土土器実測図・拓影(9)



图 39 麻葉場 E2 出土土器実測図・拓影 (10)



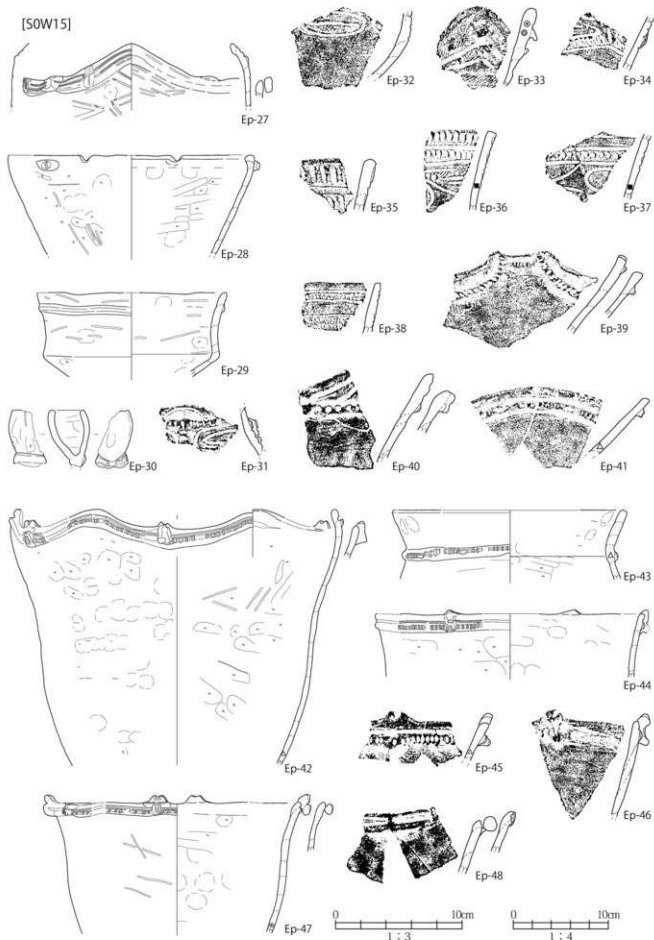


图 40 麻葉場 E2 出土土器実測図・拓影 (11)

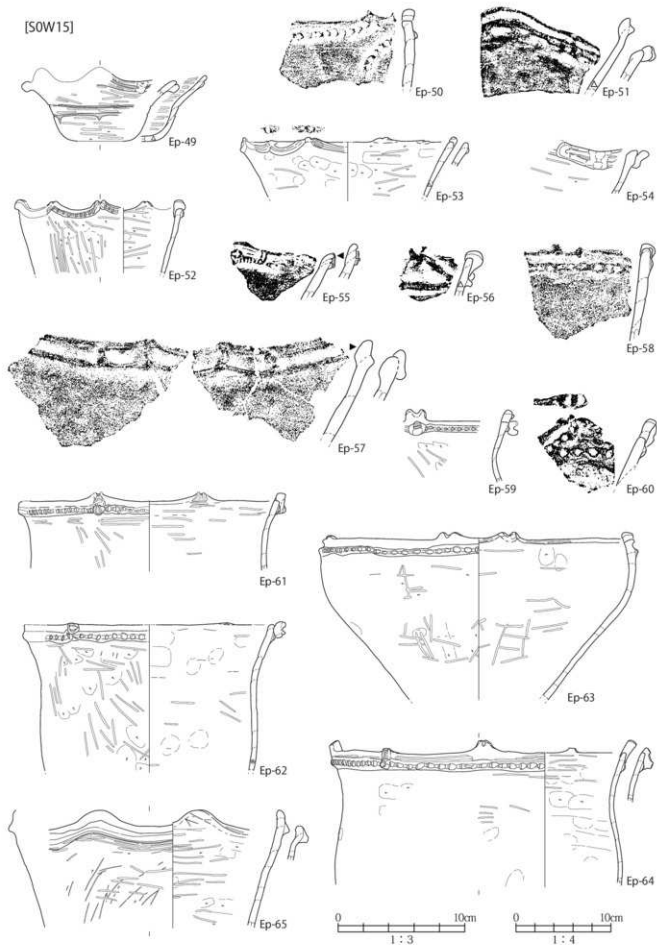


图 41 廃棄場 E2 出土土器実測図・拓影 (12)

[S0W15]

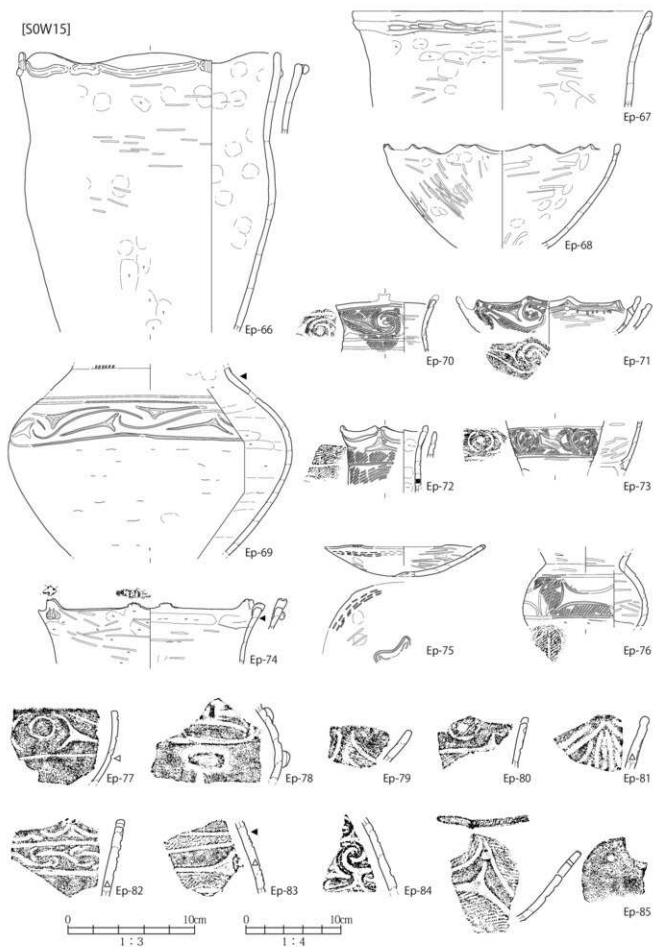


图 42 廃棄場 E2 出土土器実測図・拓影(13)

[S0W15]



图 43 鹿棄場 E2 出土土器実測図・拓影 (14)

[SOW18]  
(Eq-1 ~ Eq-77)

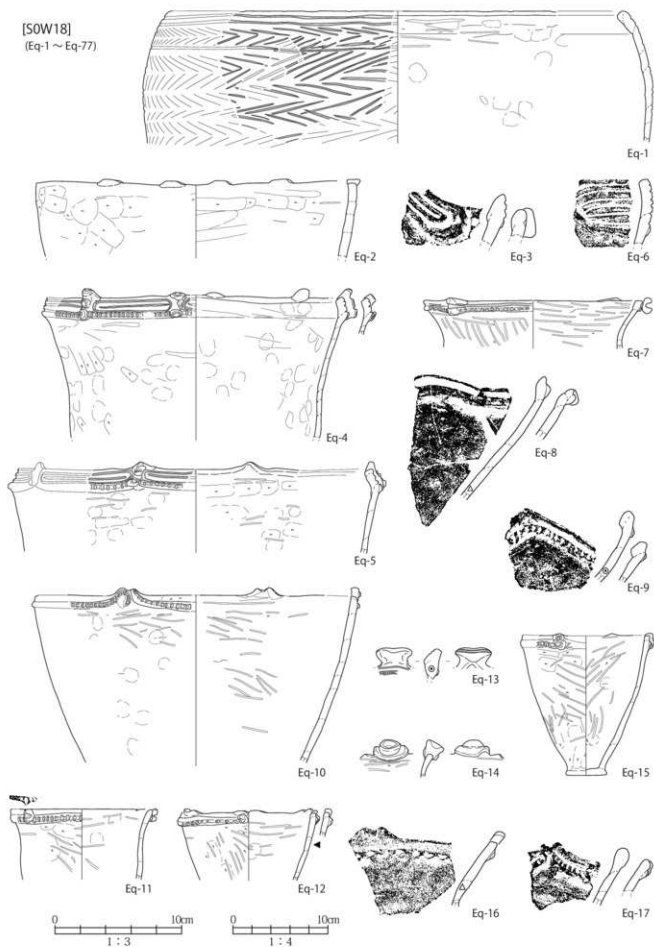


图44 廃棄場E2出土土器実測図・拓影(15)

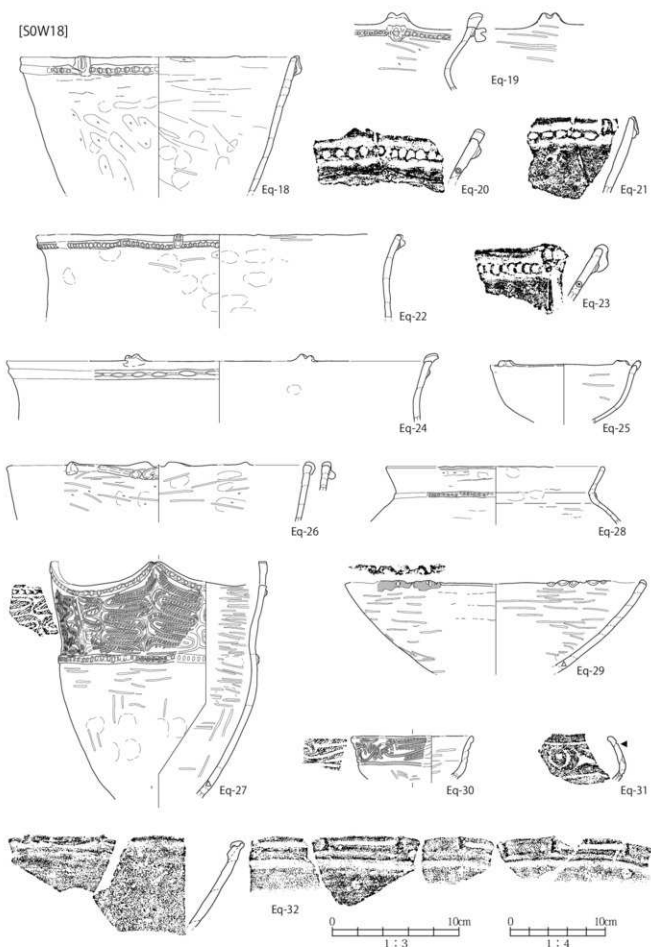


图 45 麻葉場 E2 出土土器実測図・拓影(16)

[SOW18]

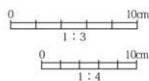
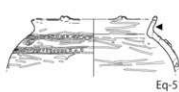
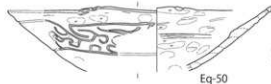
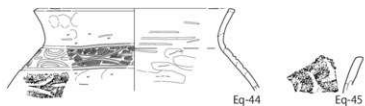
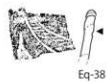
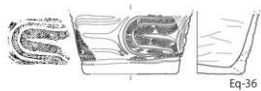


图 46 麻葉場 E2 出土土器実測図・拓影 (17)

[SOW18]



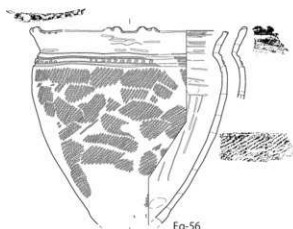
Eq-53



Eq-54



Eq-55



Eq-56



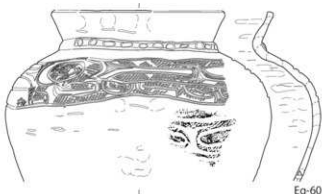
Eq-57



Eq-58



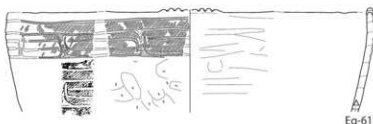
Eq-59



Eq-60



Eq-62



Eq-61



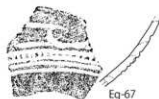
Eq-63



Eq-64



Eq-65



Eq-67



Eq-68



Eq-66



Eq-69



Eq-70



1:3

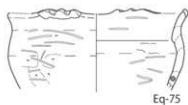
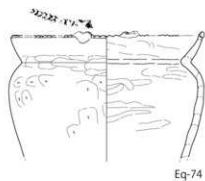
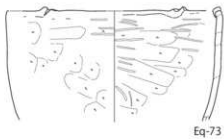


1:4

图 47 鹿棄場 E2 出土土器実測図・拓影 (18)



[SOW18]



[S3W15] (Er-1 ~ Er-50)

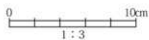
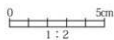
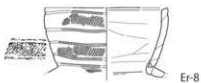
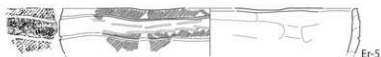


図48 廃棄場E2出土土器実測図・拓影(19)



图 49 麻葉場 E2 出土土器実測図・拓影 (20)

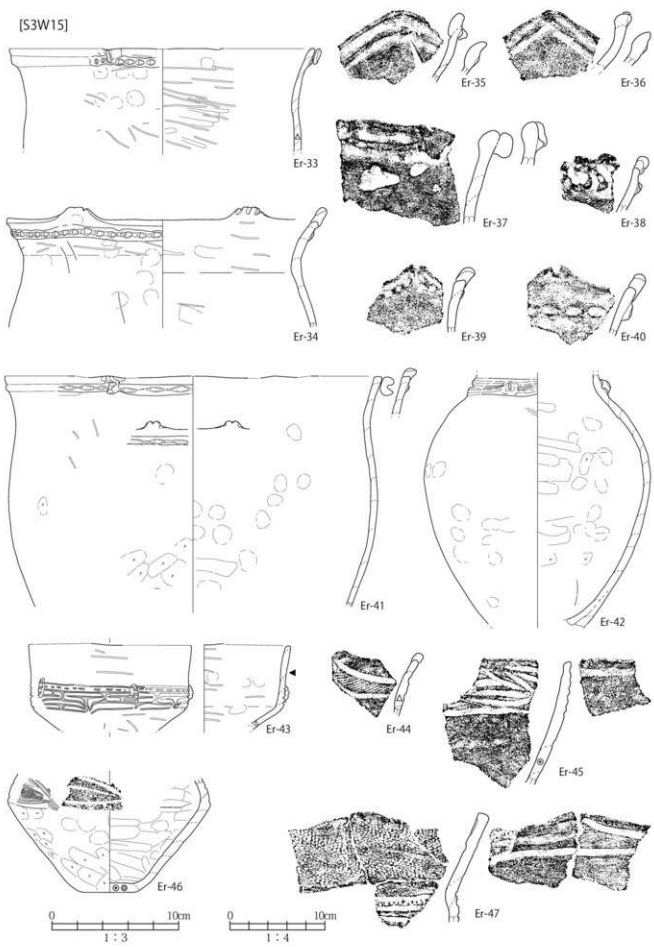
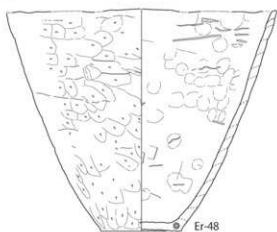


图 50 麻葉場 E2 出土土器実測図・拓影 (21)

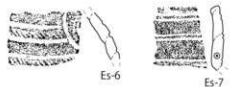
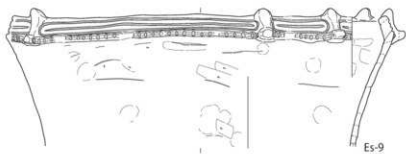
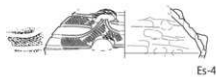
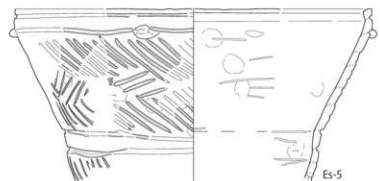
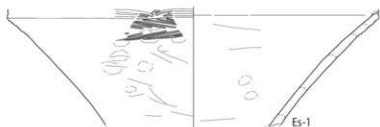
[S3W15]



Er-49

Er-50 (1:2)

[S3W18] (Es-1 ~ Es-64)



Es-7



Es-8

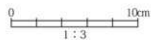
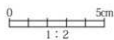


图 51 廃棄場 E2 出土土器実測図・拓影 (22)

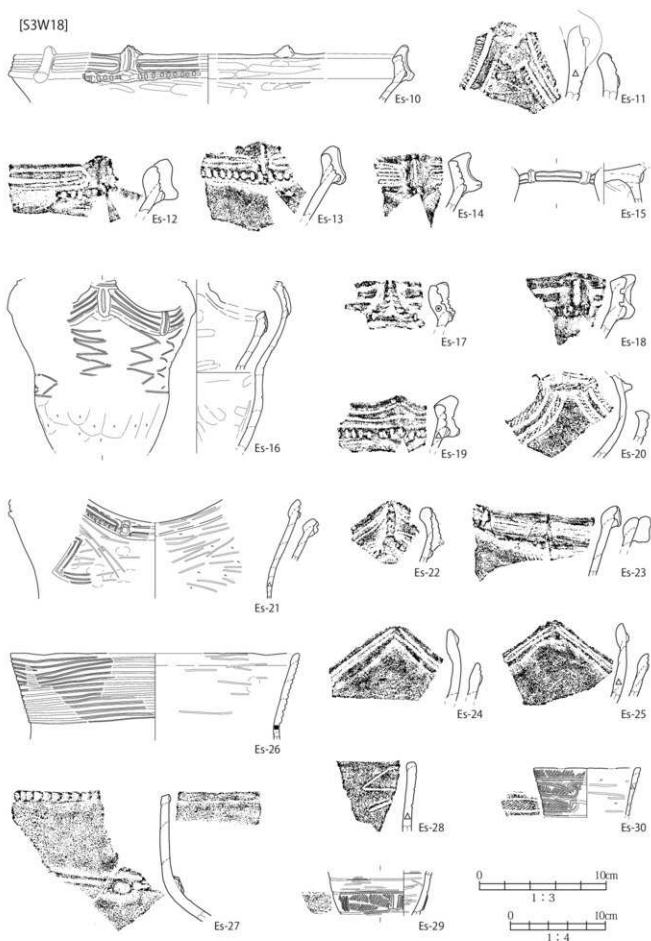


图 52 麻葉場 E2 出土土器実測図・拓影 (23)



图 53 麻葉場 E2 出土土器実測図・拓影 (24)

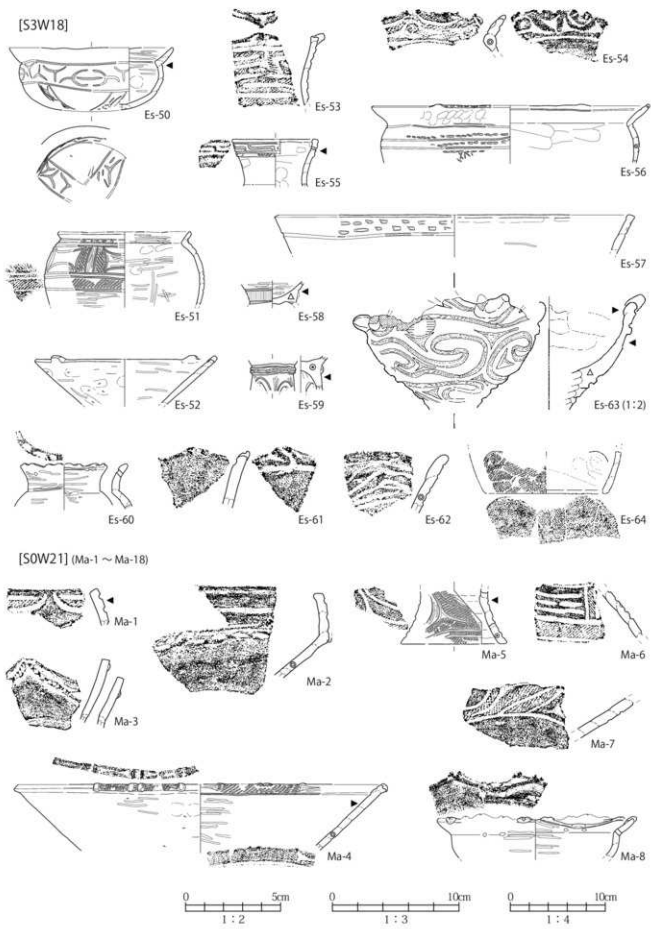


图 54 廃棄場 E2 出土土器実測図・拓影 (25)  
 廃棄場 M1 出土土器実測図・拓影 (1)

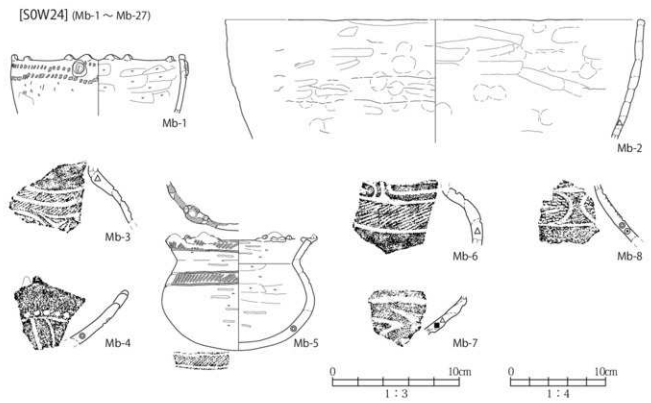
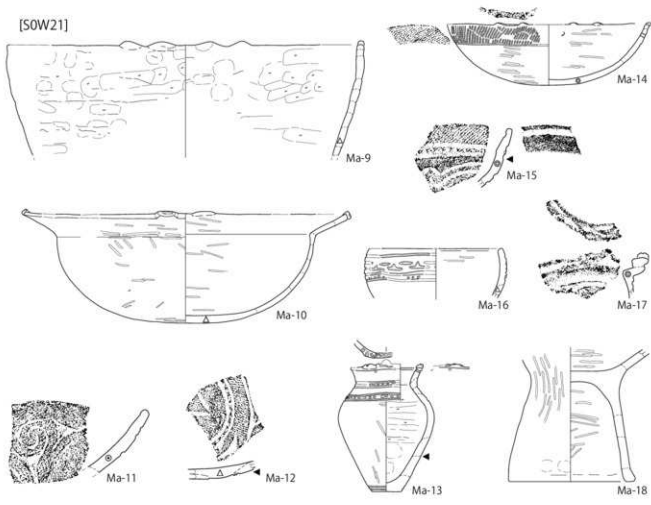


图 55 鹿棄場 M1 出土土器実測図・拓影 (2)



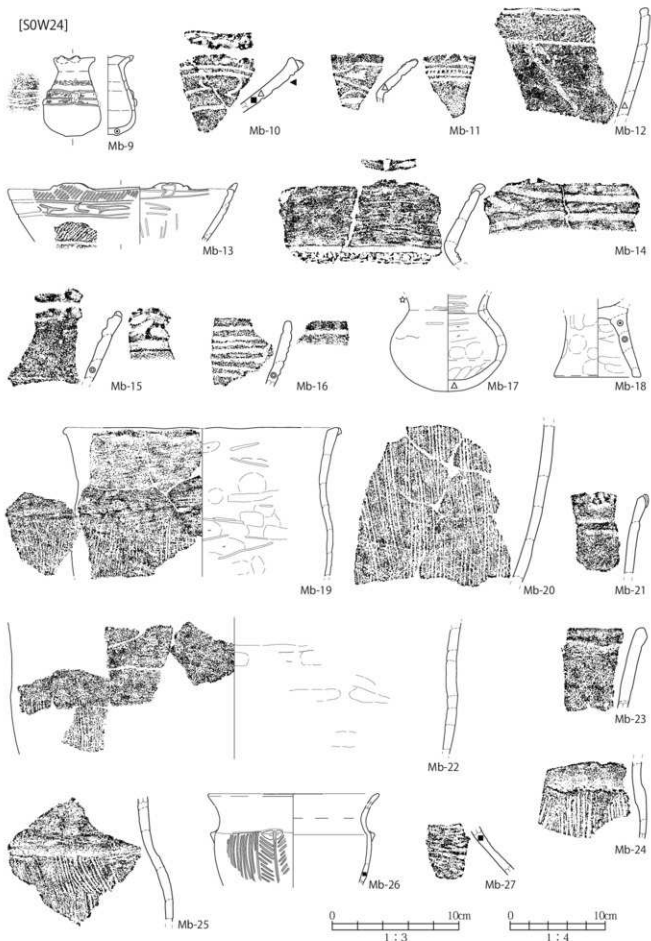


图 56 鹿棄場 M1 出土土器実測図・拓影 (3)

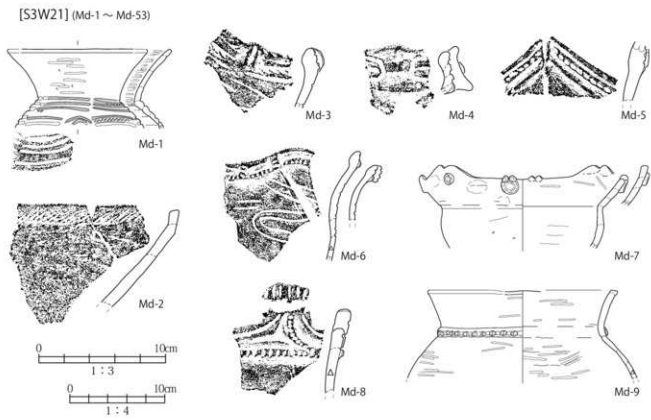
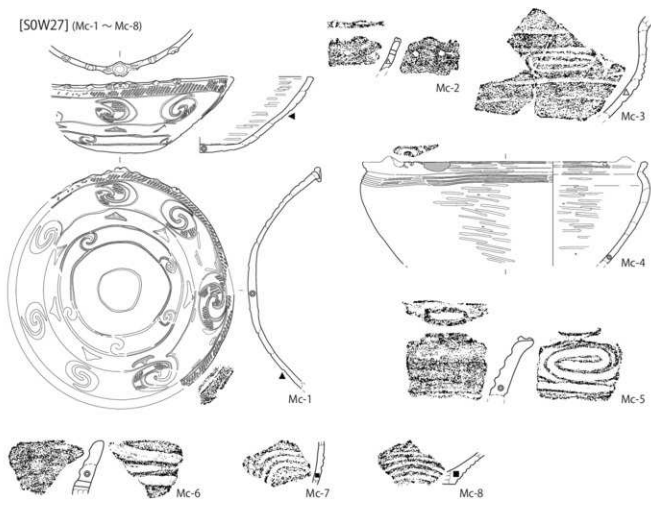


図 57 鹿藁場 M1 出土土器実測図・拓影 (4)

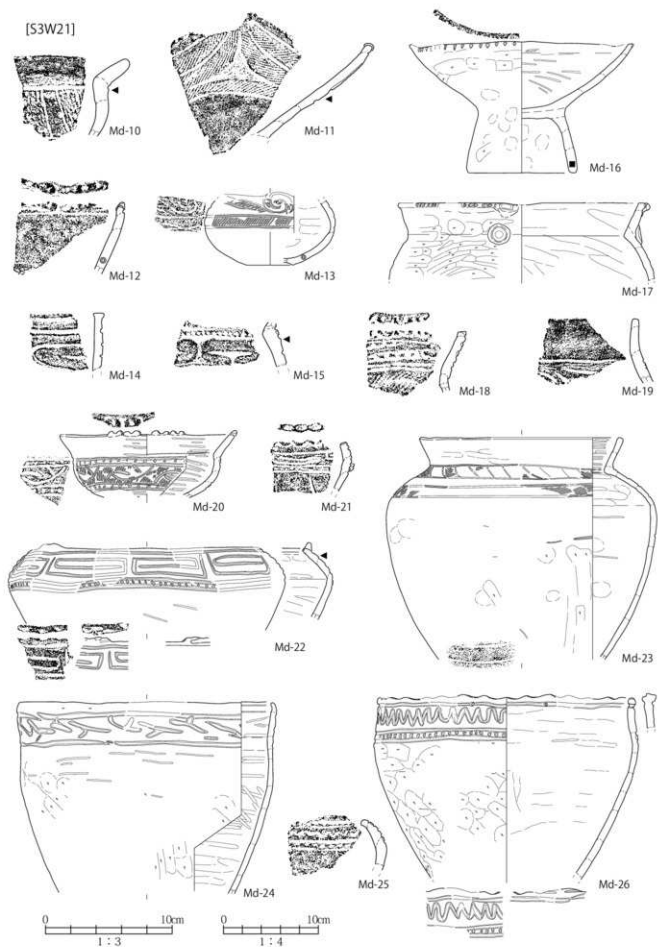


图 58 鹿棄場 M1 出土土器実測図・拓影 (5)

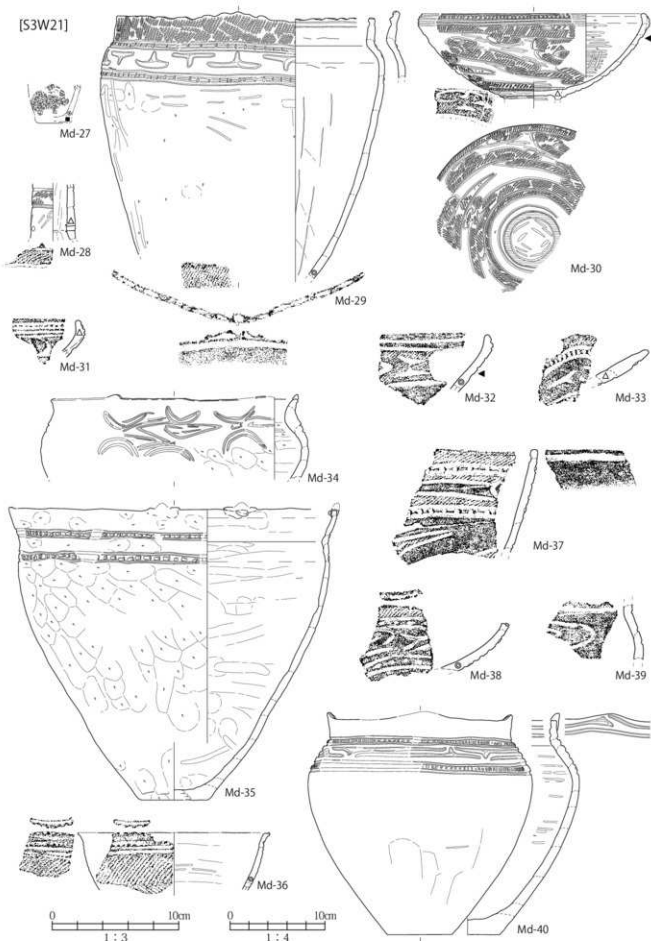


图 59 鹿棄場 M1 出土土器実測図・拓影 (6)

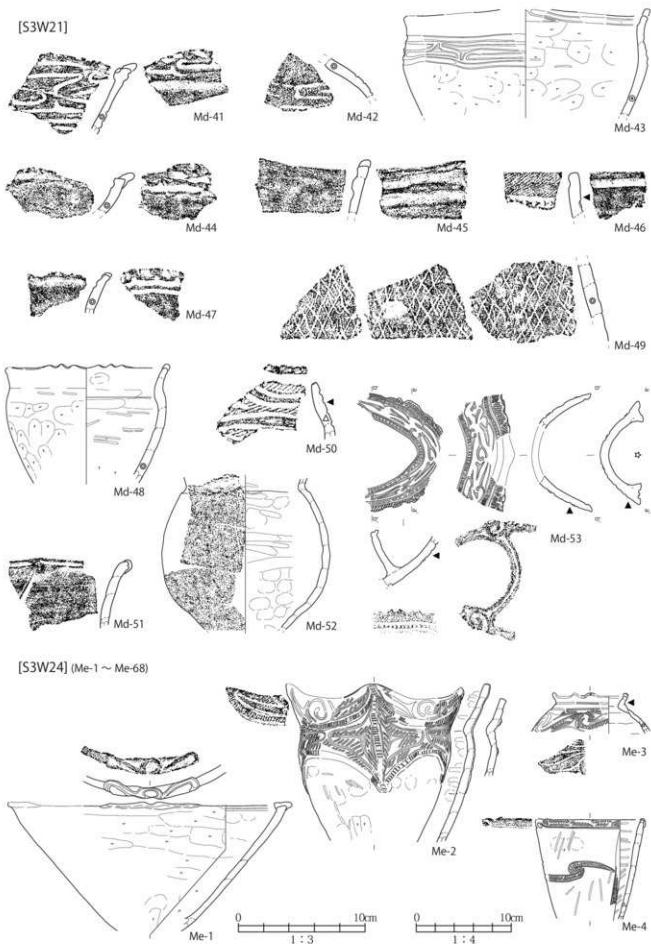


图60 鹿棄場M1出土土器実測図・拓影(7)

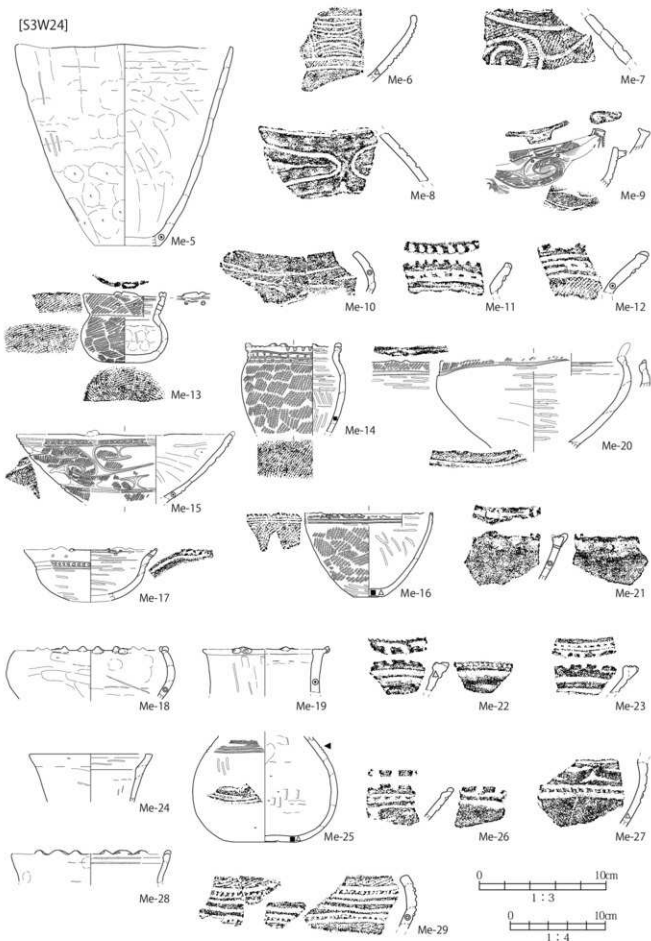


図 61 鹿棄場 M1 出土土器実測図・拓影 (8)

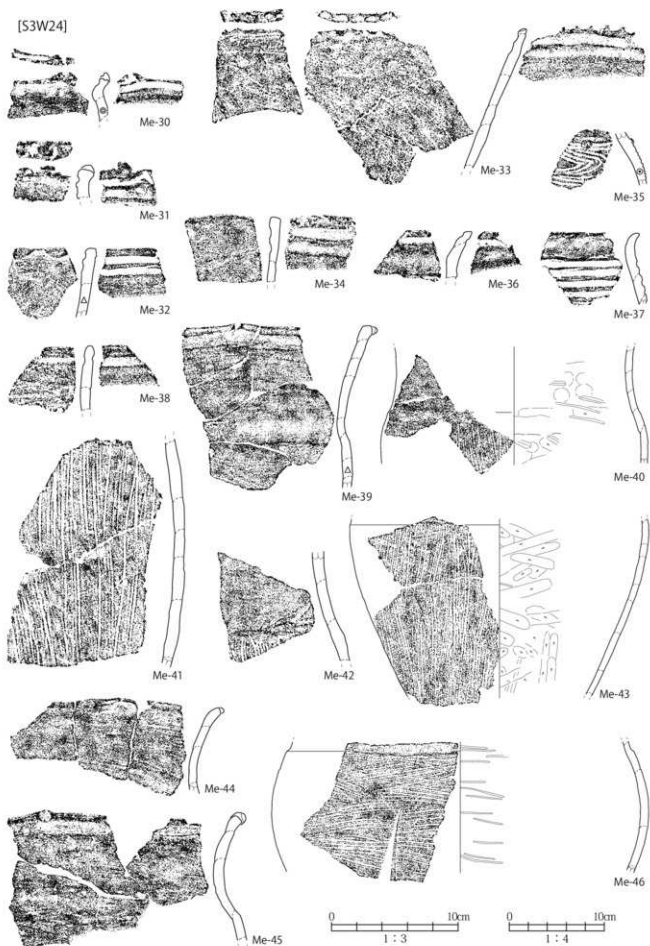


図 62 鹿藁場 M1 出土土器実測図・拓影 (9)

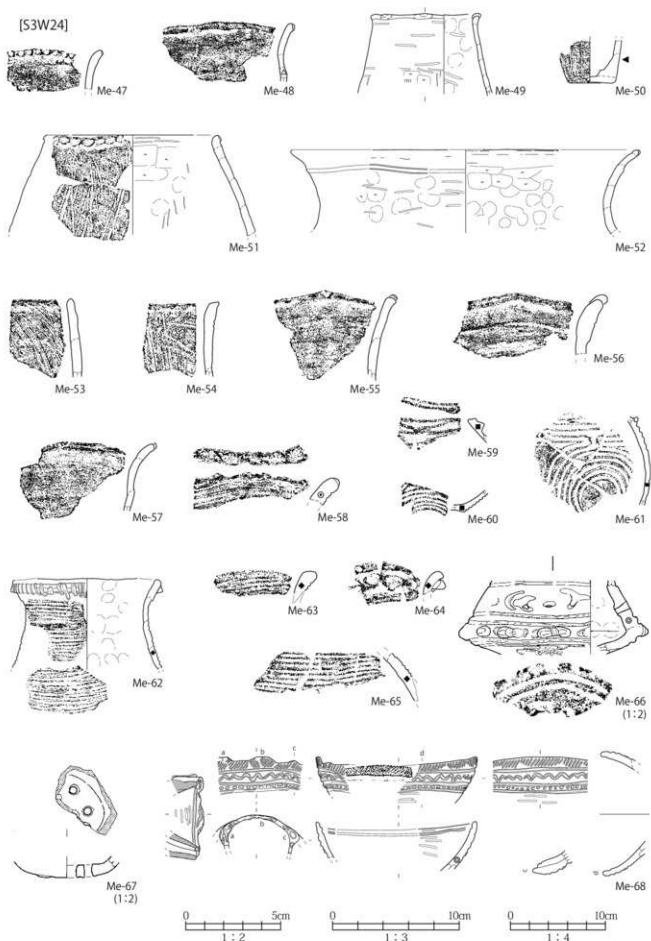


图 63 鹿棄場 M1 出土土器実測図・拓影 (10)



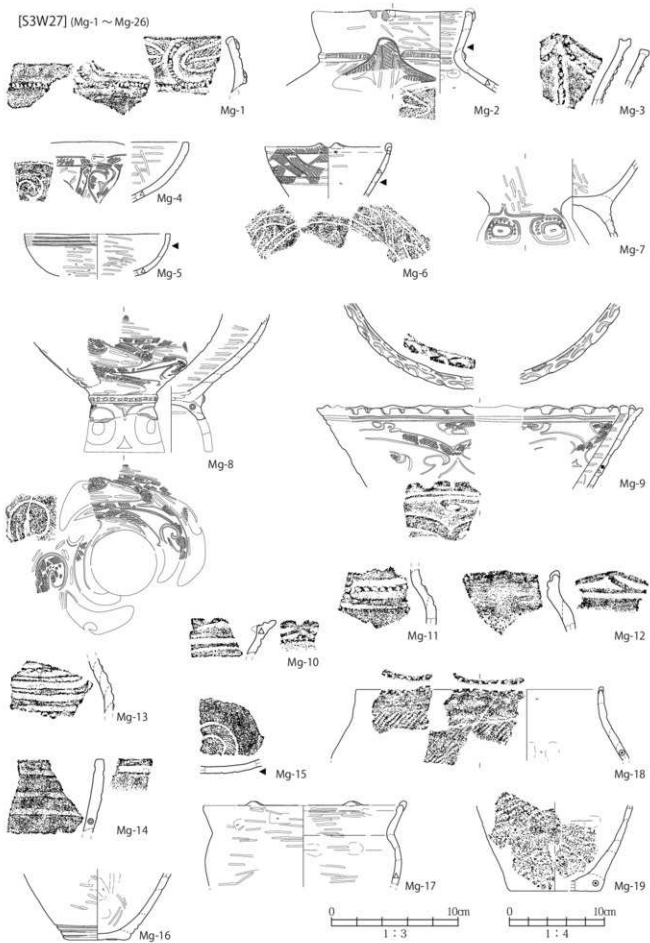


図 64 廃棄場 M2 出土土器実測図・拓影 (1)

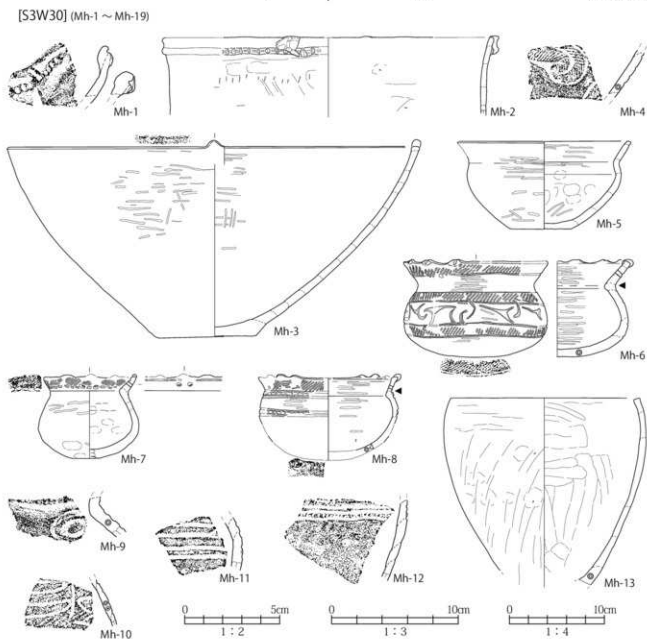
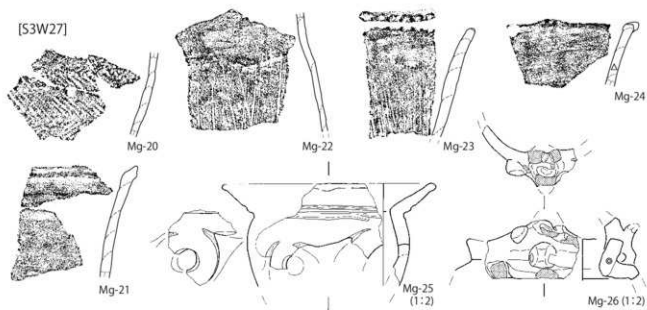


図65 鹿棄場M2出土土器実測図・拓影(2)

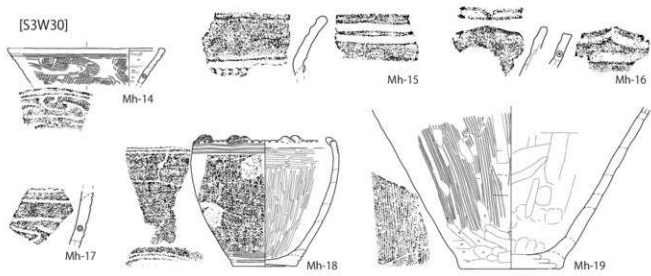


図 66 鹿棄場 M2 出土土器実測図・拓影 (3)

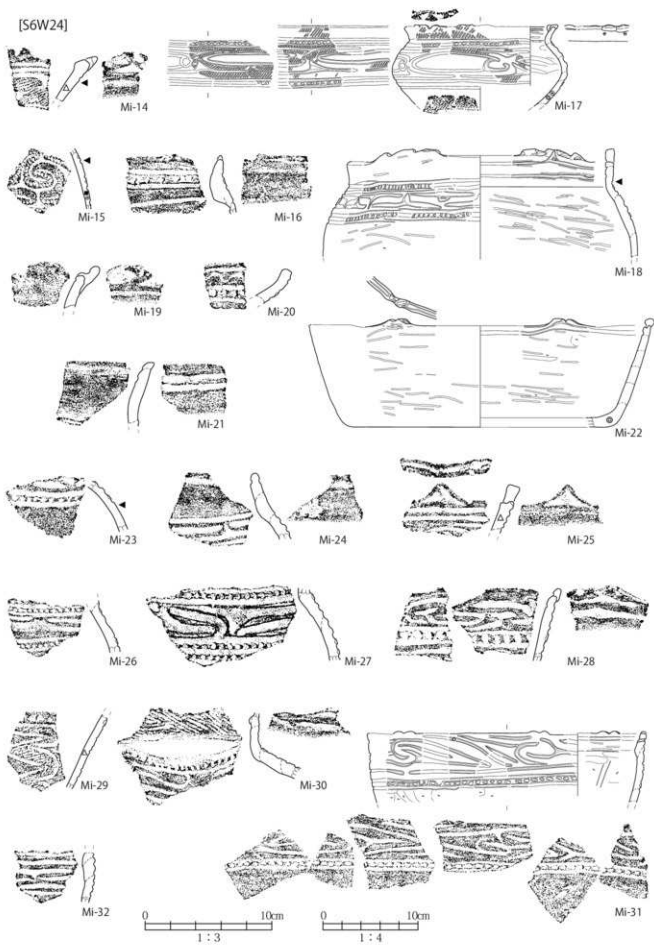


图 67 鹿棄場 M2 出土土器実測図・拓影 (4)

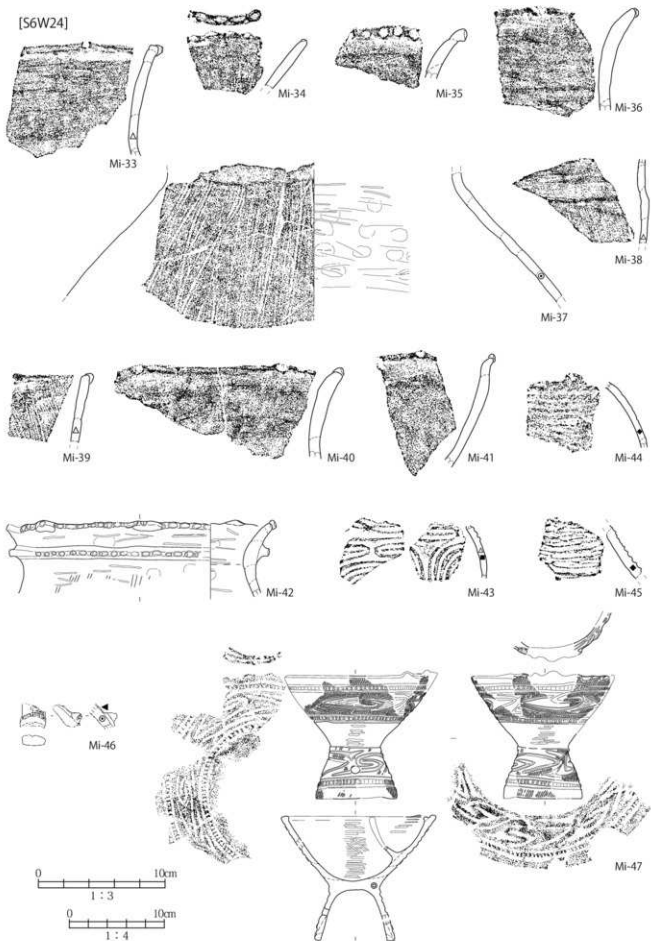


図 68 鹿棄場 M2 出土土器実測図・拓影 (5)

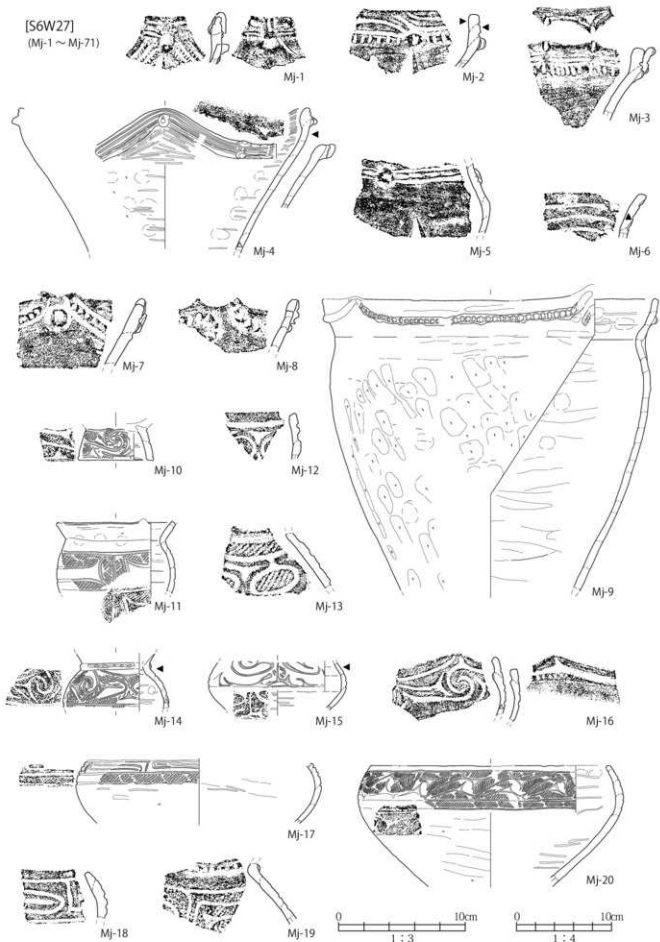


图 69 鹿棄場 M2 出土土器実測図・拓影 (6)

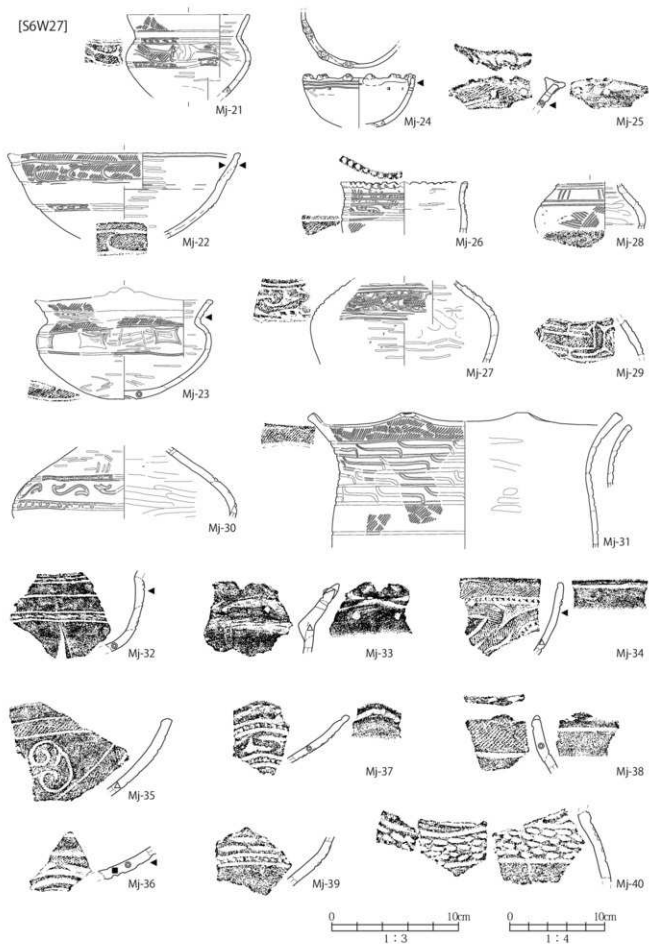


图 70 鹿棄場 M2 出土土器実測図・拓影 (7)

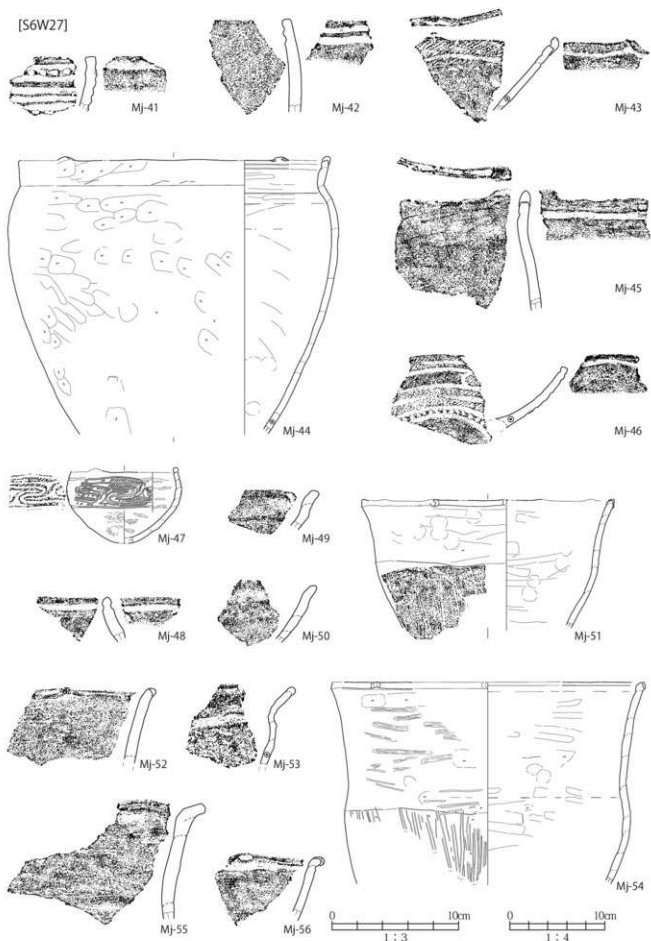
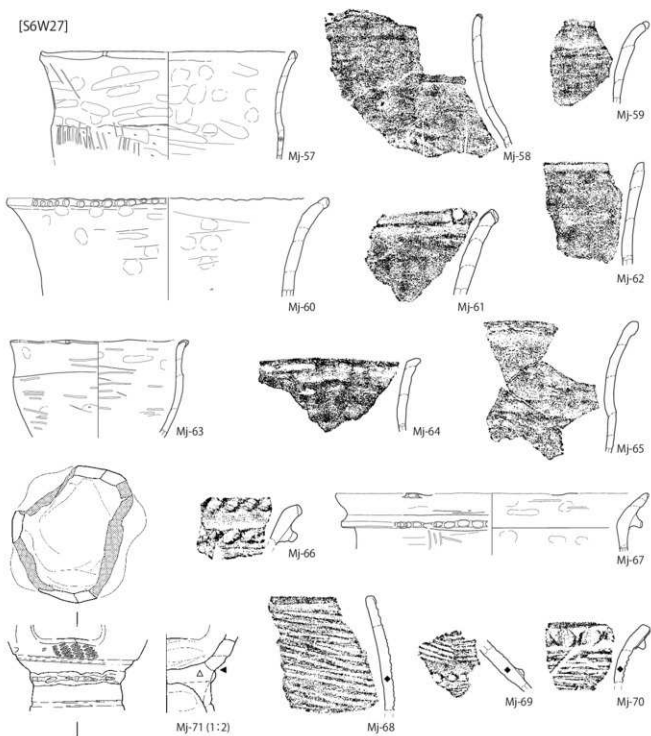


图 71 鹿棄場 M2 出土土器実測図・拓影 (8)



[S6W27]



[S6W30] (Mk-1 ~ Mk-9)

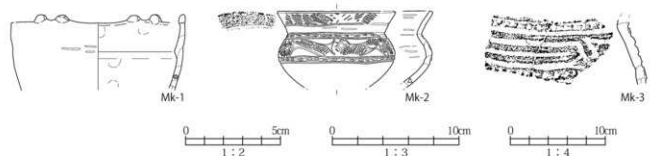
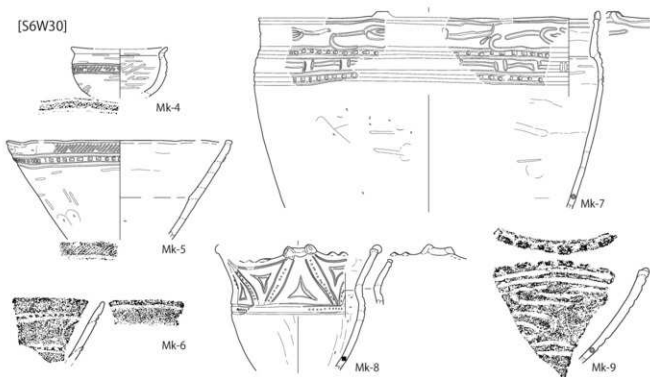


図 72 鹿棄場 M2 出土土器実測図・拓影 (9)



[谷状低地包含層] (NI-1 ~ NI-36)

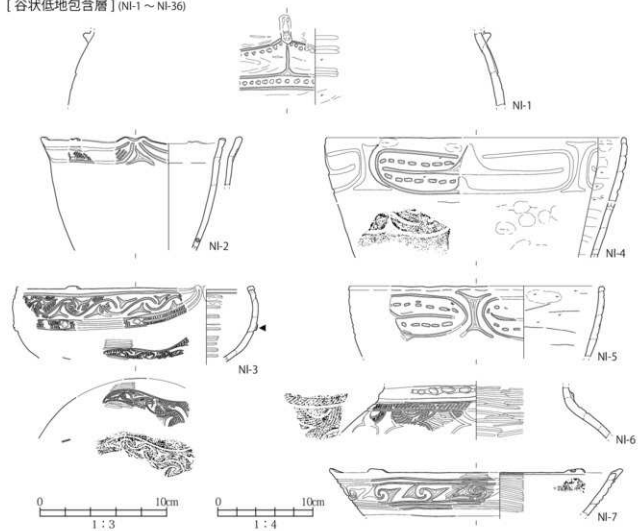


図 73 廃棄場 M2 出土土器実測図・拓影(10)  
谷状低地包含層出土土器実測図(1)

〔谷状低地包含層〕

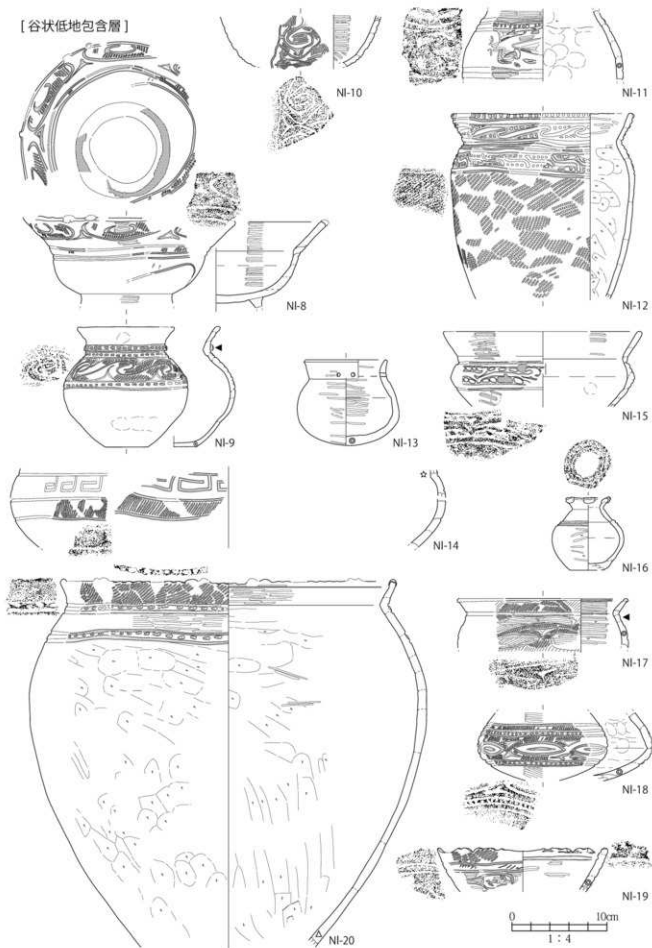
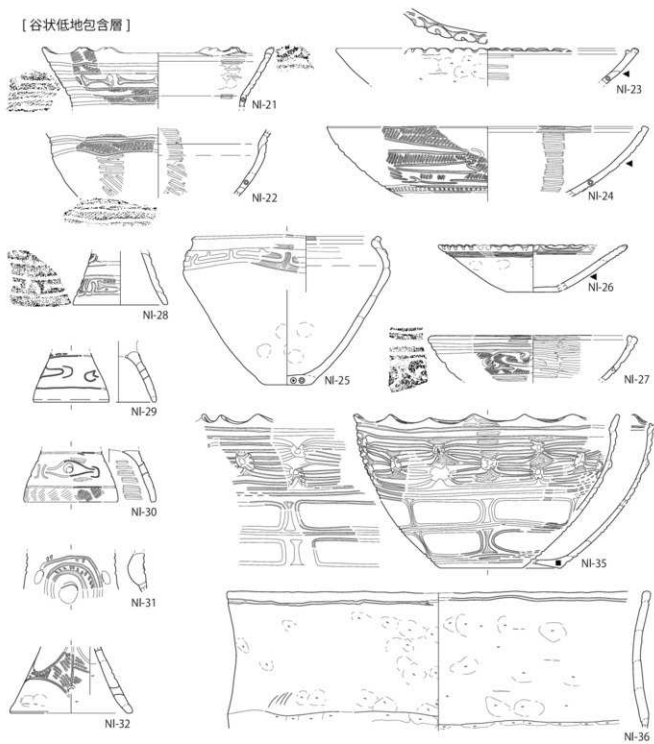


图74 谷状低地包含層出土土器实测图(2)

〔谷状低地包含層〕



〔南微高地包含層〕 (Sh-1 ~ Sh-6)

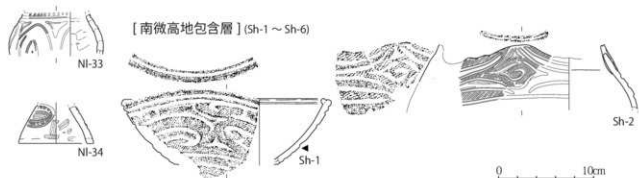
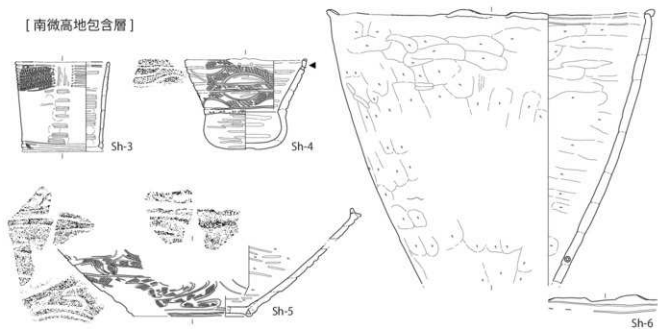


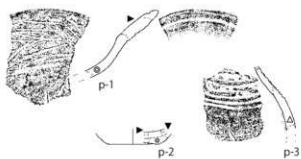
图 75 谷状低地包含層出土土器実測圖 (3)  
南微高地包含層出土土器実測圖 (1)

0 10cm  
1 : 4

〔南微高地包含層〕



〔特記すべき使用例〕(p-1～p-3)



〔異形土器〕(p-4～p-59)

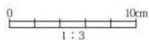
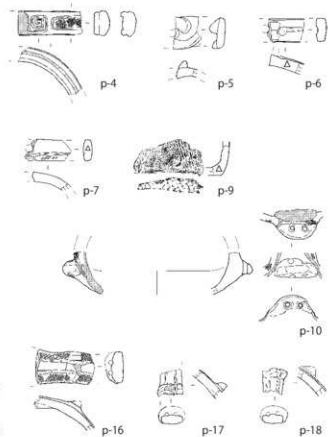


図 76 南微高地包含層出土土器実測図(2)  
特記すべき使用例の土器実測図・拓影  
異形土器実測図・拓影(1)



图77 异形土器实测图·拓影(2)

〔異形土器〕

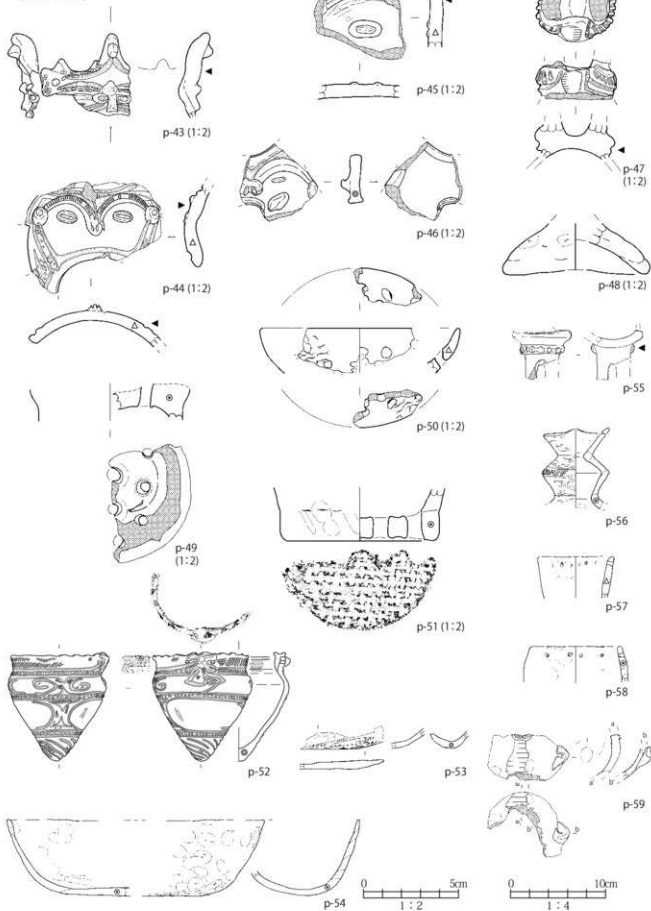


图 78 異形土器実測図 (3)

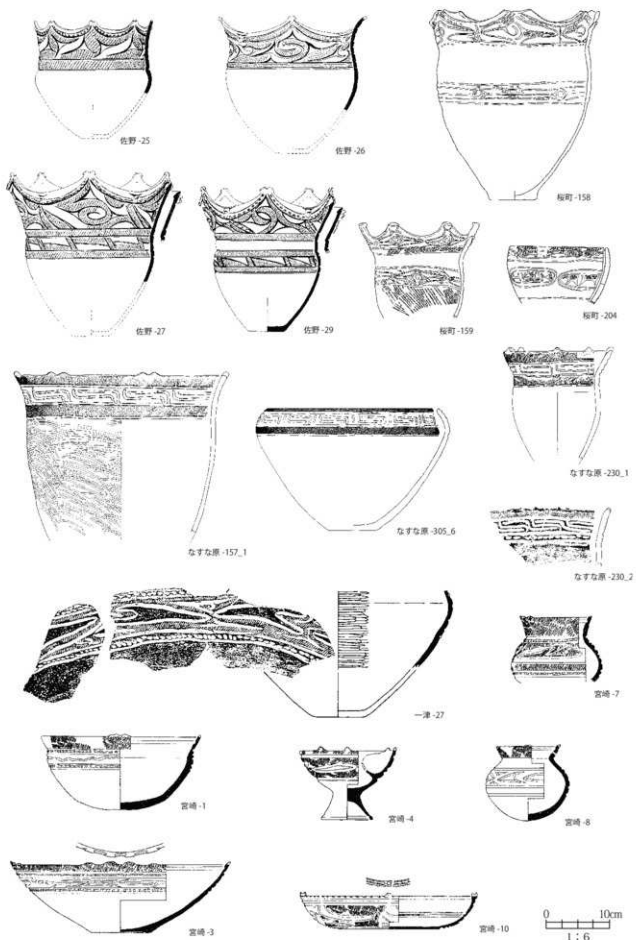


図 79 他遺跡 参考資料



[補遺・麻塚場 W 出土土器及び土製品]

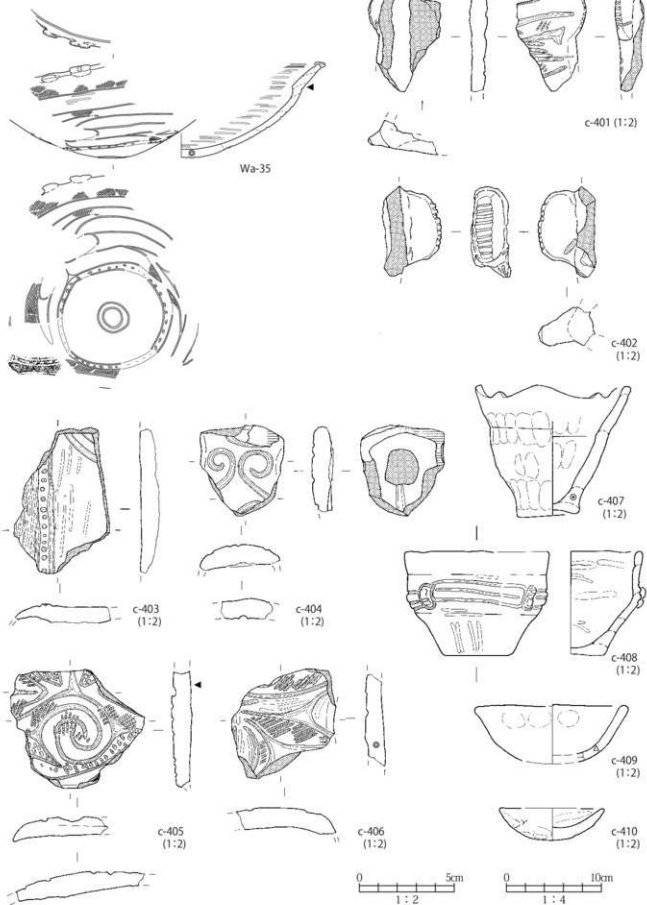


図 80 補遺 1 (土器、土製品実測図)

[補遺・土製耳飾]

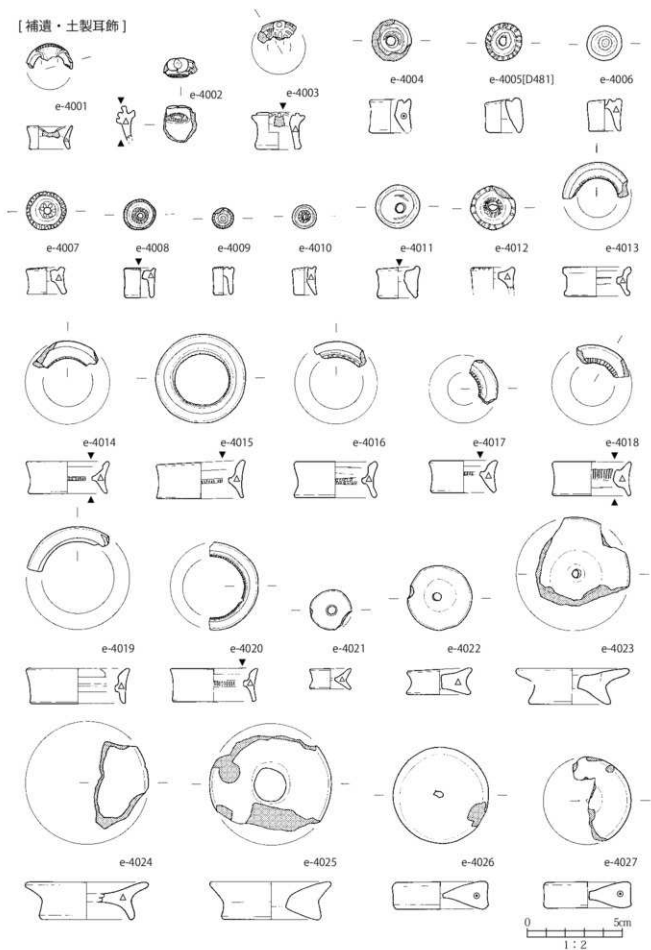


図81 補遺2 (土製耳飾実測図1)

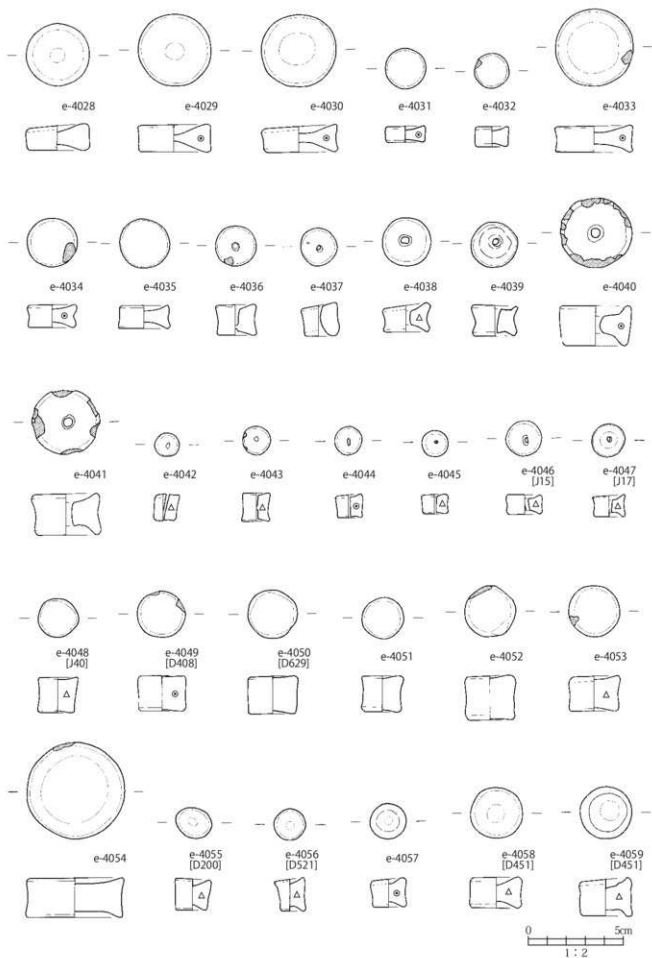


图 82 補遺 3 (土製耳飾实测图 2)

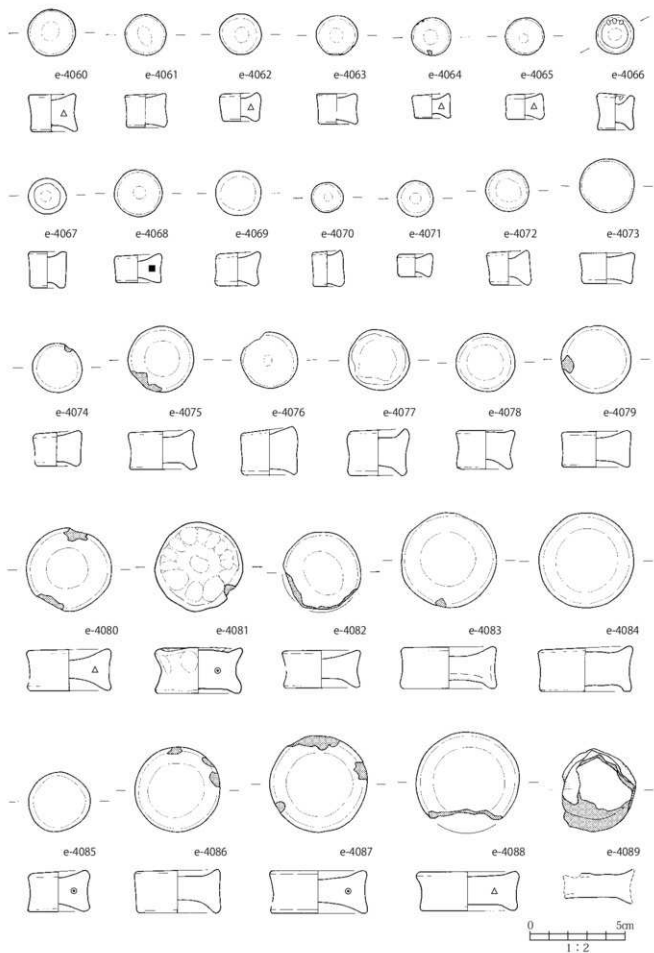


图 83 補遺 4 (土製耳飾実測図 3)

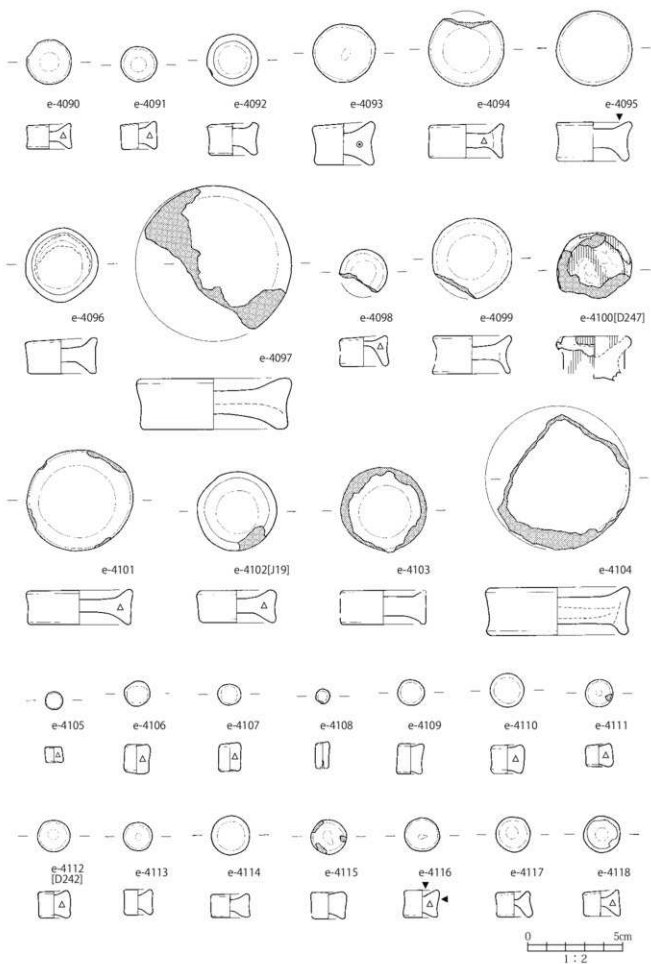


图84 補遺5 (土製耳飾実測図4)

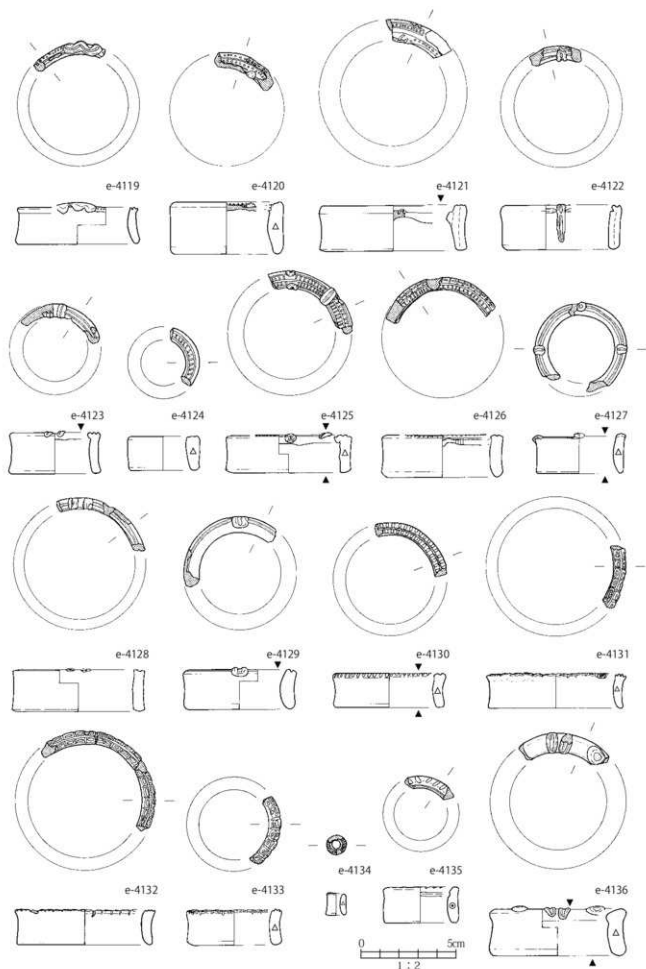


图 85 補遺 6 (土製耳飾実測図 5)

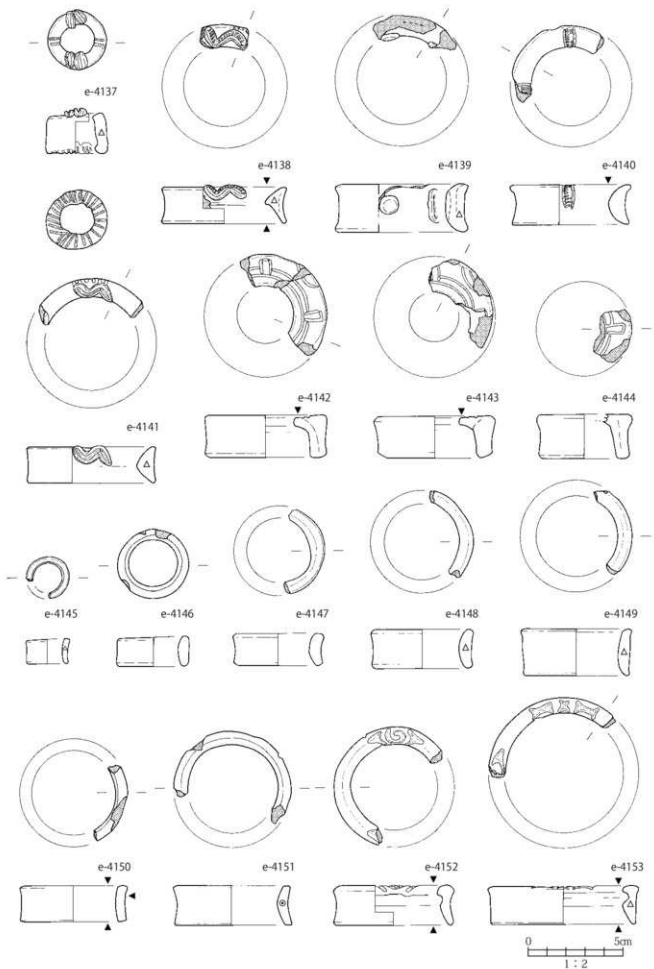


图 86 补遗 7 (土製耳飾实测图 6)

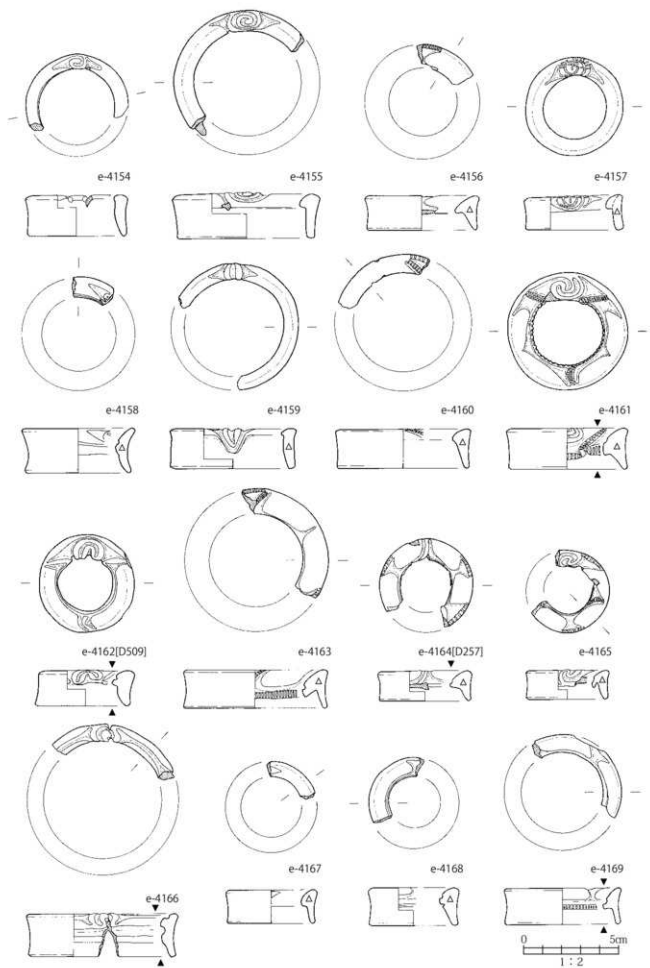


图87 補遺8 (土製耳飾実測図7)



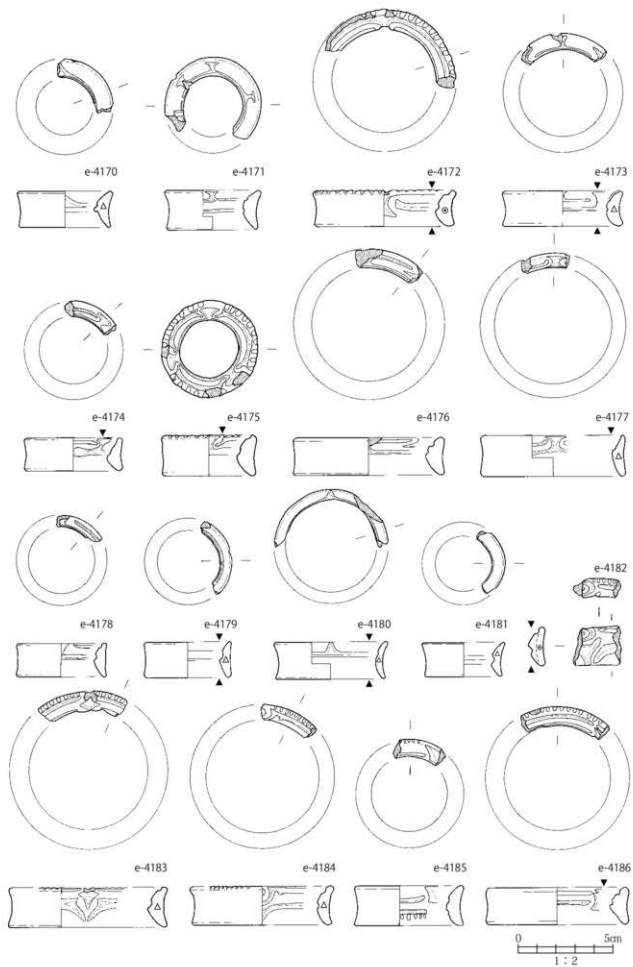


图 88 補遺 9 (土製耳飾実測図 8)

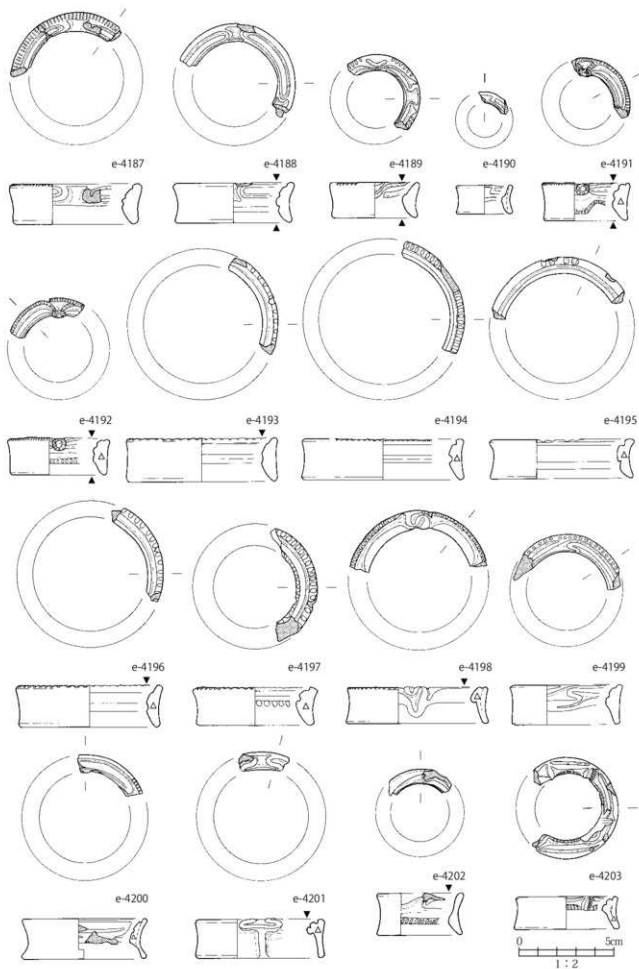


图 89 補遺 10 (土製耳飾実測図 9)

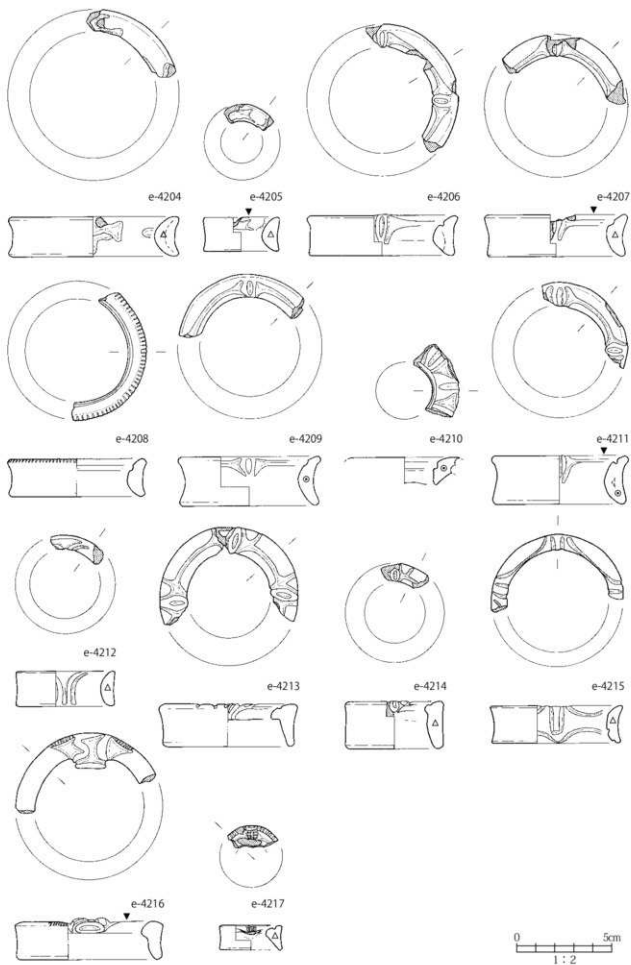


图90 補遺 11 (土製耳飾実測図10)

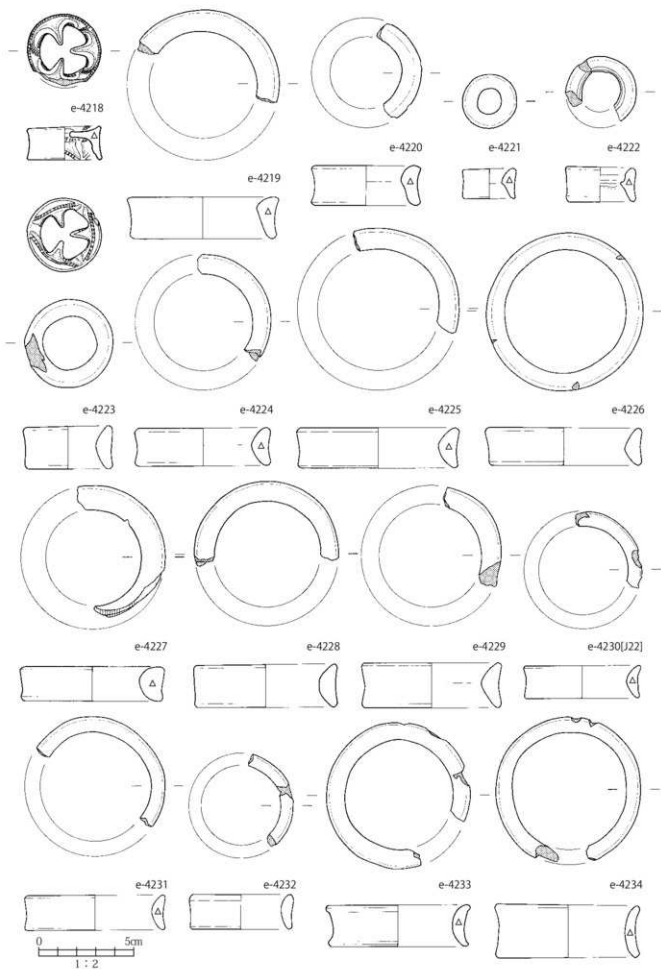


図 91 補遺 12 (土製耳飾実測図 11)

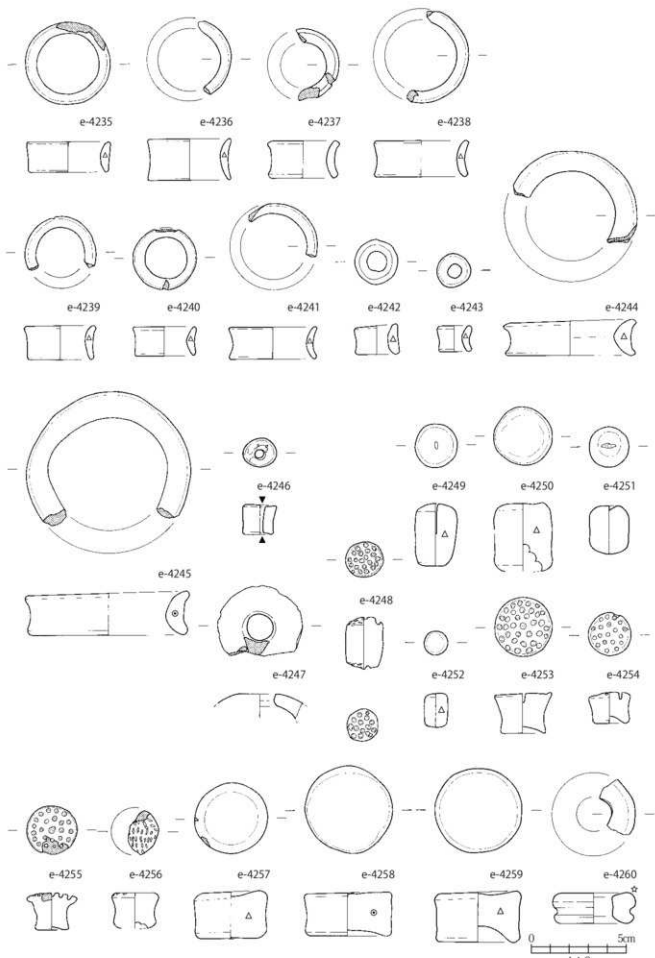


图 92 補遺 13 (土製耳飾実測图 12)